TAE アプローチと暗在性哲学

Journal of TAE and the Philosophy of the Implicit

2025 Vol.1

TAE 研究会

TAE Association

TAE アプローチと暗在性哲学 2025 Vol.1

目次

創刊にあたって
……得丸智子　1

【寄稿論文】
ジェンドリンの言語理論―言語の二面性（duality）と実践性―
……得丸智子　2
質的研究と TAE に関する一考察
……髙木亜希子　14

【受賞に寄せて】
詩作と思索における「ブランク」の活用―TAE をふだんづかいする一つの方法―
……西岡良洋　25
受賞に寄せて―TAE に支えられている「私」―
……本岡美保子　39

【特別寄稿】
ゲーテの TAE
……村里忠之　48
TAE と俳諧
……末武康弘　50
「ちょっとした工夫」で TAE を楽しもう
―遊び心で「インタラクティブ TAE ショートバージョン」をやってみた！―
……諸富祥彦　53

【実践研究論文】
TAE による「ある日本語教師の仕事への向き合い方」分析
―シナリオを書く留学生と指導する脚本家との伴走体験をもとに―
……守内映子　55

【実践報告】
異年齢学級におけるインクルージョンの実現
―Thinking at the Edge による質的分析―
……海老澤佳輝　84

ドラマのシーンと挿入歌で TAE
―フェルトセンスからのイメージの展開―
……佐東香織　98
言葉を大切にすること
―小説『山月記』に対する生徒の感想と教師自身の感想との交差から得たこと―
……佐藤聖子　105
システマと関わりながら生きるという身体感覚について
……山﨑統太　117
メタバースを考える
……山田みょうえ　126

【短報】

自己矛盾を個性として肯定して生きる
……山下美樹　134

【資料】

TAE 文献リスト
……山下佳久　136

創刊にあたって

このたび、TAE 研究会誌『TAE アプローチと暗在性哲学』を発刊する運びとなりました。

TAE 研究会は、ユージン・ジェンドリン（Eugene Gendlin）がメアリー・ヘンドリクス（Mary Hendricks）とともに開発した「Thinking At the Edge（TAE）」の研究および普及活動をおこなっているグループです。TAE は、ジェンドリンが提唱した暗在性哲学（Philosophy of the Implicit）に基づく、身体知を活用する思考法です。

本研究会は、2006 年、得丸智子と山田みょうえが発起人となり活動を開始した「ぽえとりー・ぷれいす」に端を発します。東京九段での「詩とエッセイと哲学の会」を皮切りに、高田馬場、根津・千駄木と本拠地を変え、近年は主にオンラインで、TAE およびジェンドリン哲学の講座やワークショップを提供しています。2008 年からは TAE の質的研究への応用を提案し「TAE 研究会」と名称を改め、坂野加代子が事務局となり「TAE パーソナル講座」を継続開催しています。この間、背景哲学の理解と実践法の洗練に努め、2012 年には、その成果を口頭発表する「TAE シンポジウム」を開始しました。以来、ほぼ毎年開催し、TAE の実践可能性を広く発信しています。

本研究会誌は、「TAE シンポジウム」で発表された成果を中核に、「TAE パーソナル講座」の参加者の TAE 実践を収録しています。「TAE パーソナル講座」では、それぞれの実践者が持ち味を生かした独自の TAE が実践できるよう努めています。その実現のため、講師の得丸はもとより講座の参加者が、相互に率直に助言し合います。本誌に収録されている文章は、いわゆる「査読」を経たものではありませんが、このような背景があることを明記しておきたいと思います。本誌を手に取られた方は、TAE という一つの思考法が、趣味や日常生活での気づきから、いわゆる学術研究まで、幅広いテーマに適応されていることに気づかれることでしょう。これは TAE 研究会のメンバーの多彩さの反映でもあります。長きにわたり、励まし合い知恵を出し合ってきた多くの仲間とともに、本研究会誌の創刊を喜びたいと思います。

TAE 研究会の発足から約 20 年、惜しみなく御助力くださっている村里忠之先生、末武康弘先生、諸富祥彦先生に、ご寄稿頂けたことも、この上ない喜びです。また、論文誌としてまとめあげるにあたっては髙木亜希子先生に多大なご尽力を頂きました。御礼申し上げます。

ジェンドリン哲学の要諦「インタラクション・ファースト（interaction first）」の通り、この研究会誌の発刊が、新しい何かが展開するきっかけとなることを願ってやみません。

2025 年 5 月吉日

TAE 研究会主宰　得丸智子

【寄稿論文】

ジェンドリンの言語理論
—言語の二面性（duality）と実践性—

得丸智子

キーワード
言語理論、二面性（duality）、TAE（Thinking At the Edge）、
容易アクセス、困難アクセス

１．はじめに

ユージン・ジェンドリンは 2017 年に 90 歳で亡くなった哲学者である。心理学者でもあった彼は、「フォーカシング」の創始者として知られているが、生涯を通じて哲学的研究を続けた。国際フォーカシング研究所が運営する「ジェンドリン・オンライン・ライブラリー」には、75 編の哲学論文が収められている。言語の探求は彼の哲学研究の重要な部分を形成している。本稿では、ジェンドリンの言語理論を概観する。

２．言語の二面性

ジェンドリンの言語理論の革新性は、言語の身体感覚的側面に焦点を当てたことである。彼は、言語には人々に共通する一般的な意味を生み出す側面（普遍的な側面）と、個人のための意味を生み出す側面があると主張し、それを「言語の二面性（duality）」と呼んだ（Gendlin, 2018a）。

私が聞く、言ったことや考えたことが何であれ、私が見る、書いたことが何であれ、その語が、私が言いたいことを推進すれば、私はその語を承認したということだ。そうでない場合は、普通、何かを付け加えるし、私の暗在的理解が推進されるまで、付け加え続ける必要がある。

この二面性（語そのものと、私がそれらの語に言わせたかった身体的-暗在的理解）を認識することは、ありふれた普通の経験であり、今あなたに気づいてもらいたいことだ。この二面の推進とは、語（words）と身体的インプライング（bodily implying）の両方である。（Gendlin, 2018a）

この主張は、前半生の主著『Experiencing and Creation of Meaning』に既に見られる。

私たちは、意味を考えることは、その意味の「感じ（feel）」、つまり感じられた意味を必然的に含むことを実証してきた。このことは、考えていることの「辺縁（fringe）」だけでなく、私たちが焦点を当てている意味そのものにも当てはまることを示す。非シンボル的、あるいは前シンボル的意味だけでなく、シンボルが、現に今、考えられているという、その意

味そのものにも適用されることが示されたのである。私たちの結論は、私たちが意味を考えるときには、シンボルと感じられた意味の両方が必要だということである（Gendlin, 1997, pp. 66–67）。

例えば、知っているはずの語を耳にしても意味がわからないという経験は誰にでもあるだろう。書かれた文字を目で追うことができても、その意味が理解できないこともある。こうした経験からわかるように、言語を聴覚や視覚のパターンだと考えるのは間違いである。言語にはそれらのパターンが含まれるが、パターンと意味は別物である。

人間は音声パターンや視覚パターンを感じることができる。ジェンドリンは「パターンはそれ自身を分離することができる」と表現し、それを「パターンそのもの」と呼んでいる（Gendlin, 2018b, p. 156）。パターンは動物の行動にも含まれているが、それを「パターンそのもの」として分離して感じられるのは人間だけである。この能力が言語を発展させた。

しかし、「パターンそのもの」だけが言語なのではない。「語の意味」は、「パターンそのもの」と「身体感覚」の両方があって初めて存在する。ジェンドリンは、二面性を持つ言語においては、「２種類の正確さがある。一つは論理的正確さであり、もう一つは、暗在的正確さである（Gendlin, 2012a）。」と強調する。形式やパターンは、たとえ純粋な論理であっても、単独では機能しないし（Gendlin, 1991, p. 60–64）、次のステップを暗示し、形づくるのは、暗在的複雑性の機能であることを認識することが肝要である（同書, p. 99）と主張する。

さらに、ジェンドリンは両者を相互に作用させることの有用性を説く。

暗在的正確さと論理的正確さには常に大きな違いがある。どちらも他方に取って代わることはできない。論理的な概念は暗在的なものを拡大し、それが新たな概念につながり、さらにそれが暗在的なものを拡大する。両者は相互に拡張し合う（Gendlin, 2009a）。

そして、それを活用する思考法「Thinking At the Edge」を提案した。メアリー・ヘンドリクスと共に思考手順も開発している。

３．容易アクセス

2018 年に刊行されたジェンドリンの哲学論文集『Saying What We Mean』に収録された論文「A Direct Referent Can Bring Something New」に「著者の意向により、未発表論文「A Changed Ground for Precise Cognition」から抜粋・修正した文章をここに加えた」と注記し挿入されている一節がある（Gendlin, 2018a）。「容易アクセス（easy way of access）」と「困難アクセス（difficult way of access）」について述べるくだりである。もちろん、「容易」と「困難」は単純に二分されるものではなく連続しているが、この枠組みを切り口に、ジェンドリンの言語論に分け入っていきたい。

通常の言語使用で、人間の発話の過程は多くの場合スムーズであり、状況に適った発話が即座になされ、状況が推進される。会話は、まずは文化的なパターンとして形成されること

が多い。文化は、その文化に典型的な状況とそこでの言語使用により構成されている。状況は類化された行為（action）の選択肢の束（bundle）であり、語は、その状況の束における標準的な使用法、標準的な意味を持ち、身体が直面する新たな状況において、それを持ち込み標準的なストーリーを推進しようとする。その標準的なストーリーのパターンが、状況を推進しようとするパターンとして機能可能な場合は、口を開けば句（や文）がスムーズに出てきて状況が推進される。（Gendlin, 2009b）

しかし、いくらかでも、まとまった話をするとなると、時々、言い直したり、口ごもって言葉（語）を探したりしながら続けるだろう。その時、私たちは身体の内側に注意をむけ、言葉を繰り出そうとする。身体に暗在するまだ言葉になっていない「感じ」を機能させようとするのである。

会話がスムーズに続くと、話している相手は「もう少し詳しく話してくれる?」とか「なぜ、そう思うの?」などの質問をしてくるかもしれない。すぐに答えられず立ち止まる。また口ごもる。ジェンドリンは、口ごもる、つまり、言いたい語が出て来ないとき、「スロット」ができるのだとモデル化する。再び話し始めるとき、質問されるまでは考えていなかったことが次々と湧き出てくる。ある語がスロットを作ると、それまでは別の意味で使われていた語も含め、別の語によってさらに多くのことが語られるようになる（Gendlin,1991, p. 54）。

ジェンドリンは、「スロット」は未分化な多様性だと言う。

私たちは、それらを未分離な多様性として考える。私たちは、複雑さからのさらなる区別が、私たちの最初の区別（分離、対、未分離）を開くことができることに驚かない（同書, p. 92）。

未分化な多様性から、語となり分離される部分が生じるとき、未分離なままで語にならない部分も変化する。「言いたい感じ」それ自体が、変化していくのである。変化といっても別物になるような変化ではなく、同一であることを保ちながらより精緻になるような変化である。

語（words）とスロットは暗在的にお互いを変えている。来た語は、他の語によって作られたこのスロットで、ここで機能するように変化して届く。つまり、ある語がやってくるということは、その語と一緒に使えたり使えなかったりする他の語との何千ものつながりを暗在的に包含している。一つの語が来るとき、それらが暗在的に働いているのである。暗在的複雑さが機能し続けるような言うこと（saying）や概念の中で、私たちはそこからさらに多くのことを語ることができる（同書, p. 55–56）。

「言いたい感じ」、すなわち、身体に暗在する未分離な多様性を感じていると、その変化を語る句（や文）が暗在的にアレンジされ口から出てくるのである。言語は「経験のあらゆる側面から文を形成する能力として暗在する」（Gendlin, 2009a）、「言語は人間身体に暗在するが、辞書のように単語が一つ一つそこにあるのではない。文章を作る能力として暗在する」（Gendlin, 2018a）と述べられる。言語は人間身体に経験の側面から（句や）文を形成

する能力として暗在しているのである。

状況に合う文が身体から出てくるとき、うまく言葉（語）にできない「スロット」が適切な（句や）文で充足され、身体感覚が推進される。形式（「パターンそのもの」）と暗在的複雑性（身体プロセス）がお互いを変化させながら共に働き、経験の複雑さが機能し新しいパターンが立ち上がったのである。新しい語のつながりが「変化して届く」。そこでは、既にある語が新しい意味で用いられる。

それと同時に、分離されなかった未分離な多様性もまた、その全体が変化する。新たな未分離な多様性に照合すると、またその変化を語る（句や）文が出てくる。このような未分離な多様性に照合しながらのスムーズな進行が、「容易アクセス」である。「口ごもり」による「スロット」の形成と「パターン」の充足による推進は、日常の言語使用で展開しているプロセスである。

４．ジェンドリンの多層モデル

ジェンドリンは、その文の決定性は身体に由来するという。

この到来をコントロールすることはできない。語が来なければ、それを待つしかない。（略）。それは身体的なものであり、空腹、性欲、感情、涙、睡眠がどのようにやってくるかと大差はない（Gendlin,1991, p.55–56）。

その決定性は、様々な状況を推進した際に身体に登録（register）された「効果」（impact）である。それを説明するために、ジェンドリンは、著書『プロセスモデル』で、細胞・植物（身体プロセス）、動物（行動）、人間（言語）、新しい種類の人類（直接照合体）の各層が相互に影響し合いながら積み重なって発展するモデルを提案している。明示的であれ暗在的であれ言語を含む（「二重化」と表現される）人間の行動は「行為（action）」と呼ばれるが、このモデルでは動物の「行動」や人間の「行為」は、基底層である「身体プロセス」の要求を満たすためにおこなわれる。

人間の身体がインプライ（暗在的に含意）する生きるための次の一手は、多くの場合、私たちが言いたいことである。話すことは、さらなる身体プロセスの特殊なケースなのだ。（中略）人間は話すことによって、食料探しを部分的に早める。植物は地面から吸収し、動物は空腹と摂食の間に食物探索を挟む。行動は身体プロセスの特殊なケースである。食物探索のひとつひとつが、最終的な摂食の完了を暗示する空腹の特殊なバージョンなのだ。（Gendlin, 1993）

ジェンドリンは、身体は「環境」と相互作用するものとモデル化し、言語が暗在する人間の環境を「状況」と呼び、身体に対する「環境」（人間の場合は「状況」）の要求を「不在（absence）」と表現する。人間は、置かれている状況の「不在」を「充足」するために言葉（語）を使い、状況を推進しながら生きる（Gendlin, 2018b, p. 15）。この「充足」されたときの身体的感覚が、身体的効果（impact）である。

身体的効果は身体に刻まれる。その様相をジェンドリンはクラスター（cluster）と表現する。ジェンドリンの説明によると、クラスター（房）とは、相互に影響し合う分離した細部を保ち、一体としてのまとまりを成す様相である。クラスターでは、何かが実際に起きたり起きなかったりすることで細部の可能性が変化し、それがまた別の細部の可能性を変化させるというふうに相互に影響し合う。一つの変化が多くに影響し、多くが影響し合って一つを決定するような様相である。行動空間での動物の行動や、言語と行動が相互影響する空間（「二重空間」と呼ばれる）での人間の行為（言語を含む行動）では、 物事のあり方や人間関係の先の先までの可能性が、今、どう行動するかしないか、何を話すか話さないかを決める。ジェンドリンは、例として「茹でた卵は焼けない」「誰かを蹴るとその人を愛撫できない。または、愛撫は今や慰めになる」などを挙げる（Gendlin, 2012a）。

クラスターは、動物においては行動可能性であり、人間に おいては行為可能性である。身体において細部で相互影響し合うクラスター全体から、状況の要請に応じた次の一手が形成される。人間の場合、そのとき生来の高いパターン形成能力が働き長いパターン連鎖が生成される。このパターンが状況に応じた句(や文)の生成を可能にする。さらに、そのパターンの要請に「出会う」よう、句(や文)の中での語の意味が決定される。現代言語学では、句や文は決まった意味を持つ単語（ユニット）の組み合わせによって作られるという考え方が主流であるが、ジェンドリンは、言葉（語）は人間の身体からすでに語用論的（pragmatically）にも文法的（grammatically）にも、状況に合わせてアレンジされて出てくると主張している（Gendlin, 2012b）。

ジェンドリンはこの過程を、著作『A Process Model』で、未分離な身体感覚パターンがクラスターを形成する側面交差（lateral crossing）と、分離可能な「パターンそのもの」がカテゴリー（類）を構成する集約交差（collective crossing）の２種類の交差によりモデル化する。集約交差は類を構成し、文化や言語に、側面的交差はクラスターを構成し、行動に、より深く関係するが、「行為（言語を暗在する行動）」する人間においては、一つの文脈で両者が相互浸潤的に機能する。

文化について補足すると、ジェンドリンは、

言語は文化的状況を発展させるものである。それぞれの文化は、典型的な状況の類とそこでの言葉（words）の使い方で構成されている（Gendlin, 2009b）。

と述べる。ジェンドリンの多層重層モデルでは、言語と文化は同じ層におかれ、人間の「行為」に暗在する。２種類の交差により相互浸潤する文脈が、状況に応じて使用され、さらに交差する。

それぞれの使用文脈は他の使用文脈と交差している。どの一つの語も、それが使用されうる状況の交差をもたらし、そして常に、私たちが暗在的に置かれているこの状況とも交差しなければならない（Gendlin, 1991, p. 144）。

と述べられる。ジェンドリンのモデルはこのプロセスにメタファーの働きをおく。ジェンド

リンのモデルにおけるメタファーは創造的である。「恋人は赤いバラだ」というとき、恋人とバラに新しい意味が創造されるモデルである。

まず類似性を見つけ、創造し、特定しなくてはならない。・・・その類似性がメタファーにより創造的に特定されシンボル化される。（中略）類似性は、その新しい意味が作られたときにだけ存在する（Gendlin, 1997, p. 143）。

類似性の関係を形成するのは過去の経験の機能だとされる。そして、過去の経験は有機的で、類構造の線に沿うよりもはるかに多くの仕方で機能していることが強調される。

過去の経験は、どんな現在の中でも機能している。しかし、これは類 - 構造によって規定されるのではない。（中略）類 - 構造が発展して久しい今日でさえ、過去の経験は、類 - 構造の線に沿うよりも、はるかに多くのありようで機能しているのである。逆に、過去の経験の機能が、類似性の - 関係を形成すると言うこともできる。なぜなら、現在と過去が今、このような新たな類似性の - 関係を持つような、まさにこのありようで、過去の経験が機能できるからである（Gendlin, 2018b, 邦訳 p. 308、一部改変）。

身体プロセス（身体—環境相互作用）は、より広い有機体体制（自然の秩序）の中で進行する。その莫大な広がりの中で、カテゴリーに集約されるものはごくわずかに過ぎない。

５．困難アクセス

私たちは「容易アクセス」におけるスムーズな会話においても、既存の文化を変えていくのだが、日常の会話といえども、いつもスムーズなわけではない。ジェンドリンは、「困難アクセス」をモデル化する。もちろん、「容易」と「困難」に二分できるわけではないが、極めて「困難」なとき、個別身体においてより豊かな創造性が生じることが重要である。

自分ではうまく話せたと思ったのに、相手に伝わっていないという経験が誰しもあるだろう。そんなとき、その人にわかってもらう必要があるなら、「話したいこと」を別の言い方で伝えなければならない。私たちは身体の内側に注意をむけ立ち止まる。しかし、簡単に言葉が浮かばない。アクセスが困難なのである。

『A Process Model』では、推進が困難なとき、進行と停止がせめぎあい行動文脈（人間においては行為文脈）が小刻みに反復するとモデル化される。バージョニングと呼ばれる。重層モデルの基底をなす身体プロセスも相互影響により小刻みに反復（リーフィングと呼ばれる）する。バージョニングにより身体は、推進の可能性を「最大化」（Gendlin, 2018b, 邦訳 p. 127）する。

誰しも、言おうとしたことを忘れた経験もあるだろう。これはジェンドリンが「困難アクセス」としてよく引く例である。私たちは、まだ一度も言葉（語）にしたことがない「それ」を、身体の中に探る。この例は、私たちが「言いたいこと（all that）」の身体的な質（quality）に言及することができ、さらに、語のセットなしに、その直接的な言及を開くことができることを示している（Gendlin, 2009a）。

おそらく最初は混乱があるが、その後、...が生じる。すると混乱は "ジェル化"する。...の到来は、混乱していた状態からの大きな変化である。私たちは安堵を感じる。今、私たちはある意味で何をすべきかを「知っている」が、語（words）や行動はまだ実際に形成されていない。私たちは、手が空中で回転している詩人のようだ。...は一歩であり、交差であり、意味づけであり、二重のさらなる一歩の焦点的なインプライ（暗在的含意）である（Gendlin, 1991, p. 100）。

私たちは、身体の内側に注意を向けながら「それ」を探し、取り戻そうとする。さらに焦点を合わせて追い求めたり、あれこれ選択肢をあげてみたりする。

その新しいフレーズと、それがもたらす状況の変化は、まだ暗在的了解に過ぎない。あなたは感じる：「うーん、うーん、失くしてしまった。ああ！.....またあった！」。それを失くしたり取り戻したりするとき、あなたは「...を身体感覚で持っている（感じている、感じ取っている、いる、.....）」ことに気づいて（notice）いる（同書, p. 103）。

ジェンドリンは、言葉（words）はないのではなく暗在するのだとする。

言葉（words）がなくても意味なのか？言葉がなくても、言おうとしていること（ポイント、主張...）が存在することを示しているのだろうか？もちろんそんなことはない。あなたの言いたいことは、暗在的に、あなたが言おうとしている言葉なのだ。先の議論の言葉も暗在的に含まれている。しかし、あなたの言いたいことは、ーすべてのそれらの言葉の後に、新たに焦点化されつつある。その...は、それは、先立つ形式と言葉がその中で作用した後の、今のこの状況の、未分離な多様性のさらなる焦点化である。この焦点化は、まだ来ていない新しく並べ替えられた語を意味する（Gendlin,1991, p.103）。

ジェンドリンは、語が暗在するのみの（言葉なしの）ジェル化した「それ（it）」を直接照合体（Gendlin, 2018a）と呼ぶ。

人間は言葉（words）なしに生きているのではない。したがって、言葉は人間のあらゆる経験に暗黙的に含まれている。「前言語的（preverbal）」という語は、語の羅列がなくても暗在的なものを感じ取ることができるということだけを正しく示している。私たちは、筋肉や動いている私たちの存在を感じるように、「内臓的（kinaesthetically）」に、暗在する「それ」を身体的に感じることができる。

「それ」が実際にやってきたとき、「それ」は直接照合体となる。そのとき、私たちは、まだ特定の語がなくても、「それ」を考えることができる。これは新しい種類のインプライング（暗在的含意）である。「それ」はまだ暗在的である。これは、この（暗在的）「it」として生じた最初のインプライングである（Gendlin, 2018a）。

直接照合体が生じるとき、私たちはそれを感じることができる。直接照合体は「フェルト

センスとも呼ばれる」(Gendlin, 2009a)。それはすでに、象徴化の始まりである。直接照合体は、私たちが「これ」や「あれ全体（all that)」と言うとき、あるいは単に注意を向けるだけのときでさえ、すでに一種の象徴化である（Gendlin, 2009c)。

私たちは「uhm....」により、カテゴリー名なしに思考を深めていく（Gendlin, 1991, p. 88)。「未分離な多様性が焦点化される」と表現される。「困難アクセス」でも（容易アクセスと同様）側面交差と集約交差が働き、今ここの要請に応える１つの文脈の必要性に焦点化されるが、「困難アクセス」では直接照合することにより語から分離することが重要である。

直接照合するとき、私たちは「それ」を、今使った語（words）から切り離す。分離することで、別の語が生まれる。それらは分離から生まれることに気づこう。分離とは、そのような暗在するものに直接照合することの効果である（Gendlin, 2009b)。

と述べられる。直接照合体としてジェル化するとき、語から分離して「パターンそのもの」を感じる。私たちは、その「パターンそのもの」をスロットと二重化するのである。

語を離れるとき、語が持ち込もうとする標準的なストーリーの影響は最小限になるだろう。バージョニングにより推進の可能性を「最大化」する身体は、相互作用する環境、また、それを含むさらなる有機的秩序をも取り込んで推進の可能性を探るだろう。その莫大な広がりの中で、語や文化のカテゴリーに集約されるものはごくわずかに過ぎないことを思い出そう。より広い秩序から新鮮なパターンが形成される可能性が開かれる。

どの一行が受け入れられるのか？それは、...が、以前のようにぶら下がったまま、要求し続けるままにならない一行だ。この一行を得た後は、....は決して手を空中で回すことには戻らない。

特別な一行が来た後は、...はもはや以前のようにはインプライ（暗在的に含意）しない。むしろ、...が以前のようにインプライしなくなったのは、それがインプライしたことが起こったからである。...はこの一行によって推進されたのである（Gendlin,1991, p. 63)。

この到来は容易アクセスと同様、身体の機能である。身体プロセスが、「不在」に出会い「充足」されなければならない。詩人の例では、...は、すでに書かれた行の最後に来ているが、次の行が来ると、たいていの場合、すでに書かれた行の修正が余儀なくされる。すでに形成された行の形式が、それ自体の変化というインプライングの中で働いているのである。形式は、その後に続くものを自分自身と一致させるのではなく、形式（自身）を変化させるのである。

その一行が来ると、詩人は「これはずっとインプライされていた一行だ」と言う。しかし、あいまいなブランクとその後の一行の間に共通性はない。「その一行はブランクと似ている」とも言えない。 類似とは、ある類似したパターンである（同書, p. 62)。

と述べられる。直接照合体を経由する「困難アクセス」においては、スロットで、これまで

にない新しさ（新鮮さ）をともなってパターンが形成される。「形式またはパターンのみが同じでありえる」（同書, p. 99）。たとえ古くてよく知られた形式であっても、それは、この（this）焦点化された多様性である。古い形式が新しい意味を含む。

詩作だけではない。ジェンドリンは、形式と暗在的複雑性がお互いを変化させながら共に働く例として、音楽の即興演奏をあげる。

たとえば、音楽の即興演奏は、多くの場合、意図的に構築できるものよりも優れており、より複雑である。 私たちの体は、既存の形態だけで構成されるのではなく、新しい形態に私たちの知（knowledge）を暗在的に利用することができる（Gendlin, 2009b）。

６．暗在的正確さを語る

チェスも、ジェンドリンが「困難アクセス」としてよく引く例である。

例えば、どんな次のチェスの一手も、相手の見込みのある可能性のすべてを不可能にしなくてはいけないし、同時にこちらにとって新たに可能な次の手を開くような手でなくてはならない。もちろん、チェスはそのルールによって制限されている。しかしそれは、どのように１つの手がまさに正確な可能性の全体的クラスターを推進するのか、ということのよい実例である（Gendlin, 2012a）。

ジェンドリンは Dreyfus（2009）を引用しながら、チェスの名人は可能性のある多くの手を一つ一つ検討するのに時間をかけるのではなく、新しい手だけが浮かんでくるのだという（Gendlin, 2012b）。

その新しい手は、すべてが一度にインプライ（暗在的に含意）されている可能性のクラスターの暗在的複雑さから、直接心に浮かんでくるのである（Gendlin, 2012a）。

と述べられる。ゲームの後、チェスの名人が、新旧の結果を比較するために何手も下がって振り返ることは、新しい論理システムを生み出すことになるだろう。もちろん、そのシステムは新しい手が来る前に作られたものではない。その手はそのシステムの源であり結果ではない。新しい結果は新しい単位（ユニット）であり、新しい手によって暗在的に生み出されたものである（Gendlin, 2012b）。

ここでは、論理と暗示がいかに互いを拡張し合うかがわかる。新しい手は古い単位（ユニット）以上のものであったが、そこから新しい単位（ユニット）を生成することによってそれをきちんと配置すると、さらに多くのものができる（Gendlin, 2012b）。

「困難アクセス」では、類構造よりも豊かな経験が有機的に働く。そこから新しいパターンが生じる可能性が開かれる。新しい理論ができる可能性が開かれるのである。直接照合体

を経由するとき、私たちは暗在的複雑性から、それについて語ることができるのである。「暗在的正確さが語れないというのは真実ではない」（Gendlin, 1991, pp. 51–53）。

7．TAE（Thinking At the Edge）

私たちは、思考しているプロセスで暗在的なものを活用することができる。通常の思考は、事実、既にその両方の中でなされている。

どんな明快さも両方である。論理的な説明によって私たちにもたらされる「Aha！」は、私たちの経験的な理解に対するそれの効果である。明瞭さは常に、説明によってもたらされる新鮮な暗在的効果なのだ。明瞭さとは、構造であり、かつ、感じられる理解である（Gendlin, 2012a）。

私たちは、論理的進行のどの分岐点でも、これらの思考法を導入することができる。論理的に進む前でも、途中のどの時点でも、長い進行の終わりでも使える（Gendlin, 1991, p. 60–64）。

ジェンドリンは、直接照合体からの新しい用語は、「有機的な意味」を持つことができるとする。だから、有機的的な意味づけから、論理的に説明できる新しい単位（ユニット）を生み出すことができる。その概念はクラスターを形成し帰納的論理を成すのだとする。

概念が暗在的複雑性を保つとき、それらはクラスターを形成する。それぞれが他の概念についてより多くを語る（Gendlin, 1991, p. 92）。

クラスターでは、単位（ユニット）はさらなるものをインプライ（暗在的に含意）するため、単位（ユニット）が同じままである通常の論理にはならない。しかし、

クラスターは同じ単位の論理（a logic of same units）には還元されない連続性を持っている。決して不確定なものではなく、むしろ論理的演繹よりも正確である。新しく作られた用語を使って「帰納的」な論理を成すことができる（Gendlin, 2012a）。

と述べられる。概念的なパターンが鋭く複雑であればあるほど、何を研究するにしても、その奥深くまで踏み込んだ論理的なステップが可能になるだろう。そうすれば、私たちの思考法はそのような遥か彼方の地点から動くことができる。逆に、これらの思考法が新しい概念パターンにつながることもある（Gendlin, 1991, p. 60–64）。私たちが論理と暗在的なものの両方によって思考することができるとき、それはより体系的なものになる（Gendlin, 2012a）。科学の発見は私たち自身の経験を否定しているように見えるし、その逆も同様である。この 2 つは非常に異なっているように見えるが、本質的な関係があるのである。論理的かつ経験的に正確に考えることは、可能なのである（Gendlin, 2012a）。

それが可能な場所は個人の身体である。ジェンドリンは Crease（2004）を引用し、ある大規模な科学プロジェクトには全体の理論家が一人いて、驚くべき発見があった場合、この

理論家が理論を修正するために帰宅し、翌朝か数日後、最善の修正案を携えて戻ってくる話を紹介する。何年にもわたって変更されてきた理論の改訂は、他のすべてのものに適合させなければならない。それには、文脈全体を一度に感じ取る必要があり、それは、何年も一貫してその理論とともに生きてきた人にしかできないからである（Gendlin, 2009c）。

『A Process Model』の最終章では、近代ダンスを拓いたイサドラダンカンが長い時間じっと立ち尽くし、彼女が入れそうなダンスのステップを感じていたことが述べられる。また、アインシュタインが、一般相対性理論へと向かう 15 年の取り組みを通してずっと、その答えが何でなければならないのかの「感じ（フィーリング）」を持っていただけでなく、その感じが彼を導いたと書いていることが紹介される（Gendlin, 2018b, p. 322–336）。いずれの場合も彼らを導いたのは「...（スロット）」である。それが生じた場所は個人の身体である。ジェンドリンは「裸」のメタファーを用いて次のように言う。

多くの人は、概念を別の世界、理論の世界であるかのように扱う。彼らは理論に目を向けた瞬間、裸の理解をすべて捨ててしまう。形成された概念パターンだけで活動しようとする。しかし、自分の裸の理解がなければ、新しいことは何も考えられない。図書館にある概念を並べ替えることしかできない。そしてそれさえも、この方法ではごく薄くしか理解できない（Gendlin,1991, p. 60-64）。

「...（スロット）」を感じることが大切である。それが生じる場所は、個人の身体である。環境と相互作用する個人の身体において、言語により、暗在的複雑性が普遍へと開かれるのである。ジェンドリンは、そのために TAE（Thinking At The Edge）という具体的思考法も提案している（Gendlin & Hendricks, 2004）。

言語の可能性の提示と実践性は、言語の二面性（duality）、とりわけ身体感覚的側面の指摘と並ぶ、ジェンドリン言語論のもう一つの特徴と言えるだろう。

（注記）本稿は、英語論文「Gendlin's Language Theory of the Implicit」（「国際地域学研究　第 27 号、2024 年 3 月」の内容に加筆し、日本語で執筆したものである。

参考文献

Gendlin, E. T. (1991). Thinking beyond patterns: Body, language and situations. In B. den Ouden & M. Moen (Eds.), *The presence of feeling in thought* (pp. 25–151). Peter Lang.

Gendlin, E. T. (1997). *Experiencing and creation of meaing: A philosophical and psychological approach to the subjective*. Northwestern University Press. (Original work published 1962)

Gendlin, E. T. (2004). Introduction to Thinking at the Edge. *The Folio, 19*(1), 1–8.

Gendlin, E. T., & Hendricks. M. (2004). Thinking at the Edge（TAE）Steps. *The Folio, 19*(1), 12–24.

Gendlin, E. T. (2009a). A changed ground for precise cognition. In D. Schoeller & V. Saller

(Eds.), *Thinking thinking: Practicing radical reflection* (pp. 50–91). Verlag Karl Alber.

Gendlin, E. T. (2009b). What first and third person processes really are. *Journal of Consciousness Studies, 16*(10–12), 332–362.

Gendlin, E. T. (2009c). We can think with the implicit, as well as with fully formed concepts. In K. Leidlmair (Ed.), *After cognitivism: A reassessment of cognitive science and philosophy* (pp. 147–161). Springer.

Gendlin, E. T. (2012a). Process generates structures: Structures alone don't generate process. *The Folio, 23*(1), 3–13.

Gendlin, E. T. (2012b). Implicit precision. In Z. Radman (Ed.), *Knowing without thinking: The theory of the background in philosophy of mind* (pp. 141–166). Palgrave Macmillan.

Gendlin, E. T. (2018a). A direct referent can bring something new. In E. S. Casey & D. M. Schoeller (Eds.), *Saying what we mean: Implicit precision and the responsive order* (pp. 138–150). Northwestern University Press.

Gendlin, E. T. (2018b). *A process model*. Northwestern University Press.（村里忠之・末武康弘・得丸智子（訳）(2023). 『プロセスモデル―暗在性の哲学―』みすず書房.）

【寄稿論文】

質的研究と TAE に関する一考察

髙木亜希子

キーワード
質的研究、TAE、認識論、パラダイム、方法論

１．はじめに

質的研究には多様な研究方法が存在する。研究者が研究目的に応じて適切な方法を選択するためには、それぞれの特徴を十分に理解することが必要である。得丸（2010）は、質的研究を「意味を創造する研究」（p. 2）と特徴づけ、Thinking At the Edge（TAE）を質的研究のデータ分析手法として応用することを提唱した。その後、日本語教育学、心理学、教育学、看護学などの分野で、TAE を活用した質的研究論文が徐々に発表されるようになっている。そこで本稿では、TAE を質的研究に応用するために、質的研究方法論の中に TAE を用いた研究方法を位置づける。そして、その特徴と意義を概観することで、研究で適切に使用するための一助にすることを試みる。

筆者は、英語教育学（応用言語学）を専門とし、2010 年に英国の大学院で質的研究による博士論文を提出し、学位を取得した。2012 年に開催された第 1 回 TAE 国際シンポジウムに参加し、初めて TAE を知った。それをきっかけに、2013～2014 年に得丸氏が主催する TAE 連続講座を受講し、TAE について学ぶ機会を得た。その後も毎年開催されているシンポジウムに継続して参加し、2022 年からは再び TAE パーソナル講座を受講している。

本稿では、まず質的研究の特徴を概観した後、質的研究の哲学的背景、方法論、方法について整理する。次に、得丸（2010）が提唱する質的研究における TAE の特徴と意義、および論文執筆における留意点について考察する。

２．質的研究の特徴

質的研究とは何かについて、これまで研究者たちが定義しようとしてきたが、定義はそれほど容易ではない。なぜなら、質的研究には様々なアプローチがあり、それぞれが異なる目的や手法を持つためである。しかし、異なるアプローチであっても質的研究に共通する特徴はまとめることができる。以下は、Levitt（2020, pp. 20–21）による 4 つの特徴を筆者が要約したものである。

(1) 質的研究は、数値ではなく言語やテキスト、芸術作品など他の形式の表現を分析対象とし、曖昧で複雑なプロセスや経験を捉えることができる。また、データ分析により、研究者が抱く信念や仮定を超えた新しい洞察や理論を生み出すことができる。
(2) 質的方法ではデータの分析と意味の生成が循環する。このプロセスを通じて、データは理解されていき、データの中心的な側面が徐々に明らかになっていく。

(3) 質的研究者は、時間的な文脈や状況を重視して、知見を提示する。法則の定立を目指すのではなく、時間、場所、文化、対人関係のダイナミクスを明示することで、論文の読者は研究結果を自分の状況に適用できる。
(4) 質的方法は、研究者によるデータに埋め込まれたパターンの解釈と記述に基づくため、研究者の力量が問われる。研究者は自己省察し、自身の視点や限界が研究に与える影響を考慮し、そのことについて論文に記載する必要がある、また、研究者の立場と参加者の関係についての透明性が読者への信頼を高める。

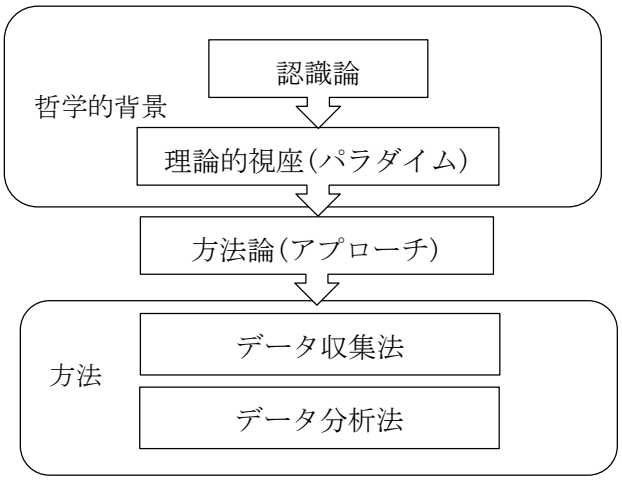
質的研究者は、これらの特徴を把握し、様々な選択肢の中から適切な研究方法を選択する必要がある。しかし、単にデータ収集・分析レベルでの方法を理解するだけでは不十分であり、哲学的背景、方法論、方法の違いを区別する必要がある。次章ではこの違いについてみていく。

３．質的研究の哲学的背景、方法論、方法

3.1 質的研究の 4 つの要素

本章では主に Crotty（1998）、Egbert & Sanden（2020）、Levitt（2020）に依拠し、各要素を概説する。この 3 冊を選択した理由は次のとおりである。最初に、Crotty（1998）は、筆者が英国の大学院博士課程（教育学）で学んだ際に、研究方法論の授業の指定図書であり、現時点でも英国の複数の大学院で指定図書として使われている。次に、Egbert & Sanden（2020）は、Crotty（1998）も言及しながら、教育学分野の経験が浅い研究者と熟練の研究者の両方に向けて、平易な言葉でわかりやすく書かれている。最後に、Levitt（2020）は、認識論や方法論の多様性を尊重した APA スタイルの基準について、実際にどのように論文に適用するか解説しており、2023 年には日本語訳も出版されている。なお、本節では TAE を質的研究に応用する際に特に関連が深いと思われる観点に重点を置いて概説する。

図 1
質的研究の 3 つのレベル



Crotty（1998）は、研究において、認識論（epistemology）、理論的視座（theoretical perspective）[1]、方法論（methodology）、方法（method）の 4 つの要素を区別する必要性を述べている。本節では、これらの要素のうち、認識論と理論的視座を哲学的背景としてまとめ、それぞれ 3 つのレベル（図 1）として整理する。

3.2 認識論

認識論とは、世界をどのように捉え、それを理解するかという見方であり、「理論的視座に埋め込まれている知識の理論であり、ひいては方法論にも影響を与えるもの」（Crotty, 1998, p. 3）である。Egbert & Sanden（2020）は、「知識の理論」という用語が認識論の定義によく使われるが、この表現ではその意味が理解しにくいと指摘し、研究に対する認識論の影響をより明確に示すために「世界観を通じて形成された個人のレンズであり、このレンズを使って世界の知識を理解するもの」（p. 17）と再定義した。個人のレンズは人によって異なり、例えば青いレンズの眼鏡と赤いレンズの眼鏡では、同じ世界でも異なる見え方をし、それによって世界の理解にも違いが生じる。認識論的な観点から知識を理解することは、どのような種類の知識が可能であるか、そしてその知識が十分かつ正当であることをどのように確保するかについての哲学的な基盤を提供することに関わる（Crotty, 1998）。

Crotty（1998）は、認識論の説明の中で、関連する概念として「存在論」（ontology）を挙げている。存在論は、「何が存在するのか」「現実とは何か」といった「存在の本質」を問うものであり、認識論とともに理論的視座に影響を与える。しかし、Crotty によれば、各理論的視座は「何が存在するか」（存在論）と「知ることは何を意味するか」（認識論）の両方の理解の方法を含んでおり、存在論と認識論を概念的に分けて扱うことが難しい場合がある。これに関連して、野村（2017）は、存在論と認識論に関する論争は多く、研究者間で異なる用語で説明されているうえ、存在論と認識論のどちらが先かについても哲学的論争があると述べている。

Crotty（1998）は、認識論の具体例として客観主義（objectivism）、構築主義（constructionism）[2]、主観主義（subjectivism）の 3 つを挙げている。Crotty（1998）によれば、このうち、多くの質的研究者が依拠しているのが、構築主義である。構築主義的な認識論では、客観的な真実は存在せず、真実や意味は、私たちが世界の現実に関わる中で生み出される。意味は対象に内在して発見されるものではなく、構築されるものであり、同じ現象に対しても、それぞれの人が異なる方法で意味を構築する。

3.3 理論的視座（パラダイム）

次に理論的視座（パラダイム）についてみてみよう。Crotty（1998）は、理論的視座を「方法論に影響を与える哲学的立場であり、プロセスに対する文脈を提供し、その論理と基準を裏付けるもの」（p. 2）と定義している。一方、Egbert & Sanden（2020）は、パラダイムという用語を用いて「研究者自身の認識論的視点によって定義された知識がどのように明らかにされるかについての研究者の特定の立場」（p. 31）と定義している。認識論をより具体的に示したものが、パラダイムであり、方法論の選択に直接関係する。文献によって分類の方法や提示の仕方は異なっているが[3]、質的研究者は、どのパラダイムに立脚しているのか、ある程度把握しておくべきである。

Crotty（1998）は、パラダイムの具体例として、実証主義（およびポスト実証主義）、解釈主義（象徴的相互作用主義、現象学、解釈学）、批判的探究、フェミニズム、ポストモダニズムを挙げている。一方、Egbert & Sanden（2020）は構造主義／実証主義、解釈主義、批判主義、構成主義の 4 種類に、Levitt（2020）は、ポスト実証主義、構成主義・解釈主義、批判理論・イデオロギー志向、プラグマティズムの 4 種類に区別している。

ここでは、TAE を質的研究に応用する際に立脚することとなる解釈主義（interpretivism）の概要を述べる。解釈主義は、客観的なデータや法則に基づく実証主義とは異なり、人々が自分の経験や社会的状況をどのように主観的に解釈するかを重視する。つまり、人々がその環境や状況に意味を見出し、その意味がどのように形成されるかを理解しようとする。人々の行動や現象は特定の文脈の中で意味を持ち、文化的、社会的、歴史的背景と切り離しては理解できないと考えられている。そのため、研究の目的は、詳細な分析を通じて浮かび上がる解釈のプロセスを可視化しつつ、意味を明確にすることである。解釈主義に基づき、質的研究のデータを解釈する際、理論は解釈のレンズとしての重要な役割を果たす（Creswell & Poth, 2018）。理論は、「特定の事実や現象を合理的かつ体系的で、調査可能かつ修正可能な形で説明し、結果の予測や理解を助けるもの」（Egbert & Sanden, 2020, p. 46）である。

3.4 方法論と方法

方法論とは、Egbert & Sanden（2020）が述べるように、「研究者の視点や研究の目的に基づいた、情報を収集し分析するための合理的な計画や戦略」（p. 72）であり、研究デザインの指標になるものである。質的研究における方法論の選択は、研究者が立脚するパラダイムや研究目的に応じて適切に選択する必要がある。方法論と方法（手法）は密接な関係があり、方法はより具体的なデータを収集・分析するために使用される技術や手順を指す。

質的研究における異なる方法論は「アプローチ」という用語で説明されることがよくある。質的研究には多様なアプローチが存在するが、Revitt（2020）は、現象学的アプローチ、グラウンデッド・セオリーのアプローチ、ナラティブ・アプローチ、批判理論のアプローチ、ディスコース・アプローチの 5 つのアプローチに絞って解説している。一方、国際的に広く使用されている質的研究方法論の図書（Creswell & Poth, 2024）では、違いを明確にするために、質的研究における代表的な 5 つのアプローチ（ナラティブ探求、現象学、グラウンデッド・セオリー、エスノグラフィー、事例研究）について、その目的、適した研究課題、学問的背景、データ収集・分析の方法が整理されており、違いが明確に示されている（表 1）。

このうち、現象学的アプローチでは、一つの現象に着目し、人々の経験の詳細を理解することを目的とする。研究者はその現象を経験した人々からデータを収集し、その体験の文脈を探る。理論や仮説、前提を一旦保留にし、経験の意味と構造に省察的に焦点を当てる。具体的な事例として、インタビューの逐語録や書かれた文章、観察記録などを読み込み、重要な発言を見つけ出す。それらの発言を集めて意味の単位を定め、人々の経験とその記述を展開する一連のステップを経て、現象の本質に迫り、その詳細を記述する報告する。

TAE を質的研究に応用した「TAE ステップ式質的研究法 [4]」を方法論のレベルで考えると、経験の本質を理解するという点では現象学的アプローチに似ている部分もある。しかし、TAE の哲学的背景にあるのは、現象学の流れに身を置きながら独自の哲学を確立したジェンドリンによる「暗在性の哲学（philosophy of the implicit）」である。分析単位は複数で

はなく、一名の個人の体験でもよく、データ収集や分析の方法も現象学的アプローチと同一ではないため、TAE は独自のアプローチといえる。

表 1
5 つの質的アプローチの基礎的考慮事項の比較（Creswell ＆ Poth, 2024, pp.103–104）

基礎的な考慮事項	ナラティブ探求	現象学	グラウンデッド・セオリー	エスノグラフィー	事例研究
アプローチの研究焦点	個人の人生を探究	経験の本質を理解	現場のデータに基づいた理論を発展	文化を共有するグループを記述・解釈	単一事例または複数事例の詳細な記述と分析
分析単位	一人または複数の個人の生きられた経験の研究	共通の経験を持つ複数の個人を研究	多くの個人が関わるプロセス、行動、相互作用の研究	同じ文化を共有するグループの研究	出来事、プログラム、活動、一人または複数の個人など限定的な事例の研究
アプローチに適した研究課題	個人の経験の再構成	生きられた現象の本質の記述	研究参加者の視点に基づいた理論の生成	グループが共有する文化パターンの記述と解釈	一事例または複数事例の深い理解
学問的起源の性質	人文学、特に人類学、文学、歴史、心理学、社会学に基づく	哲学、心理学、教育学に基づく	社会学に基づく	人類学と社会学に基づく	心理学、法学、政治学、医学に基づく
データ収集の形式	主に少人数のインタビューと文書を使用するが、作品が含まれる場合もある	主に体験を共有した個人へのインタビュー、文書、観察を使用するが、作品が含まれる場合もある	主に個人へのインタビューを使用	主に観察とインタビューを使用するが、現場での長期的なデータ収集において他のソースが含まれる場合もある	インタビュー、観察、文書、作品などの複数のソースを使用
典型的なサンプル数	1～5 名（それより多いこともある）	5～25 名	20～30 名（それより少ないこともある）	かなり多様性がある 10～30 名が多い	1 ～6 事例
データ分析の戦略	物語、物語の「再物語化」、年代順のテーマの発展のデータ分析	重要な発言、意味の単位、言語的、構造的記述、「本質」の記述のデータ分析	オープン・コーディング、軸足コーディング、選択的コーディングによるデータ分析	文化を共有するグループの記述とそのグループのテーマによるデータ分析	事例の記述、事例のテーマ、事例間のテーマによるデータ分析

４．TAE ステップ式質的研究法の特徴と意義

本章では、TAE の概要を述べた後、TAE ステップ式質的研究法の特徴と意義について、意味感覚（フェルトセンス）と意味の創造、分析手順の過程の可視化という 2 つの観点から考察する。

4.1 TAE とは

TAE は、アメリカのドイツ系ユダヤ人の現象学派の哲学者で心理臨床家でもあるジェンドリンが、「意味創造理論」に基づき、ヘンドリクスと共同開発した理論構築法で、「わかっているがうまく言葉にできない意味感覚（フェルトセンス）を言葉にする系統だった方法」（得丸, 2019, p.143）である。ジェンドリンの「暗在性の哲学」によると、人間の身体は、状況やシンボル（言語を含む）から意味を感じ取るが、その感覚には複雑な秩序が隠れている。この複雑な秩序を、意味の感覚と言語表現を照らし合わせながら、言語として展開する系統的な手順が、TAE ステップである（得丸，2018）。データは言語化されていない実践者としての研究者自身の経験とインタビューや観察ノートなど言語化された他者の経験の両方を扱うことができる。TAE で分析できる対象は、個人のフェルトセンス（後述）に媒介されるものであるが、ほとんどすべてのものがフェルトセンスの媒介としているため、様々なものが分析対象となる（得丸, 2010, 2011）。

4.2 質的研究における意味の理解と意味感覚（フェルトセンス）

TAE の最初の特徴は、「意味感覚（フェルトセンス）」の明確な位置づけと活用である。質的研究において、意味の理解は中核を成す概念である。デンジン・リンカン（2006）は、質的研究者は、「事物を自然の状態で研究し、人々が事物に付与する意味の観点から現象を理解し解釈する」（p. 3）と述べている。ここでの「意味」とは何を意味するのだろうか。小松（2016）は、質的心理学における意味を、「言語などの記号と結びついた様々な心的現象」（p. 15）と定義する。これは、辞書的な一般化や社会的共有の側面だけでなく、記号を使用する個人による独自の表象も含んでいる。また、記号やその使用される文脈・環境との関連性において常に変化し、時間やコミュニケーションの中で動的に変容し続けるものとされている。TAE の基礎となるジェンドリンの意味創造理論によれば、人間は環境と相互作用しながら生きており、その相互作用の秩序は、体験過程として個人的に身体で感じられている。どの個人のどの時点の体験過程にも「普遍的なもの（X）」が内在しており、TAE のプロセスを経ることで、身体的に理解している意味感覚をその複雑さを含んだまま言語化することが可能となる（得丸、2010）。

第 1 章において、質的研究の特徴の一つとして、データの分析と意味の生成の循環について言及した。サンデンロウスキー（2013）によれば、質的研究では，データの収集，準備，分析，そして解釈というプロセスが、時間的にも内容的にも重なり合っており、同時性，反復性，そして，創発的な性質をもつ。つまり、データ収集の段階から、データ分析と解釈はすでに始まっていると捉えることができる。

インタビューを例にとると、インタビューをしている段階、逐語録に起こす段階において、データから何かしらの感覚や気づきを得ることはよくある。また、分析を始めるにあたり、

データの全体像を理解するために、データを読み込み、データに浸ることは一般に行われている。実際にデータ分析において、コーディングしたりカテゴリー化したりする際も、常にデータ全体の理解に対して身体の「感じ」を得ている。小田（2012）によれば、質的研究におけるコーディングなどの概念化のプロセスは、データになじみ、理解しようとする中で得られる「感じ」に焦点を合わせ、それを言語化するというステップを踏む。この過程は分析・解釈の段階で重要であるにもかかわらず、ほかの質的研究方法において、研究者が身体の感覚をどのように扱い、データ分析と解釈に活かしたのかが明示されることはない。

一方、TAE では「意味感覚（フェルトセンス）[5]」と呼ばれる身体の感覚の役割をその方法の中に明確に位置づけている。TAE を使って質的分析する過程において、実施者は常にTAE の各手順におけるインストラクションやことばなどの「形式」に対して、「意味感覚（フェルトセンス）」を応答させることが求められる。「意味感覚（フェルトセンス）」と「形式」を行き来し、照合させることを繰り返すことで、「意味感覚（フェルトセンス）」を十分に含んだ「形式」を浮かび上がらせることが可能となる（得丸, 2016）。

質的研究が立脚する認識論によれば、分析者により、データの理解と解釈に違いがあることは当然である。しかし、恣意的なデータの解釈には注意が必要である。TAE の強みとして、得丸（2016）は、「意味感覚（フェルトセンス）」を中心におき、データ全体から感じられる「未分化な意味の塊（直接照合体）」を形成することで、恣意的な解釈を抑制する働きがあると述べている。そのため、データを読み込み分析を始める段階で、「意味感覚（フェルトセンス）」を把握することが重要となる。

「意味感覚（フェルトセンス）」と形式の応答により、ゆっくりと丁寧に身体的な理解を言語化できることは、質的研究における身体の感覚の活かし方について指針を与えるものであり、質的研究の初心者も納得して取り組むことができる方法といえる。また、実践者自身の経験を活かせることから、研究者自身の経験や実践を主なデータ源とし、それを内省的かつ批判的に分析することで、個人の自己理解を深めつつ、文化的・社会的文脈や専門的実践に対する洞察を得るオートエスノグラフィーやセルフスタディとも親和性が高いと考えられる。

4.3 TAE の分析手順の可視化

TAE の 2 つ目の特徴は、明確な分析手順である。TAE は、『体験過程と意味の創造』（Gendlin 1979/1981）で提唱された意味創造理論に基づき、体験から意味を創造する過程が系統的に手順化されており、3 パート 14 のステップがある（得丸, 2011）。得丸氏は、TAE を質的研究に応用するために、手順ごとに独自のシートを作成し、広く公開[6]している。

質的研究の質の評価に関する概念の一つに「確実性（dependability）」という考え方がある。これは、データや様々な研究の手順が信頼でき、研究成果はもっともらしく、信頼できるかを問うものである（Lincoln & Guba, 1985）。分析手順が可視化されていることは、論文の読み手が分析のプロセスを辿って「監査（audit）」（p. 37）することが可能となり、確実性の担保にも寄与する。

TAE によるデータの分析過程は、身体的に理解している意味感覚（フェルトセンス）を言語化していく過程と言い換えることができるが、TAE における理解と言語に関する用語は独自の使い方をされていることに留意する必要がある。本節ではステップの詳細につい

ては解説しないが、インタビューデータを例にした得丸（2019）に基づき、各パートでこれらの用語がどのように使用されているかを確認する。

データ分析に着手する前に、研究者が先行研究や自身の経験をもとに、研究テーマに対して抱いている一定の理解は「背景理解」（p. 144）と呼ばれる。研究の目的は、その背景理解を見直したり、新たな理解を加えたりすることで、学術界や社会に対して知識を提供することである。インタビューの間、終了後、逐語録の作成時におけるインタビューの理解は、言語以前の身体的な意味感覚であり、「前言語的」（p. 144）なものである。

データ分析のパート 1 は、フェルトセンスの独自性を確認する段階である。インタビューデータの全体から得られる意味感覚に集中し、その意味を表現する言葉が浮かび上がってくるのを待ち、数語を書き留めることは、「ディッピング」（p. 145）と呼ばれる。そして、これらの語の中から二〜三語選んで「仮マイセンテンス」（p. 145）と呼ばれる短い文を作っておく。次に、一語を選び「背景理解」における通常の意味とインタビューデータの独自の意味を書き出して確認して、再びディッピングを行う。これを 3 回程度繰り返し、短い一文で「マイセンテンス」（p. 145）を作成する。マイセンテンスは、意味感覚を保持する役割があり、この後の分析過程に役立つ。

パート 2 は、データの中から類似性によって凝縮された意味のまとまり（側面）を立ち上げる段階である。インタビューの重要部分をカードに書き出し、グループ化を行う。その際、フェルトセンスにディッピングし類似性を感じ分けながら、カードのグループ分けをする。グループごとに通底する意味感覚を見出し、短い一文の「パターン文」（p. 146）にする。この時点では、一側面からの一パターンの立ち上げであるが、次のステップでは、側面間の関係を探りながら、新しいパターンを立ち上げる。この際、パターン同士を機械的に組み合わせ、両者に類似する新しい意味感覚をディッピングすることを「交差（クロッシング）」（p. 147）と呼ぶ。

なお、その他の質的研究においても、データをコーディングして、それらを集めてカテゴリー化することについて、「パターンを見出す」などの表現が使われることがある。しかし、この場合フェルトセンスについて言及されることはなく、TAE で意味するパターンとは別ものである。

パート 3 は、インタビューの内容に対するフェルトセンスによる理解の核心を「論理システム」（p. 147）として記述することにより、言語化する段階である。論理システムとは、概念が相互に論理的に結びついた体系であり、TAE における「概念」とは「定義された（明確に説明された）語」（p. 147）である。このパートでは概念を得る手順と論理的に結びつける手順があり、いずれの手順においても概念を論理的に関係づけるために、「文型」を用いてディッピングを行う。意味感覚が言語化され、パート 3 で最終的に得られる文は「結果文」（p. 150）と呼ばれる。

５．おわりに

本稿では、質的研究方法における哲学的背景、方法論、方法の違いを概観したうえで、TAE の特徴と意義について、特に「意味感覚（フェルトセンス）」の活用と分析過程の可視化に焦点を当てて検討した。TAE の方法論は、データから得られる複雑な意味を丁寧に

解釈し、研究者の身体的な感覚を言語化する独自のアプローチを提供するものである。

質的研究を実施する際には、単にデータの収集・分析に留まらず、研究者自身のリフレクシビティ（reflexivity）が重要な要素となる。リフレクシビティとは、研究者が自身の立場に対して継続的に内省的な対話を行い、その立場と批判的な自己評価が、研究のプロセスや結果に影響を与えることを認識することである（Berger, 2013）。したがって、研究者の立場や経験が分析結果にどのように影響を与えるかを常に意識し、透明性を確保することが質的研究の信用性（trustworthiness）を高める鍵となる。また、質的研究論文を執筆する際には、研究の哲学的背景や方法論の選択に整合性が保たれるよう留意し、「方法論的整合性（methodological integrity）」（Levitt, 2020, p. 29）を確保する必要がある。これらの要素を踏まえた質的研究は、学術的な貢献にとどまらず、実践の深い理解と改善にも寄与するものと考えられる。

注

1. 理論的視座については、パラダイム（paradigm）、世界観（worldview）、探究の伝統（tradition of inquiry）、認識論的信念（epistemological belief）など研究者によって異なる用語が用いられている（Levitt, 2020）。筆者の知る限り、質的・混合研究方法論の多くの図書では、「パラダイム」が使われている。パラダイムという用語は、米国の科学史家クーンの著書（Kuhn, 1962）により、科学論の領域で注目され、その後一般に流布した。1980 年代を中心に主に北米で展開された人間科学研究の方法論の優位性をめぐる量的研究者と質的研究者の論争は、「パラダイム論争」と呼ばれる（能智他, 2018）。
2. Constructionism の訳語は、『質的心理学辞典』（能智他, 2018）における「構築主義」を採用した。関連用語として、社会構築主義（social constructionism）、構成主義（constructivism）がある。社会学の分野では、構成主義（constructionism）、社会構成主義（social constructionism）、構築主義（constructivism）と逆の訳語が用いられることが多い。また、野村（2017）は、「構築主義・構成主義は幅広い概念であり、学問領域によってはそれ自体を一理論として扱うものがあることから、誤解を避けるために」（p. 14）、構築主義・構成主義の両者をまとめて「反基礎づけ主義」と言い換えている。「反基礎づけ」とは、「真理を普遍的なものとして知りえることとなる永遠で変わることのない（あるいは「基礎づけ」的）基準を採用することへの拒否、それに対してつけられた呼称」（デンジン・リンカーン, 2006, p. 156）である。
3. 村里（2016）は、Denzin & Lincoln（2000）で挙げられている質的研究の 3 つの認識論的立場（解釈主義、解釈学、社会構築主義）のうち、社会構築主義は哲学的基礎づけを欠いていることを指摘している。その上で、質的研究の根拠づけとして現象学が有効であることを説明している。TAE を質的研究に応用する際、村里の論考は重要な示唆を与えるものである。
4. 「TAE ステップ式質的研究法」という用語は、得丸（2011）の論文の副題に使用されている。しかし、得丸氏はその後の著作でこの用語を使用していない。また、得丸（2010）は「TAE を質的研究の分析手順として提案する」（p. 10）と述べており、これにより TAE が質的研究のデータ分析手法の一つと誤解される可能性がある。TAE を質的研究に応用する際、このような誤解を避け、哲学的背景を踏まえたアプローチのレベルに位置づける

ためには、「TAE ステップ式質的研究法」という用語が有用な場合もあると筆者は考える。

5. 得丸（2016）によれば、ジェンドリンは「身体の感覚」について、『体験過程と意味の創造』（Gendlin, 1979/1981）では、「感じられた意味（felt sense）」「経験された意味（experienced meaning）」と呼んでおり、『フォーカシング』（Gendlin, 1979/1981）では 「フェルトセンス（felt sense）」と呼んでいる。

6. TAE シートは、「TAE リフレクション」（http://www.taejapan.org/what_tae.html）のサイトからダウンロードできる。このサイトの説明および活用方法については、得丸（2020）を参照されたい。

参考文献

小松孝至（2018）. 意味. 能智正博・香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦（編）『質的心理学辞典』（p. 15）. 新曜社.

村里忠之（2016）. 質的研究の哲学的基礎について：こころの哲学と現象学は質的研究をどのように基礎づけることができるのだろうか. 末武康弘・諸富祥彦・得丸智子・村里忠之（編著）.『「主観性を科学化する」質的研究法入門』(pp. 15–32). 金子書房.

野村康（2017）. 『社会科学の考え方—認識論、リサーチ・デザイン、手法—』名古屋大学出版会.

能智正博（2019）. 質的研究の評価をどう考えるか—「APA スタンダード」を素材として—. 『質的心理学フォーラム』*11*, 45–55. https://doi.org/10.24525/shitsuforum.11.0_45

能智正博・香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦（編）(2018). 『質的心理学辞典』新曜社.

小田博志（2012）. エスノグラフィー教育の現場から.『感性工学』*11*(1),29–32.

サンデンロウスキー, マーガレット（著）・谷津裕子・江藤浩之（訳）(2013). 『質的研究をめぐる 10 のキークエスチョン—サンデロウスキー論文に学ぶ—』医学書院.

得丸さと子（2010）. 『ステップ式質的研究法—TAE の理論と実践—』海鳴社.

得丸さと子（智子）(2011). 「感性」を扱う質的研究—TAE ステップ式質的研究法—.『感性工学』*10*(2), 99–102.

得丸智子（さと子）(2016). TAE の理論と実践. 末武康弘・諸富祥彦・得丸智子・村里忠之（編著）. 『「主観性を科学化する」質的研究法入門』(pp. 112–131). 金子書房.

得丸智子（さと子）(2018). TAE. 能智正博・香川秀太・川島大輔・サトウタツヤ・柴山真琴・鈴木聡志・藤江康彦（編）『質的心理学辞典』(p. 208). 新曜社.

得丸智子（さと子）(2019). TAE (Thinking At the Edge). サトウタツヤ・春日秀朗・神崎真実（編）『質的研究法マッピング』(pp. 143–150). 新曜社.

得丸智子（2020). 3 パート TAE（Thinking at the Edge）とウェブサイト「TAE リフレクション」.『開智国際大学紀要』*19*, 167–174.

American Psychological Association. (2020). *Publication manual of the American Psychological Association* (7th ed.).

Berger, R. (2013). Now I see it, now I don't: Researcher's position and reflexivity in qualitative research. *Qualitative Research, 15*(2), 219–234. https://doi.org/10.1177/1468794112468475

Creswell, J. W., & Cheryl, N. P. (2024). *Qualitative inquiry and research design: Choosing among five approaches* (5th ed.). Sage Publications.

Crotty, M. (1998). *The foundations of social research.* Sage Publications.

Denzin, N. K., & Lincoln, Y. S. (Eds.). (2000). *Handbook of qualitative research* (2nd ed.). Sage Publications. [デンジン, N. K.・リンカン, Y. S.／平山満義・古賀正義・岡野一郎（訳）(2006). 『質的研究ハンドブック 1 巻—質的研究のパラダイムと眺望—』北大路書房]

Egbert, J., & Sanden, S. (2020). *Foundations of education research*. Taylor and Francis.

Kuhn, T. S. (1962). The structure of scientific revolutions. University of Chicago Press. [トマス・S・クーン／青木薫 (訳) (2023).『科学革命の構造 新版』みすず書房]

Levitt, H. M. (2020). *Reporting qualitative research in psychology: How to meet APA Style Journal Article Reporting Standards* (Rev. ed.). American Psychological Association. [レヴィット, H. M.／能智正博・柴山真琴・鈴木聡志・保坂裕子・大橋靖史・抱井尚子 (訳) (2023). 『心理学における質的研究の論文作法—APA スタイルの基準を満たすには—』新曜社.]

Lincoln, Y. S. & Guba, E. G. (1985). *Naturalistic inquiry*. Sage Publications.

【受賞に寄せて】

詩作と思索における「ブランク」の活用
—TAE をふだんづかいする一つの方法—

西岡良洋

キーワード
TAE、フォーカシング、詩作、ジェンドリン、創造

1. 序

2024 年 3 月 9 日「TAE シンポジウム 2024」にて、『詩作／思索現場のブランク活用　意味の際を立てる』と題して、発表をさせていただいた。本稿はその内容に加筆・修正を行ったものである。

シンポジウムでは、批評家・詩人である若松英輔氏主催の「詩の作品発表会」にて「木蓮賞（第 12 回）」を受賞した作品が生まれた経緯について、お話させていただいた。応募した作品は、「TAE」（Thinking At the Edge）を通して生まれたものだった。

TAE とは、Eugene Gendlin（ユージン・ジェンドリン）と Mary Hendricks（メアリー・ヘンドリクス）によって生み出された、「何か言葉にしようとするのだが最初はぼんやりとした『からだの感覚』としてだけ浮かんでくるものを、新しい用語を用いてはっきりと表すための系統だった方法」（ジェンドリン, 2004）である。TAE は、14 のステップから成る。すべてを行うのはそれなりの労力が必要となるが、応募した作品の制作時のように、すべてのステップに取り組まずとも、そのエッセンスを活用するだけでも、得られるものは大きい。

たとえば私は手紙や、こうした原稿を書くときにも、部分的に TAE を活用する。新聞に投稿した記事が掲載されたこともある。投稿は、いわゆる精神疾患を経験する方が住宅資源にアクセスしようとする際に出会う、社会的障壁（部屋探しの際、精神科の患者だからと入居を断られる）を巡るものだった。その後、記事を読んでくださった方々から好意的なレスポンスをもらえ、職場の内外の人と一緒に、この問題について取り組む活動が続いている。「TAE には、**社会的な**目的がある。我々は『人間が互いに関わりあう』世界をさらに先へと進めていく。我々の様々な生き方を変えるには、個人として成長しさえすればよいというのは間違いだ。我々は新しい社会のあり方、新しい思考と科学のあり方を築きあげる必要がある。それにはお互いの協力が必要であり、誰か一人の力で創造できるものではない」（ジェンドリン, 2004）という言葉を想い出す。

私たちは時に、他者との度重なる「会話の失敗」から、言葉の力を信じられなくなることがある。言葉への不信は、暴力の温床となり得る。しかし、紡ぎ出した言葉が受け取られ、応答され、人々の間に新たな可能性が育まれる体験をする時、言葉を丁寧に紡ぎ世に送り続けることの意味、言葉を交わし合うことへの信頼を、少しだけ回復できる気がする。

以下では、TAE の「ふだんづかい」として「ブランク」を活用する手順について、二つの例を通して示したい。一つ目の例は、上述の「木蓮賞」を受賞した作品の詩作のプロセス（2.）。もう一つの例は、やや唐突に思われかもしれないが、「“ある” とはどういうことか」

というある種哲学的な問題について、素手でつかみかかっていく思索のプロセス（3.）。新たな表現が生みだされていくプロセスは、どちらも共通していることがわかると思う。実施時の留意点については、「3.3」にまとめておいた。4.では、ブランクを活用する手順の意味について考え、それを、言葉から出て言葉へ出る「創造的プロセスの（再）起動」と表現している。

２．詩作におけるブランク。「　　」へほのめく

さて、ここではブランク活用の一つの実例として、詩の作品の制作過程を見ていく。
書き始めて、私は以下の形になった段階で、先に進めなくなった。

言葉

人肌に　とけた雪華が　響き出す
「　　」ほのめく　瞬間のひとひら

問題はブランク（「　　」）の箇所。そこにぴったりくる言葉が見つからない、という状況である。うまく言えない場所をとりあえず、「　　」として表記してある。そうすればそこに、何か言いたいことがあるのだけれど、まだ言葉になっていない何かがあるという事の目印になるからだ。ジェンドリンの以下の記述は、こうした状況を説明している。

> 未完の詩を作っている最中の詩人を想像してみよう。どう書き進めようか？既に出来上がった行は何かを求めている。しかし何を？／詩人は出来ている行を何度も読み返す。そしてこれらの行が何を必要としているか（.... を欲して、を求めて、を含んでいるか）を感じてみる。詩人の手が宙に円を描く。この身振りがそれを物語る。多くの良い詩句が浮かぶ。それらはそれを言おうとする、が、言えない。空白（引用者注：ブランク blank）の方がより正確なのだ。中には良さそうなのも有るが、詩人はそれらを却下する。／その.... には言葉が無いように思われる。しかし、そうではない。それはその言葉を知っているのだ。なぜなら、それはやって来る詩句を理解しているし、かつ却下するのだから。それゆえ、それは前言語的ではない。そうではなくて、言われるべき言葉が何であるか、そして浮かんで来た詩句はそれではないことを、それは知っているのだ。丁度さっきの例のあのむずがゆい感じが忘れられていた事を知っていたように。しかも、それはその詩人の中では新しい事、ひょっとしたら、世界史の中での新しい事であるかもしれないのだ。（ジェンドリン, 1995）

「うーん」「何へほのめく、なんだろう？」「こういう感じ、なんだよな…」と、ブランクを見つめながら私はぶつぶつ言う。ジェンドリンが書いているように、意図せず「手が宙に円を描く」こともよくわかる。人は手を動かしぶつぶつ言いながら、その場所を感じ、言葉を手探りする。
この作業の中で、ブランクに入る候補として浮かんで来たのは、例えば「先」「前」「未知」

「新生」「開示」「意志」だった。「ちょっとよかったのは”意志”だけど、55 点くらいかな？」等とも考える。でもどれも、しっくりくるものではない。だから、それらの言葉は取り下げる。（しかし、なぜそのような評定が可能なのか？　それはブランクの場所に感じられている「. . . .」（意味感覚 felt sense、edge…）が、来るべき詩句を知っているからだ、とジェンドリンなら言うだろう。）

最終的にやって来た言葉は、「朝」という語。あっけない言葉に思わず、ここで「笑い」が出たことを覚えている。うまく言うことのできないその場所に、ブランクをつくり、出てくる言葉を吟味し続けながら、次なる一歩の到来を待つ。結果、「笑い」を伴う、からだで感じられる変化（フォーカシングではフェルトシフトという）と共に、「朝へほのめく　瞬間のひとひら」というフレーズが生まれた。

以上がこの作品の詩作のプロセスである。手順としては、ブランクを作り、そこに来るべき言葉を吟味するという、ただそれだけのことであるが、とにかくそこに感じられる意味に触れ、言葉を出し、取り下げ、言葉を出す…という作業を丁寧に行うことが肝要である。

さて、候補として途中で上がってきた、「先」「前」「未知」「新生」「開示」「意志」という言葉を見返してみると、「朝」という一語は、これらの語の雰囲気を帯びたイメージであることがわかる。ここで言う「朝へほのめく」そのひと時とは、これから「先」はじまる「未知」なる一日が始まろうとするその一瞬であり、昇る太陽の光と共に、世界があらたに「開き、示される」その一瞬。そして「新たに生まれる」一日へと向かい、身を投じていこうとする「意志」が、その一瞬のうちにはこめられている。これら全部を含めた意味的磁場の全体が、面白いことに“朝”の一字で収まる。ここに、フェルトセンスの一貫性が、示されていると見ることも出来る。最終的には、以下の形で完成となった。

言葉

雪の花　人肌に　そっと融けた響き
朝へほのめく　瞬間のひとひら

最初に書きかけたものと比較すると、「朝」という語が出たのちに、遡及して一行目に微調整が加えられていることがわかる。やはり、「朝」なのだから、その静けさの中に「響き」は「そっと」融けているのでなければならない。「朝」というやわらかな語感には、「雪華」という硬質な二次熟語より、「雪の華」と言い表すほうが似つかわしい。作品の中の各要素は、フェルトセンスへの照合によって、内的結びつきを伴って布置され、互いに響き合いながら全体としてひとつの意味的宇宙を明在的に開示していく（＝「意味的宇宙の和声的凝華」）。

「朝」という言葉以外にも、別の表現もありえた、とは思う。これが唯一の解であったわけではない。しかし、そこに入るのは、「夜」でも「蝶」でもいけなかった。あのブランクは、それらを拒絶する。ブランクに入るものは、何でもいい訳ではない。「朝」の語のように、まさしくこれ！　と言えるようなものでなければならない。私が TAE やフォーカシングを通して生まれた表現や理解に、ちょっとした自信を持てるとするならば、それが自分の単なる私意／恣意で創り出したものではないことによる。それは、むしろ私の私意／恣意を

否定するような、ある種の自律的な力を持って現れる。だからこそ、それは私にとって新しく、小さくても驚きがあり、喜びをもたらすものとなり得るのだと思う。

若松英輔氏は、「(…) 詩とは、自らの内面、あるいは世界の深みにあって、容易に言語化できないものを、この世に表そうとすること、この世に顕現させようとする営み」(若松,2019,p.52) だと言っている。私の体験から顧みると、「自らの内面、あるいは世界の深みにあって、容易に言語化できないもの」は、(次節で見る「如露」論のように) いかに形而上的 metaphysical であったとしても、この「からだで」physical 感受される他はない。ここでいう「からだ」は、外部から観察され物差しを当てて測定される単なる一対象ではなく、内側から生きられる身体、そこにおいて世界を感受し、世界と交わる身体、である。然るべき形で表現が生まれたかどうかは、したがって、自ずと「からだ」が教えてくれることになる。例えば驚きや、喜び、笑い、安堵、解放感…という仕方で。だから大切なのは、このように広い意味で「からだがよろこぶ」か否かに忠実であること、である。その時、私のからだは、詩をつくるという歩みを歩むことがなければ見えなかったものを見、触れることのできなかったものへと触れられる、そのような場所へ運ばれたことを知る。私にとって、詩作はそのような体験と不可分である。

3．思索におけるブランク。僕の住んでいる街には海が「　　」

3.1 問いのいきさつ

ここでは、TAE の実践の一部として「ブランク」を活用する方法のもう一つの例を示す。「ある」とはどのようなことか。唐突に感じられるかもしれないが、それを考えてみたい、とする。この問いは、哲学の伝統に属する古典的問いでもある。しかし、哲学書の中にその答えを探すのではなく、素手でこれにつかみかかっていく。

さて、私たちの世界にはたくさんのものが「ある」。ここにパソコンが「ある」。字を書いた原稿が「ある」。僕の住んでいる街には海が「ある」等。「ある」という言葉を、私たちは知っている。そして当然のように使っている。しかし、そもそも「ある」とはどのようなことなのか。語ろうとすると、言葉に詰まるのを感じないか。「ある」を辞書で引いても、「存在すること」と出てきて、「存在」を辞書で引いても「あること」などと書かれているのだから、話にならない。こう考えてもよい。「ある」の他にも、あたりまえなことだけれど、それが何かと問われたら、説明に困ることがいくつもある。例えば、「ない」「いのち」「じぶん」「こころ」「時間」「お金」等。近いはずのものがもっとも遠い。西田幾多郎の有名な一節。「我々の最も平凡な日常の生活が何であるかを最も深く掴むことに依って最も深い哲学が生まれる」(西田, 2020, p. 201)。

TAE は、「何か言葉にしようとするのだが最初はぼんやりとした『からだの感覚』としてだけ浮かんでくるものを、新しい用語を用いてはっきりと表すための系統だった方法」である (ジェンドリン, 2004)。これは、「知っているけれどもうまく言えない何か、そして言われたがっている何か」を選ぶところから始まる (ジェンドリン・ヘンドリクス, 2004))。だとするならば、「ある」とはどういうことなのかという問いは、格好の素材になると予想される。なぜなら「ある」は、つかみどころがなく説明のしようがないと同時に、だれもがその意味を知っているはずのものだからである。

3.2 ブランクを活用した思索のプロセス

さて、ここに、「僕の住んでいる街には海がある」という文がある。じじつ、私の住んでいる街には、海がある。私の住んでいる部屋のベランダからは、海が展望できる。私は、「僕の住んでいる街に海がある」ということを知っている。それを語ることはまだできないが、この文における「ある」のその意味を、知っている。だから、この文を手掛かりに「ある」とはどのようなことなのか、考えてみることとする。ここでは、「ある」が焦点なのだから、「ある」という語のある場所を「　　」（ブランク＝空所）に置き換えるという操作を加える。すると、以下の形の文が得られる。

僕の住んでいる街には海が「~~ある~~」
→僕の住んでいる街には海が「　　」

ここで行っているのは、「ある」という言葉を一時「取り下げ」て、その場所を「ブランク（空所）」（「　　」）にするということ。そしてこのように、ブランクのある文を作ったら、次のように「問いかけ」をする asking。

「この“ある”という言葉で言いたいことってなんだろう？」
「僕の住んでいる街には海が、なんなんだろう？」

そのからっぽになった場所を見つめてみよう。それは単なる空欄ではない。「ある」という言葉で言っていた当の意味そのものが、「ある」という言葉を奪われて、そこに感じられるのがわかるだろう。子どもに「“ある”ってなに？」と問われたと考えてみてもよい。言葉に窮するかもしれないが、その意味を知らないわけではないだろう。「んー、何ていったらいいかな…」と言いつつ、言葉でうまく言えない「何か」を感じているではないか。「ある」という言葉を使わないなら、僕の住んでいる街には、海がなんなのか？　海がなにしてるんだろう？

すると、このような答えがすぐに浮かんできた。

「海があるということは、海が“見える”ってことだ」。

これは、間違ってはいない。文法も破綻していない。少なくともここでいう「ある」という語は、「見える」という語に置換しても問題ないように思える。「“ある”とは“見える”ということだ」。思い起こされるのは、哲学史的にはバークリーか。存在とは、知覚されること esse is percipi。しかし、この古い哲学的命題は、少なくとも今は、私の心を掻き立てはしない。むしろ、「見える」（知覚）とは何か、ということに、もっとフォーカスして、「それそのもの」にもっと深く触れてみたいと、私は感じる。言い換えると、「ある」の「意味の質」の豊かさに触れ、「そこ」からもっと生き生きとした認識を、新たに汲みなおしたい、と思う。だから私は、「見える」という言葉を「取り下げ」て、再びブランクを作る。

僕の住んでいる街には海が「~~ある~~」
→僕の住んでいる街には海が「　　」
僕の住んでいる街には海が「~~見える~~」

→僕の住んでいる街には海が「　　」

「僕の住んでいる街には海が、何なんだろう？」

次に、このような答えが浮かんできた。「海があるということは、海が“広がっている”ということだ」。これも、間違ってはいない。ここでは、「広がる」という言葉を使ったところで、意味は通じる。日常的に人と何かを伝え合う分には、何らの問題もない。ついでに、デカルトが連想されもする。“res extensa”。物的事物においてその実体性（ある）は、延長性（広がる）と不可分の結びつきを持っていることを、400 年前この人は看破し、明晰な表現を与えていたことに、私は静かに感銘を受ける。とはいうものの、ここでの私の思索においては、それは「ある」についての新鮮な理解をもたらしてくれるわけではない。だから私は、「広がる」という言葉も「取り下げ」て、ふたたびブランクを作る。そして問う、

「僕の住んでいる街には海が、なんなんだろう…？」

(…)

ここの段階では、それなりの時間を要した。言葉が途絶え、しばらく続いた沈黙の後、浮かんで来た言葉は、思いがけず「如露（ニョロ）」であった。

「僕の住んでいる街には海が如露している」。「ある」とは「如露」である。海が「ある」とは、海が海「の如く露（アラワ）なり」ということなのだと、この言葉は言おうとする。

この言葉が現れたとき、思わず、笑いが生じた。この笑いは、言葉が奇妙で可笑しい、というだけでなく、納得のうれしさや解放感に起因するものでもあった（ジェンドリンの「フォーカシング」になじみの方向けに一言述べておくと、この笑いは体験過程尺度の「６」）。一見、「あるとは如露（ニョロ）である」という文は、ばかげているように思われる。他方で、この思索のプロセスにおいては、「そう、たしかに、言いたいのは、そういうことなんだ」という確かな納得感が伴っていた。「アルはニョロなり」という文からは、これまで言い得なかった新鮮な開けがもたらされる。そしてさらに、「露」のほうに、もっと何かがあるという方向感覚も、はっきりして来る。つまり、「Ｘがある」という時、その全体は「如露」の二字で、覆うことができるのだが、「Ｘ（＝何）が」ということも無く、ただ単純に「ある」ということ、つまりいわば「ある」の純粋な「ある性」は、「如」よりも「露」の側に重心を置いている、ということだ。

どういうことか、説明の便宜のため、「本質／実存」という西洋伝来の概念セットを用いるなら次のように説明できる。「如」は常に「何の如し」であるのだから、常に「何」を随伴する。ここで、「本質」とは、アリストテレスの “to ti ēn einai”すなわち、直訳的には「何であるか性」であること思い起こすなら、「如」は必然的に「本質」を随伴すると言ってよい。他方、「露（あらわなり）」は、「実存」の側に対応する。それゆえ、「如露」は、本質と実存をまるごと抱える一体性を表現する概念だと説明することができる。

「6.44 いかに世界があるかは神秘的でなく、神秘的なのは、世界があること、そのことである」（ウィトゲンシュタイン, 2005, p. 147）とウィトゲンシュタインは言う。なるほど、世界があることは神秘である。しかし私は、「世界が」という「何」もなく、「ある」それ自体の神秘へと直に参入していきたい。だからふたたび、この「露」の字も取り下げてしまおう。

「露」とは何か。「露」といわず「露」を言い得るか。「有語なることを得ず、無語なるこ

とを得ず。速やかに道え、速やかに道え」(『無門関』四十三則)。禅僧は、修行者から言葉を剥奪しておきながら、沈黙すら許さない。ブランクを使えば、言葉を奪っておきながら、単なる沈黙に留まらず、さらに問い進めることができる。ただし、「速やか」さは必要ない。むしろ、「ゆっくり」が大切である。

「露」=「　　」

そして、そのブランクを再び感じる。「そのブランクに入るのは…?」。問いつつ、しばし、待つ。実際の作業ではここでも、時間がかかった、と思う。

「露」=「　　」
「　　」=self-manifestation、如己として光臨…

「露」の側にあると感じられた(「X が」ということもない、純粋な)「ある性」はここで、「self-manifestation」あるいは「(如己として)光臨」と言い表された。存在の「露(あらわ)」さは、換言すると「光臨」であり、「self-manifestation」、日本語に近づけるなら「自-明」とでも言おうか。「自ずから明らか」であり、「自ら明らむ」ということ、これは「じめい」というより、「じ-みょう」とでも読ませたいものだ。これが、この時点での、「ある」について私に感受された意味の明在化 explication だった。

ところで、be 動詞には、二つの機能が存在する。

例文1:“I am with you always, to the close of the age”。

「私は世の終わりまで、いつもあなたがたと共にある」(マタイ福音書 28 章 20 節)。ここでは、am は、「いる」「ある」「存在する」、つまり実存を意味する。

例文2:“I am the Alpha and the Omega”。

「私は、アルファであり、オメガである」(ヨハネ黙示録 22 章 13 節)。この am は、文法的には「コピュラ(繋辞)」と呼ばれる。コピュラは、主語を「本質(=何であるか性)」と接続する。

さて、この二つの区分を念頭に、旧約聖書の「出エジプト記」第 3 章 14 節の一文を読むと面白い。モーセは神に、神の名を問われたときイスラエルの人々に何と回答すべきかと尋ねた。それに対し神は、“I AM WHO I AM.”(私はあるというものだ)と人々に伝えるように、と答えた、という件である。

“I AM WHO I AM.”の一つ目の AM が、「本質」を主語と接続するコピュラ(繋辞)である。そして、“I AM WHO I AM.”の二つ目の AM は実存を表す。スコラ学では神は、実存が本質に含まれると言う。つまり、神は「ある(実存)」をその本質とする(「わたしは、『わたしはある』、である」)。と、このように考えておいた上で、ここで先ほどブランクを活用して得られた洞察を交差させてみよう。「何かがある」の全体は、「如露」という言葉で表現できた。したがって「如露論」的には、「神の現存」とは「露そのものの露の如き露」だと言うことができる。さらに先ほど、存在の「露(あらわ)」さは、換言すると「光臨」「self-manifestation」「自-明」なのだと言い表されていたのだから、「神の現存」とは「露そのものの露の如き露」だというこのトートロジカルな言明は、「神の現存とは、露そのものが光

り臨んで自らを明らむということ」なのだと、その意味を幾分立体的に照明し直すことができるようになる。

「哲学学」的にはこのような思索は乱雑な仕事であって論外だろう。あるいは、ただの奇抜な言葉遊びのように見えるだろうか。確かに、私は半ば戯れにこのテーマに取り掛かり始めた。だが、「いい加減」にしていては、プロセスは進まなかっただろう。なぜならこの作業は後で見るように、ある種の忍耐と、誠実さが必要だからである。自身に感受された意味（フェルトセンス）を中心に据え、フェルトセンスを委縮させる内外の「批評家」の声から、それをしっかり守るなら、古典に埋もれる言葉も、主体的に読み直し、自分自身の作業に活かして行くことができるようになる。

3.3 ブランクを使う作業のいくつかの重要なポイント

以上、「僕の住んでいる街には海がある」を通して「ある」について考えてみるという事例を提示した。ここでは、こうした作業を行う上でポイントを以下の三つに整理しておく。①ありきたりな言葉を取り下げ、②意味の際を立て、③問いつつ待つ。

3.3.1 「取り下げる」

第一に重要なのは、既知の「ありきたりな言葉」は、取り下げて脇によけておくことである。ジェンドリンは言う。

> 私たちの言い得ることの辺縁 edge にある、言葉以上の知からさらに思考を進めるためには、ありきたりの概念や構成単位 units を解体し、新たなそれを来たらしめる必要がある。（ジェンドリン, 1998）

あるいはこうも言う。

> もし何かはっきりした事柄が浮かんでくると、それに対し私はこう告げる。「おまえはここでは用無しだ。図書館に行けばいつでも会えるからね。」（ジェンドリン,2004）

「ありきたりの概念や構成単位」「はっきりした事柄」と言われるものは、少々きつい言葉に思えるが、「用無し」だというのである。しかし、考えてみれば、すでにはっきり知れていることを、殊更に探求する必要がどこにあるのか。まだ知られていない何かをこそ、探求する価値があるのではないか。だから、「見える」や「広がる」と言った「ありきたり」で「はっきりした」ことは、いったん取り下げておく必要がある。新しい家を建てるためには、古い家を解体し、「からっぽ」の空間（ブランク）を作らなければならない。ジェンドリンは「公共言語の壁」を打ち破る、とも表現する（ジェンドリン,2004）。私たちになじみの様々な言い回しは、一定の有用性を持つものであることは確かだが、それら文化の中で人々の間に習い慣れられた言語使用の既存の様式は、体験を所定の意味分節単位へと凝固することによって、時に我々の視野を狭いスリットの中へと限定・拘束してしまう。

3.3.2 「意味の際」が立つ。ムズムズを歓迎する

では、このようにして、ありきたりな言葉（ある、見える、広がる…）を取り下げ続ける

と、何が起こるのか。当然、言葉につまる。そして、何かムズムズした感じがしてくるかもしれない。自分で自分からなじみの言葉を、奪って封印してしまうのだから、当然と言えば当然なのだが、これが決定的に重要なポイントとなる。

今回の例に挙げた「ある」は、誰もが用い、知っているはずの言葉である。にもかかわらず、それがどういうことなのか、言おうとすると、言えない、という体験をすることとなる。しまいに、「“ある”は、“ある”なんだから、そうとしか言えないよ」「“ある”は、“ない”では“ない”ってことさ」などと、苦し紛れに述べたくもなるかもしれない。しかし、このように言い得ること、それ自体が、言わんとする意味を、自分が「知っている」ことを示していることに、気づかないか。そうでなければ、「そうとしか言えないよ」とか「“ない”では“ない”ということさ」とさえ、言えないはずだから。私は「それ」を知っている。しかし、思えば先ほどこのように述べたばかりだった。「すでにはっきり知れていることを、殊更に探求する必要がどこにあるのか。まだ知られていない何かこそ、探求する価値がある」と（「探求のパラドクス」）。ジェンドリンはプラトンの想起説のような神話的な形象を用いない。「私たちが単純に知っている以上の、ある種の知 knowing であり、無知 not knowing」（ジェンドリン,1998）、それを“edge”と呼び、その働きを詳らかにしようとする。

その、ブランク（「　　」）において感じられている、「それ」。「知っていながら知らない」「これ」は、いったい何なのか。

> 「ああ、そうか」私が求めていることをようやく掴んだある学生が叫んだ。「あなたがおっしゃっているのは、『あー』とか『うー』としか言えない事なんですね」まさにその通りだった！別の学生がこう尋ねた。「それって、あの何だかムズムズする感じの事ですか？」（ジェンドリン, 2004）

「あー」とか「うー」とかしか言えないこと、「あの何だかムズムズする感じ」。これを、ジェンドリンは、edge と表現する。あるいは、フォーカシングを教えるという文脈なら「フェルトセンス felt sense」。体験過程のどのような様式であるかという文脈では、「直接の照合体 direct referent」等。

“edge”は、「辺縁」とも訳されているが、私は「際（きわ）」という日本語を試みに当ててみたい。「際（きわ）」は、広辞苑（第五版）によると、「物事のきわまったところ。つきるところ」とか「物の他と接する境目」、そして興味深いことに「重大な時期。時。折」という意味もある。edge は、（既存の）言葉が尽きたところであり、（新たに）「言葉になる／ならない」、「知っている／知らない」の、「境」でもあるだろう。ジェンドリンは edge が「多孔性（透過性）の境界領域 a porous borderzone」である、という表現も試みているから（Gendlin, 1994, p. 196）、edge を「際」と呼ぶのは大きく的を外していないだろう、と私は思う。また、少々大げさに言うなら、「際（きわ）」の一字が示すのは、「物が尽きる」という単なる欠落や否定性ではなく、むしろその否定性に接する「境界領域」に、何らかの重大な転換の到来が予示されているという事態であるように思われる。「際（きわ）」はその意味において、他に代えがたい特別な意義を有してもいる。

さて、ありきたりな言葉を取り下げて、ブランクをつくり、「ムズムズ」が感じられるということは、つまり、言葉に「なる／ならない」のギリギリのところ（＝「際」）が、前景

化してくる、ということだと言ってよい。私はこれを、「意味の際が立つ」と表現する。

「あー」「うー」としか言えないということは、ある種の「絶句」なのであるが、「意味の際が立つ」ということそのものが、ひとつの到来したステップであり前進である。だから、第二に重要なのは、ムズムズしてきたらそれを「歓迎する」ことである。慣れてくれば、「はいはい来た来た、これよこれ！」という風に、その到来を、よろこぶことができるようになるかもしれない。今はまだ言えないが、意味あるその感じ、を友好的に迎え入れ、大切にする（＝フォーカシング的態度）。人は、言葉を越えた体験の価値を貴ぶあまりに、言葉の価値を格下げし過ぎてしまうことがある。そのようなスタンスは、貴重な体験をありきたりの言葉の中「へと」押し込めてしまうことを避けるという意味では、有用なものであるかもしれない。しかし、言葉を越えたところ「から」、言葉をして新たに語らしめる、というもう一つの方途がある。その時、体験はより豊かに開かれ、人は新たな地点へと運ばれて行く。それは体験「へと」言葉をお仕着せる impose のとは反対の方向である。TAE は、「言葉が未だ欠落するその場所」（Wo Noch Worte Fehlen）から、さらなる歩みを進められるという事実を教えてくれる。

3.3.3 「問いかけ」asking、「待つ」

第三に重要なのは、意味の際 edge に触れながら、「問い続けること asking」である。2022 年 11 月に「なぞかけ博士」の岡村心平さんが札幌へワークショップに来てくださった際、「アスキングこそフォーカシングの本質」とお話しをしてくださったことが心に残っている。私の理解では、「問う」とは、（特定の観点選択を伴いつつ）「境界領域」としての「意味の際」に留まって、次なる一歩の到来へとこころを開いて積極的に待つこと、である。来るべきものが何であれ、興味をもって、やさしく。この時、「知っていること（既知のこと）」よりも、「知らないこと（無知なること）」に向かって私は心を開き、傾けるのだから、私は「知っている人（知者）」であることよりも、むしろ「知らない人（であるがゆえに知ろうとする人）」というポジションに積極的な意味を見出しつつ、その場にとどまり続けることとなるだろう。

「僕の住んでいる街には海が、なんなんだろう？」。

このように問う時、うまく言うことができないのは、たぶん、「語彙力」が無いからではない。語彙自体は、誰もがふんだんに持っているものである。必要なのは、「意味の際」に留まり、興味をもって、それと一緒にいることである。TV のインタビューで、「うれしいの一言です！」「感謝としか言えません！」といったコメントを耳にする。当人にとって、ありきたりでないはずの大切な体験をしているのは、顔を見ればわかる。そこには、もっと複雑な何かがある。それは、「～の一言」や「～しかない」といった定型の表現に押し込めることはできない。これらの強意表現は、言葉の程度を量的に強めることはできても、体験の複雑な「質そのもの」に触れることはできない。質はユニークで繊細なものである。雪華の結晶構造がそうであるように。だから私が話の聴き手なら、「うれしいの一言」という言葉も、「感謝しかない」という言葉も、いったんちょっと、横においてみませんか、とお誘いしたくなる。からだをいったんのばして、深呼吸でもしてみてもいいかもしれない。そして、

からだの真ん中あたり、のどとか胸とかお腹…に、やさしく注意を向けてみせんか、と。…。

> 人は、言葉たちが静かになるまで、それを過ぎ行くがままにせねばならない、そうして「あの全体 that whole thing」が身体で感じられるように。このような身体的な辺縁-感覚 edge-sense の到来は、ありきたりの感情とは異なるものだし、多くの人々にとってなじみのないものだ。最初、それは何かが期待できるとはとうてい思えないような場所である。人は学ばねばならない、そこで、そのそれと共にいて待つことを。そして、それがもやがかかって閉じたままでいるそのひと時のあいだ、そのそれへと繰り返し繰り返し立ち戻ることを。（Gendlin, 1984, p. 202）

ここでは、例の「あー」「う―」としか言えない「むずむずした感じ」は、that whole thing とか edge-sense と表現されている。それは最初、「もやがかかって閉じたまま」でいるかのようであると言う。そこから生まれる次なる一歩の到来（フォーカシングを教えるという文脈では「フェルトシフト」と呼ばれる）は、意図して起こすことのできるものではない。私は「もやがかかって閉じたまま」という表現から、もの静かな卵を連想する。卵を力づくで開こうと殻を割れば、内なる生命を死にさらすことになる。賢い親鳥は忍耐強く、卵を温め続ける。

> フェルトセンスへの問いかけ asking。これは他の誰かに問いをなげかけてみることと、とてもよく似ている。問いかける。人は、*そこで*、*待つ*。（Gendlin, 2003, p. 59）

> フェルトセンスが、すぐにシフトし、答えてくれなかったとしても、まったくそれでよいのである。少しばかり時間をとって、それと一緒にいてみよう。いつシフトが到来するかを、私たちにコントロールすることは、出来ない。（それはいわば『恩寵 grace』なのだ）。フェルトセンスの感受に費やす、時の間の持続。これこそが決定的に肝要である（もう一度、もう一度、と、繰り返しそこへと立ち戻ること）。（Gendlin, 2003, p. 59）

私たちは門の前へと訪れ、扉を叩くことは出来る。しかし私たちの手に、鍵はない。扉は、常に内側から開く。ジェンドリンの言うように、いわば“grace”として。なお、「決定的に肝要」とされる「フェルトセンスの感受に費やす、時の間の持続」こそが、フォーカシングそのものであることも、付け加えておく。

> 「フォーカシング」という言葉は、
> あの内面的に感じられた縁に注意を向けるために時間をかける
> ということを意味します。
> それが沈黙の中で起こるとき、
> 次なるもの、そしてさらに、次なるものが、
> 深いところから、さらに深いところから
> 徐々に現れるのです。（ジェンドリン・池見, 1999, p. 40）

４．創造とまこと

以上、ブランク活用の実例を、2 つ提示してみた。最後に、あらためて、ブランクを使い、「edge で考える」ことの意味について、考えておきたいと思う。手掛かりとして、上田閑照先生の「言葉から出て言葉に出る」という言葉をお借りしたい。

> 創造的な言葉、「まことの言葉」というものがあるのではなく、「言葉から出て言葉に出る」この運動によってこそ言葉が創造的となり、まことになるのである。（上田, 1993, p. 97）

さて、「ブランク」を作るとき、この作業において、「ありきたりの言葉」は「取り下げる」ことになる。それは、いったん既存の「言葉から出る」ことだ、と言えるだろう。「言葉から出る」時、私たちは「際」edge に触れている（「意味の際」が立つ）。しかし、そこで終わることなく、「問いかけて待つ」ことを通して、「言葉に出る」ことが試みられる。なぜなら、その「際（きわ）」は、言葉の欠如という単なる消極性を示すものではなく、何らかの転換、次なるステップの生起へとほのめく何かであることを、（TAE やフォーカシングの実践を通して）私は知っているからだ。

「~~ある~~」→「　　」→「如露」
~~「先」「前」「未知」「新生」「開示」「意志」~~→「　　」→「朝」

このように、私たちは、新たに「言葉に出る」ことを体験する。出た先の言葉は、「朝へほのめく」であるとか、「あるは如露なり」など、奇妙なものであるかもしれない。ジェンドリンが先ほどブランクに感じられていることは、「ひょっとしたら、世界史の中での新しい事であるかもしれない」と述べていたことがここで想い起こされる。それは、人類が初めて経験する、「新しい事」であるかもしれない。その意味で、「言葉から出て、言葉へ出る」ことで、言葉が「創造的」と成り得ることは、了解可能である。言葉が絶え、沈黙に触れ、その場所に留まることで、次なる一歩への可能性が育まれる。したがって、ブランクをつくる事は、「創造的プロセスの（再）起動」なのだと言うことができるだろう。

他方、そのような運動を通して表現された言葉の「意味内容」が唯一不変の真理である、という意味で、「真（まこと）」であるかというと、それは疑問である。引き続く人生の中で、かつて「真」と思われたことの欠点や間違い、限界に気づくこともあるだろう。だが、先ほど、TAE やフォーカシングで生まれるものは、単なる私の私意／恣意ではない、と述べた。この運動においては、人はそのとき私意／恣意でなく感ぜられる事実からそのままに、自分の言葉で言い表すことになる。だから、その人の一連のあり様を指して「誠（まこと）」だ、とは言うことはできないか。考える私と、現実を生きる私が二人いるわけではない。そこで感じられている意味が、いかに形而上的 metaphysical であったとしても、それは、この「からだで」physical 感受される他はない、と上で書いた通り、ここでは、考えることと自分が生きることとは、別でないのである。

５．結

若松英輔氏は、「(…) 詩とは、自らの内面、あるいは世界の深みにあって、容易に言語化できないものを、この世に表そうとすること、この世に顕現させようとする営み」（若松, 2019, p. 52）と言い、しかも、「内なる詩人は万人の中にいる」（同上,p.130）と言う。ちなみに引用した著書のタイトルは『詩を書くってどんなこと？　こころの声を言葉にする』であった。しかし「こころの声を言葉にする」ということは、どういうことなのだろうか。このような表現それ自体が詩的で、つかみどころが無く感ぜられないか。いくら、「内なる詩人は万人の中にいる」と言ったところで、結局、詩作は一部の人によって行われる、あやふやな営みのように見えはしないか。たしかに、詩作は、単なる論理ではない。先ほど見たように、その展開はある種の「恩寵 grace」だとさえ言え、時に、そのプロセスから現れたものに自分自身さえが驚かされる。

「オカルト」の語義は元来「隠されたもの」「秘技」だと言う。実証を重んずる科学が、原理的には公共的に誰もがアクセスできる知識であり、所定の手順を踏みさえすれば、誰もが同じ結果を再現することのできるはずのものであるのに対し、錬金術も占星術も、特別な術者にしか可能でない秘められた業（わざ）であった。その意味では、フォーカシングや TAE は「秘儀」ではない。なぜなら、「フォーカシング」や「edge で考えること」のプロセスの様式は繰り返し観察可能なものであり（そのプロセスがどのようなプロセスであるかは、『セラピープロセスの小さな一歩』所収のジェンドリンの論文「人格変化の一理論」などを参照)、そのやり方は他者に伝達可能（教えられる）なものとして定式化されているためである。実際、多くの人が反復練習し、体験しているのだから、フォーカシングや TAE はいわば「公共財」だとさえ言える。

今回紹介したブランクを使うというささやかな手順も、「TAE のふだんづかい」として誰もが行うことが出来る。例えば、小説の感想を書きとめる時、手紙を書くときなどでもよい。ざっと文章を書きとめて行って、大事だけれどうまく言えないところは、「　　」にしておく。そうすれば、ここに何かがあることがはっきりする。それから、いったん筆をおいて、目を閉じてみてもよい。そして「その場所」を感じながら、ゆっくりと、丁寧に、いくつか言葉を出してみる。しっくりこなければ、取り下げて、またその場所へと戻る。そしてまた言葉を出してみる。そうすると、「言葉から出て、言葉へと出る」をシンプルに実践できる（実施上の留意点については、「3.3」にまとめたとおり)。

TAE は、今回主題とした「ブランク」に尽きるものではないが、一部の実践だけでも、感受された意味の複雑さを味わいつつ、そこから新たに言葉を紡ぎ出して行く、その豊かな可能性に触れられると思う。この文章が、フォーカシングや TAE に関心をもたれる方に読まれ、何か良き新しいものが生まれるきっかけになると嬉しい。

参考文献

ユージン・ジェンドリン. (1995). 国際フォーカシング研究所（TIFI）日本語ページ（村里忠之, Trans.）.「交差と浸ること：自然的理解と論理構成との境界面に迫るための幾つかの用語」. https://focusing.org/jp/gendlin-crossing-jp

ユージン・ジェンドリン. (1998). 国際フォーカシング研究所（TIFI）日本語ページ（西岡良洋, Trans.）.「哲学への序説」https://focusing.org/sites/default/files/upload/2022-04/introductiontophilosophy.pdf

ユージン・ジェンドリン. (2004). *THE INTERNATIONAL FOCUSING INSTITUTE*（村川治彦, Trans.).「『TAE（辺縁で考える）』への序文」https://focusing.org/jp/tae-intro-jp

ユージン・ジェンドリン、メアリー・ヘンドリクス. (2004). *THE INTERNATIONAL FOCUSING INSTITUTE*（村里・村川, Trans.）.「辺縁で考える（TAE)のステップ」https://focusing.org/jp/tae-steps-jp

ユージン・ジェンドリン、池見陽. (1999).『セラピープロセスの小さな一歩 』（池見陽・村瀬孝雄, Trans.）. 金剛出版.

西田幾多郎. (2020).『西田幾多郎講演集』（田中裕, Ed.）. 岩波書店.

上田閑照. (1993).『禅仏教』岩波書店.

若松英輔. (2019).『詩を書くってどんなこと？　こころの声を言葉にする』 平凡社.

L・ウィトゲンシュタイン. (2005).『論理哲学論考』（中平浩司, Trans. ）. 筑摩書房.

Gendlin, E. T. (1994). *The obedience pattern. Studies in Formative Spirituality*, *5*(2), 189–202. https://focusing.org/gendlin/docs/gol_2057.html

Gendlin, E. T. (2003). *Focusing* (25th anniversary edition). Rider Books.

【受賞に寄せて】

受賞に寄せて
—TAE に支えられている「私」—

本岡美保子

キーワード
TAE、質的心理学、オートエスノグラフィー、大学教員、キャリア

1. はじめに

筆者が TAE を初めて知ったのは、社会人大学院生として博士課程前期に在籍して 2 年目の、2017 年のことであった。質的研究法に関する授業の中で紹介していただき、「うまく言葉にできないけれども言葉にしたい何か」（得丸，2010）にとどまって、自分のこれまでのキャリアについて言語化したのが、初めての TAE である。フェルトセンスという言葉の響きや概念に魅了され、自分の感覚から研究を立ち上げていくというところに、筆者は強く惹かれた。しかしその後、残念ながら TAE を実践することはなく、月日だけが過ぎていった。

その後、博士課程後期に進学し、大学教員として働きながら研究に勤しむ日々を送っていた筆者に、いよいよ博士論文を執筆するという時が来た。しかし、研究方法論がしっくりきておらず、このままでは書くことができないというところまで追い込まれていた。大学教員になる前の、保育者として子どもたちとわらべうたをしていた時の記録をもとに、研究を行っていた筆者は、その時の自分の感覚に留まって、その感覚を言語化するための方法論を探していたのである。そんな時、ふっと思い出したのが TAE であった。

筆者の研究には TAE が合うのではないかと直感的に感じた筆者は、それからすぐに「TAE パーソナル連続講座」の受講を申し込んだ。そして講座を受けながら、2023 年 3 月には、博士論文を書き上げることができた。得丸先生や講座のみなさんに伴走してもらいながら、書いたようなものである。博士論文の執筆と同時並行で読んでいたジェンドリンの著書から、ジェンドリン哲学の奥深さにも触れ、ますます TAE が好きになった。

そして今、実践者が自らの実践を研究として出していくための方法論として、筆者の専門分野である保育学の研究に、TAE はきっと寄与するだろうと確信している。そのために筆者にできることは、TAE に基づいた研究を論文として書くことであろう。その布石として、これまでも学会発表を行ってきたが、その一つである日本質的心理学会 20 回大会で、優秀賞をいただいた。本稿では、この受賞に関する報告に加え、受賞後に「TAE パーソナル講座」で行った TAE を紹介することで、保育者から大学教員へとキャリアチェンジをした筆者を、TAE がどのように支えているのかを紐解き、研究から日常まで、幅広く活用できる TAE の魅力を伝えたいと考える。

その方法として、本稿は、オートエスノグラフィーの手法を用いる。オートエスノグラフィーとは、内省的な行為を通して文化的・社会的文脈の理解を深める研究手法（井本, 2013）であり、主観的もしくは相互主観的な記述を通して、個別性や他者・共通性理解をめざすもの（土元，2022）である。オートエスノグラフィーには、記述や表現、生きることそのもの

までをも含む行為としてのオートエスノグラフィーと、研究に活用する分析データとしてのオートエスノグラフィーがあると考えられるが、本稿は前者の、行為としてのオートエスノグラフィーを志向するものである。

以上を踏まえ、本稿はTAEに関するオートエスノグラフィーをもとに、TAEが保育者からキャリアチェンジした一人の女性大学教員のキャリア形成をどのように支えているのかを考察し、TAEの持つ可能性についても言及したいと考える。

なお、オートエスノグラフィーの記述に際しては、筆者が当時書いていたfacebookの記事を参照することで、再帰的な記述になることをめざした。オートエスノグラフィーの中では筆者のことを私と表記し、考察においては、本稿を書いている筆者から距離を取るために、「私」とする。

２. 思いがけない受賞

2023年11月4日。日本質的心理学会20回大会が、立命館大学いばらきキャンパスにおいて開催された。日本質的心理学会は、2004年に設立されて以降、質的研究の推進や相互対話の場として、年1回の年次大会を行っている。私は数年前から学会員ではあったものの、参加するのも発表するのも、このときが初めてであった。発表は、「一般の部」と「優秀賞選考セッション」とに分かれており、博士論文を執筆したばかりの私は、博士論文執筆後3年以内というエントリー資格に当てはまっていたため、「優秀賞選考セッション」に挑戦することにしていた。こんな内容でエントリーしたのかと思われるのが嫌で、発表の前には、自主的にやっている勉強会で発表をして意見をもらい、何度も内容を練り直して臨んだ。

日本質的心理学会には、様々な専門分野の方が参加されていると聞いていたため、会場に向かう道中も、私はなんとなく心細い気がしていた。しかし会場で、私も事務局の一人として参加している「オートエスノグラフィーと詩的探究フォーラム」の仲間たちに会い、お互い励まし合うことで、いつも通りの自分になることができた。

発表のタイトルは、「乳児保育においてわらべうたによって生じる身体的同調－保育者であった筆者の経験をもとに－」（本岡，2023）である。身体的同調とは、身体的コミュニケーションによるリズムの同調（中川・楠見・前田・服部・中田, 2017）のことであり、呼吸のタイミングや相槌のタイミングなど、第三者から客観的に観察されうる現象である。しかしこの研究では、第三者ではなく実践の当事者であった筆者の経験の記述に基づき、その経験の内側から、身体的同調の様相を示した。研究の方法論としてTAEを用い、分析を行なった。子どもと私とのわらべうたを、どちらのものとは切り分けられない相互作用とみなし、その経験の記述を何度も読み返すことでその時の自身の感覚に浸り、身体感覚と言語シンボルとを相互作用させ、身体的同調を経験の内側から言語化したのである。

いよいよ私の発表の時間になった。口頭発表の教室は、サテライト会場になっている教室とオンライン会議システムでつながっており、参加者は2つの教室に分かれて発表を聞くという仕組みだった。このようなやり方は初めてで、機械操作が苦手な私はパソコンを前にやや躊躇しながらも、画面を共有して発表を始めた。1分程度、話し始めた頃だった

ろうか、サテライト会場に音声が届いていないと言われて中断。機材調整をしてもらって、話し始めてすぐにまた中断。結局、音声は届いていたので何も変わらなかったようだったが、その間に私の頭の中は、真っ白になっていた。もう辞めようか・・・。一瞬、そんな思いがよぎったが、ここで辞めたら自分に負けることになると、とにかく最後までやろうと思い直して、発表原稿を読み終えた。とても長く感じた、12 分間であった。

質疑応答の時間、会場にいた仲間たちが、沈んでいる私を励ますかのように、質問をしてくれた。他にも質問をしてくださった方が何人かいて、発表時間に言い尽くせなかった部分を伝えることができた。リクエストに答えて、その場で発表内容に関連するわらべうたを歌わせてもらったりもした。終了後には、発表を聞いていてくれた仲間の 1 人が、すごく良かったと、わざわざ伝えにきてくれた。慰めるつもりであったのだろう。その言葉にホッとして、涙が溢れた。

それから 1 ヶ月ほど経ち、次回こそはリベンジしようと前向きな気持ちになり始めた頃、優秀賞受賞の知らせが届いた。嬉しいというより、なぜだろうという気持ちの方が強かった。そしてすぐに、あの時会場にいた人たちはどう思うのだろうかということが、頭に浮かんだ。送られて来た賞状を前に、気持ちの整理がつかないまま 3 月を迎えた。

2024 年 3 月 9 日。第 10 回の TAE シンポジウムが開催された。私は、この受賞に関する報告を行うことになっていた。オンラインで行われたこのシンポジウムの中で私は、受賞した発表内容について、TAE に基づいた分析の部分を中心に紹介をした。すると、参加者の中に、日本質的心理学会 20 回大会の実行委員長の先生がいらっしゃり、私の発表についての過分なるお褒めの言葉と、今後の研究に向けた励ましの言葉をくださった。もちろんその時まで、シンポジウムに参加されているとは夢にも思わなかった。他にも、日本質的心理学会の立ち上げに関わった先生も参加されており、その先生からも、温かい励ましの言葉と研究に対するご助言を頂いた。お二人から、貴重なお言葉を頂いたことで、初めて私自身が、受賞を納得することができた。

賞をいただけたのは、実践の当事者による一人称の研究はとても難しいこと、それを TAE という方法論によって行なったことが主な理由であったろうと思われる。これまで心理的な現象として、客観的な見方でしか研究がなされてこなかった身体的同調を、一人称の研究として実践者の内側から言語化することができたのは、ひとえに TAE のおかげである。本稿では、発表内容の詳細をお伝えすることはできないが、いつか論文として公表できるよう、今後も研究を続けていきたい。

この思いがけない受賞の顛末を、私は自分の Facebook に記していた。その最後には、このような言葉があった。「誰かと競うのではなく、自分自身を超えていけるように。少しずつでもいいから。」と。大学教員というのは、教育においては学内の先生との連携の中で、協力関係に基づいて進めていくことができる。しかし、研究においてはそうもいかず、常に孤独が付きまとう。業績が求められる中、強い気持ちで研究を続け、自分の研究を更新していくことが必要になる。私はこの受賞以降、研究を更新していくということが、弱い自分を超えていくこと、更新していくことでもあるのではないかと考えるようになった。そしてそのどちらの更新にも、私の場合、TAE が欠かせないと思っている。TAE は、これからも研究を続けていく私の研究方法論上の強みでもあり、自信と勇気を与えてくれる、大事な相棒でもあるからである。

３. 受賞後の私

私が先に述べた賞を受賞したのは、保育者養成に関わりたいという一心で、保育者からキャリアチェンジをして、7 年目のことだった。保育者になる前には育児に専念していた時期もあるなど、私は大学教員になるまで、どちらかというと職業的キャリアよりも、家庭生活を優先してきた。そのせいかこの仕事に就くまで、大学教員というものがどのような立場なのか、あまりよくわかっていなかった。一口に大学教員といっても、さまざまな立場がある。非常勤講師と専任教員、任期付き雇用と任期なしの雇用。私の場合は、大学等での非常勤講師を経験した後、任期なしの専任教員として職を得、その後、任期付きの専任教員として現在の大学に雇用されている。このような私の状況には、高等教育の問題と女性の就労問題とが、関連していると考えられる。

我が国においては、近年の急速な少子化の進行によって、高等教育の在り方が議論されるようになり、「中央教育審議会 大学分科会 高等教育の在り方に関する特別部会」の中で、全体の規模の適正化や、高等教育機関間の連携、再編・統合等の取組の必要性などにも触れられた（文部科学省，2024）。少子化に合わせて高等教育全体の規模を縮小することになれば、当然そこには、教員数の削減も含まれることになる。しかし、依然として大学教員の雇用や待遇の保障に関する議論は進んでいない（文部科学省，2025）。任期付きの専任教員である私は、任期終了後の雇用の保障がないため、この問題の当事者であると言って良いだろう。

加えて我が国には、女性の就労に関する問題も根強く残っている。令和 5 年の調査では、女性の労働人口は前年より 28 万人増加し、正規雇用が 18 万人も増加しているものの、非正規の職員・従業員は 53.2%と、男性の 22.5%に比べると依然として高い傾向にある（厚生労働省，2024）。こうした状況による影響は、これまでも、性別による賃金格差として如実に現れており、年齢が上がるにつれてその格差は拡大傾向にある（内閣府男女共同参画局，2022）。諸外国と比べて、性別による賃金格差が大きいことも指摘されており（内閣府男女共同参画局，2022）、この問題は、我が国の女性の経済的自立や尊厳とも、深く関わっていると考えられる。子育てに専念するために専業主婦をしていた時期が 10 年以上あり、大学の専任教員になって 6 年足らずの私にとって、女性の就労に関する問題は、他人事には思えないどころか、まさに直面している事態である。

私を取り巻くこの 2 つの問題は、優秀賞を受賞することがあっても、いつも不安で自信が持てないという、精神的なゆとりのなさにもつながっていた。何かに追われているような気がしていて気が休まらず、頼まれたことは断ることができず、この仕事を長く続けられるようにと毎朝毎晩、祈るような日々だった。そんな毎日を送っていた 2024 年 6 月 9 日、私は「TAE パーソナル連続講座」に参加した。ここからは、TAE の分析過程も説明したいため、分析の順番を示す番号とその項目は、太字で示す。また、実際に記入した分析シートは、文末に表 1 として示している。

オンラインの画面上では得丸先生が、今の気持ちに留まって、フェルトセンスに浸ってみましょうとおっしゃり、私は自室で一人、じっと目を閉じた。それからおもむろに目を開け、マイセンテンスシートの **①テーマ**の欄に、「人生のサバイバル」と書いた。これが何を意味するのか、この時の私にはわからなかったが、だからこそ、わかりたいと強く願

ったことだった。もう一度目を閉じて、胸の痛みにじっと浸った。浸るだけ浸ると、その痛みを両手で抱えるようにして目の前に持ってくることができたような感覚になった。この感じは何だろう・・・。私は再び目を開け、心に思い浮かぶままに、マイセンテンスシートに **②浮かんでくる語句** を書いていった。途中で、胸の痛みがふっと消えてしまいそうになると、もう一度体の感覚に戻って、浸り直すこともあった。そうして書いた言葉は、「怒り　憤り　理不尽　やってもやっても　追いつかない　ずるい　踏ん張る　耐える　踏みとどまる、、、」だった。その中でも大切な言葉として「怒り　理不尽　ずるい　踏みとどまる」に下線を引き、そこからさらに **③仮マイセンテンス**として「ずるい　踏みとどまる」を作った。ここで私は、自分の思いの強さや感情の激しさに、少し驚いていた。こんなにも強い思いや激しい感情があることを、言語化するまで気づいていなかったのかもしれない。

そして、仮マイセンテンスの「ずるい　踏みとどまる」のうち、最も大切な言葉だと感じた「ずるい」を **④空所にした文章**「＿＿＿＿＿踏みとどまる」を作って、「ずるい」を **⑤キーワード１**とした。「ずるい」の **⑥通常の言葉の意味**を書き、そこで感じた差異に浸りながら私が感じている「ずるい」の意味、すなわち **⑪フェルトセンス独自の意味**を書いた。マイセンテンスシートには、キーワードと通常の言葉の意味を先に３つ書くようになっているが、私がやったような手順でも良いことは、事前に得丸先生から聞いていたことを補足しておく。

このようにして空所を感じながらキーワードを出し、そこから通常の言葉の意味と、フェルトセンス独自の意味を書いていき、大切だと感じる言葉に波線を引いていった。そして、すべてのキーワードと、大切だと感じて波線を引いた言葉を空所に入れて **⑭拡張文**を作った。拡張文は「ずるい　腹立たしさ　人ごと　不平等　ぶつけようのない　気づかれない　孤立感　理不尽　切り分ける　自分を守る　保つ　踏みとどまる」という文章になった。これを何度も読み返し、この感覚に浸っていると、思いのほか強い思いに支配されている部分、どうしようもなく他の人と比較してしまう部分が、切り分けるという言葉とピッタリと寄り添うように感じられた。切り分けるとはすなわち、自分が抱えている嫉妬や妬みにも似たしんどさを、自分自身と切り離すことであり、人は人と割り切ることである。切り分けることによって他者には気づかれないようにすることで、自分自身を保っているのだということが、納得感を持って胸に迫ってきた。これを短い言葉で言語化したものが、**⑮マイセンテンス**「切り分ける強さを忍ばせて保つ」である。このマイセンテンスができた時、私の心はとてもスッキリし、先ほどまでの激しい、憤りにも似た感情が収まっていた。自分の思いを言語化することで、冷静さが取り戻せたのである。そして、マイセンテンスの補足である **⑯メモ**に、「自分がこれまで頑張ってきたこと、たとえば子育ての大変さ、お金がかかること、キャリアを積むことを、あっさりと手に入れられる人たちがいることに対する憤りを抱えてどうしようもない。そういうことと自分とを切り分ける強さを忍ばせて、なんとか自分を保とうとしている感じ。」と書いて分析を終了した。

分析に要した時間は、１時間にも満たなかったように記憶している。分析の後、受講者がそれぞれ、自分のテーマと分析を発表した。私も他の方と同様に、自分のテーマと分析を発表した。すると、聞いてくださっていた受講生のお一人が、感想として「琴線に触れたような気がした」とおっしゃった。その人は、大学教員でも女性でもない。全く違う背

景を持った人であるにも関わらず、琴線に触れた感じがしたというのは、分析の結果得られた「切り分ける強さを忍ばせて保つ」というマイセンテンスが、私の経験や身体感覚を超え、「普遍的なもの」（得丸，2010）としてその方に届いたからだろうと考えられる。そして、「琴線に触れたような気がした」というフィードバックは、孤立感を感じていた私に、「一人じゃない」という心強さをもたらしたのである。

賞をいただいても精神的な余裕を持つことができなかった私にとって、この時の TAE は、自分自身を愛おしく感じるような、そんな経験となった。私は頑張っている、それで十分ではないか、と。今でも時折、不安に苛まれて気持ちが落ち着かなくなると、研究とは別に TAE を行うことで、心の平穏を取り戻そうとすることがある。通常の TAE だけではなく、『TAE による文章表現ワークブック』（得丸，2008）なども活用することで、より身近に行うこともできる。私にとって TAE は、暗闇の中にある道を照らしてくれる、光なのかもしれない。

４. おわりに

オートエスノグラフィーとして書き起こし、さらにそれを読み返すことで、自分自身の経験を一つのナラティブとして、俯瞰的に捉え直すことができた。そこで改めて、TAE が、保育者からキャリアチェンジした一人の女性大学教員のキャリア形成をどのように支えているのかを考察し、本稿を閉じたいと考える。

TAE は、研究と生活という 2 つの方向から、保育者からキャリアチェンジした一人の女性大学教員である「私」を支えていると言えるだろう。はじめ、TAE は「私」にとって、研究のための方法論であり、博士論文を書くために学ぶべきものいう意味合いの強いものであった。博士論文執筆後においては、「私」に思いがけない受賞をもたらしたことから、「私」のキャリア継続にも寄与する可能性を含んだものにもなった。「私」が「研究方法論上の強みでもあり、自信と勇気を与えてくれる大事な相棒でもある」と述べているように、TAE は、大学教員として研究を続けていく「私」にとって、必要不可欠な存在になっていったと言えるだろう。

生活という面では、女性の就労に関する問題が山積し、少子化による高等教育の縮小が懸念される中で、大学教員という仕事を継続できる保障も自信もない「私」の、行き場のない思いや感情を整理する方法として、TAE は役立っていた。分析のプロセスの中に、言語化するまで気がつかなかったような自分の思いに気づき、感情に身を委ねる時間と、身体感覚と言語感覚を行き来することによって冷静になっていく時間とがあったことで、心の整理が可能となったのであろう。分析者自身の精神にも影響を及ぼすのは、分析のプロセスそのものが、身体感覚との相互作用である TAE の特徴によるものだと考えられる。また、受賞の時も受賞後も、分析結果を共有することで、エンパワメントされる時間もあった。TAE によって問題が解決されるわけではないが、「私」が「自分自身を愛おしく感じるような、そんな経験となった」と述べているように、TAE を行うことは「私」にとって、問題を受け止めて対処しようとしている自分に対する愛情を感じる契機となっていた。

以上のように TAE は、保育者からキャリアチェンジした一人の女性大学教員である「私」に、自信や自分への愛情をもたらすような形で、研究と生活の両面から支えていた。そして

このことは、周囲の状況をも変える可能性があることを暗示する。というのも、オートエスノグラフィーの中では直接的に触れられてはいないが、TAE は「Interaction is first」(Gendlin, 2004)、すなわち、相互作用が最初なのだという考え方に則っている。身体は、状況全体を感知して暗黙のうちに次の行動を形作り（Gendlin, 2004）、環境や状況との相互作用によって、常に更新されていくのである。あらゆる事象は相互作用として生起しており、相互作用そのものが事象の本来的なありようなのである（末武，2009, p. 195）。このような考え方をもとにすると、日常に起こっていることは、相互作用の結果であって、誰のせいでもないと考えることもでき、無闇に自分や他者、その場の状況などを責める必要がなくなる。また、より良い相互作用が、良きものとしてのお互いを作っていくと考えると、安定した自分自身であることは、相互作用の相手である他者や置かれた状況が安定していることでもある。自信や自分への愛情が一方にもたらされるということは、相互作用の相手にも同様の効果があると考えることができるのである。TAE によって自分自身の内部で起こる相互作用を経験することは、「Interaction is first」の経験そのものとなって、相互作用をより良いものにしていく感覚を、自分自身の中に取り込んでいくことにもなるだろう。

本稿で扱ったのは、保育者からキャリアチェンジした一人の女性大学教員である「私」一人の経験の記録であり、即座に、誰にも当てはまるものではない。しかし、TAE が分析者の精神にも影響を及ぼす分析方法であるという特徴に鑑みると、TAE が、「私」以外の人に対しても、なんらかの効果をもたらすということは否めない。TAE が、自分自身と周囲とを、より良いものへと変えていく可能性を持つものとして、多くの人の仕事や生活に波及していくことを願う。

表 1

TAE の分析シート

<table>
<tr><td colspan="3">① テーマ＊テーマを１つ選び、「この感じ」としてもつ。下に事柄をメモする。
人生のサバイバル　（2024.6.9）</td></tr>
<tr><td colspan="3">② 浮かんでくる語句＊「この感じ」のフェルトセンスに浸りながら書く
怒り　憤り　理不尽　やってもやっても　追いつかない　ずるい　踏ん張る　耐える　踏みとどまる、、、
＊大切な語、数個に下線を引く</td></tr>
<tr><td colspan="3">③ 仮マイセンテンス＊フェルトセンスを短い１つの文または句にする。語も文型も自由に作る。
ずるい　踏みとどまる
＊最も大切な語句に二重線を引く</td></tr>
<tr><td colspan="3">④ 空所のある文＊仮マイセンテンスの二重線の部分を空欄にした文を書く。
（　　）　踏みとどまる
＊空欄に入る言葉をフェルトセンスから呼びだす</td></tr>
<tr><td colspan="3">キーワードの通常の意味と、フェルトセンス独自の意味を書く</td></tr>
<tr><td>⑤キーワード１
ずるい</td><td>⑦キーワード２
腹立たしさ</td><td>⑨キーワード３
人ごと</td></tr>
<tr><td>⑥通常の意味
人をだしぬいて自分が得をするよう</td><td>⑧通常の意味
しゃくにさわって不愉快なこと。</td><td>⑩通常の意味
自分には関係のない、他人の事。</td></tr>
</table>

な、正しくないやりかた。		
⑪フェルトセンス独自の意味 格差　ギャップ　不平等 不満　タイミング　バカバカしい　腹立たしさ　、、、	⑫フェルトセンス独自の意味 ぶつけようのない　気づかれない　みてみぬふり　目を背ける 平穏を装う　人ごと 味方がいない　孤立感　、、、	⑬フェルトセンス独自の意味 場違い　イライラ　理不尽 切り分ける　自分を守る　保つ
＊大切な語、数個に波線を引く		
⑭⑰拡張文を書く　＊空欄に、すべてのキーワードと波線の語を並べた文を書く （　ずるい　腹立たしさ　人ごと　不平等　腹立たしさ　ぶつけようのない　気づかれない 孤立感　理不尽　切り分ける　自分を守る　保つ）踏みとどまる		
⑮マイセンテンス　＊フェルトセンスを短い１つの文にする。語も文文型も自由に作る 切り分ける強さを忍ばせて保つ		
⑯メモ（マイセンテンスの補足） 自分がこれまで頑張ってきたこと、たとえば子育ての大変さ、お金がかかること、キャリアを積むことを、あっさりと手に入れられ人たちがいることに対する憤りを抱えてどうしようもない。そういうことと自分とを切り分ける強さを忍ばせて、なんとか自分を保とうとしている感じ。		

参考文献

Gendlin, E.T. (2004). Five philosophical talking points to communicate with colleagues who don't yet know focusing. Staying in Focus. *The Focusing Institute Newsletter, 4* (1), 5–8. https://focusing.org/gendlin/docs/gol_2187.html（最終閲覧日 2025.3.30）

井本由紀（2013）．オートエスノグラフィー―調査者が自己を調査する―．藤田結子・北村文（編）『現代エスノグラフィー―新しいフィールドワークの理論と実践―』(pp. 104–111)．新曜社.

厚生労働省（2024）．働く女性の状況. https://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/josei-jitsujo/dl/23-01.pdf（最終閲覧日 2025.3.27）

厚生労働省（2025）．性別に見た賃金．令和６年賃金構造基本統計調査　結果の概況. https://www.mhlw.go.jp/toukei/itiran/roudou/chingin/kouzou/z2024/dl/02.pdf（最終閲覧日 2025.3.27）

文部科学省（2024）．急速な少子化が進行する中での将来社会を見据えた高等教育の在り方について（中間まとめ）https://www.mext.go.jp/content/20240808-mxt_koutou02-000037412_1.pdf（最終閲覧 2025.3.27）

文部科学省（2025）.「急速な少子化が進行する中での将来社会を見据えた高等教育の在り方について（答申（案））」に関する意見募集の実施について.

https://www.mext.go.jp/content/20250128-mxt_koutou02-000039884_6.pdf（最終閲覧日 2025.3.27）
本岡美保子（2023）．乳児保育においてわらべうたによって生じる身体的同調保育者であった筆者の経験をもとに―.『日本質的心理学会 第 20 回大会 プログラム抄録集』72
内閣府男女共同参画局（2022）．男女間賃金格差について．
https://www.gender.go.jp/kaigi/renkei/kikaku/55/pdf/1.pdf（最終閲覧日 2025.3.27）
中川友貴・楠見茉耶・前田佳史・服部託夢・中田一紀（2017）．身体的コミュニケーションにおけるリズム同調を促進するインタラクティブ音楽演奏システム.『インタラクション 2017 論文集』864−867.
末武康弘（2009）．身体―環境，暗在的含意と生起，進化そして行動―『プロセスモデル』第Ⅰ章〜第Ⅵ章―．諸富祥彦・村里忠之・末武康弘（編著）『ジェンドリン哲学入門―フォーカーシングの根底にあるもの―』（pp. 191–254）．コスモス・ライブラリー.
得丸さと子（2008）.『TAE による文章表現ワークブック』図書文化社.
得丸さと子（2010）.『ステップ式質的研究法―TAE の理論と応用―』海鳴社.
土元哲平（2022）.『転機におけるキャリア支援のオートエスノグラフィー』ナカニシヤ出版.

【特別寄稿】

ゲーテの TAE

村里忠之

ずっと以前、まだ大学生の頃、私は聖書を熱心に読んでいた時期が有った。遠くの島に行く船を待って、夜の桟橋の明かりの下でも読んでいて、そのとき灯台の光が闇を遠くまで照らすのを見て、聖書の言葉がこの世の闇を照らす光のように思われたのを覚えている。それからも迷い、苦しんだりもしたが、結局私は入信はしなかった。年を取った今、私にはその理由が分かる気がしている。当時の自分の悩みは、個人的な問題に尽きるものではなかったのだ。当たり前のことだが、あまりはっきりとではなく、入信が当時のそして今の自分の悩みを解消してくれるものではないことを、自分のからだは知っていたのだと、思う。それでも聖書の詩句は、ルオーの絵が示すような、これは真理の言葉であると身体の奥のどこか深いところから湧いてくるような、そのような響きを感じさせてくれた。私は幾分宗教的な人間だったのだと思う。

その頃から現在まで、ヨハネ伝の「初めにことばありき」という詩句の「ことば」（英訳は word、ルターによる独訳では Wort、ラテン語では Werbum、元のギリシャ語では logos である）がどういう意味だかわからなかった。最近、禅の老師、藤田氏から、彼がある神父さんから「初めに御手ありき」だったらしいと聴いたと教えて貰った。「ロゴス」は神の「ことば」に通じるのだろう。しかし、要するにこの「ことば」あるいは「ロゴス」は意味がはっきりしないのである。ゲーテが『ファウスト』の中でヨハネ伝の冒頭のこの箇所に拘るファウスト博士に言葉探しのワークをさせている。

（ファウストは、「言葉」と訳されたこの「ロゴス」を、「言葉」を空欄にして、そこに「意味」、次に「力」と入れ替えてみて、最後に言う）

霊（Geist）の助けだ！不意に思いついたぞ。
安心してこう書ける：初めに行為（Tat）ありき！

これはゲーテの TAE である。ゲーテが自分に納得できないこの「ロゴス」のラテン語訳以来の「ことば」を空欄にして、そこに自身のエッジ＝身体知（フェルトセンス）から意味 Sinn でも力 Kraft でもない（それらは自分のフェルトセンスとぴったりしない照合しない）、最後にやっと行為 Tat で安堵する。ゲーテがファウスト博士にやらせたこの作業は紛れもなく TAE である。

思えばハイデガーも、彼の著名な、日本語で 5 つつも邦訳が出ている『存在と時間』の基礎概念である現存在 Dasein という用語をずっといわば空欄にして出版の際に決めたという話である。ハイデガーも TAE をやっていたのだ。ウィトゲンシュタインの「言語ゲーム」だってそうだろう。彼らは皆自身の身体知（ゲーテは「霊の力」と言っているが）から彼らの状況にふさわしい言葉を紡ぎ出していた。ジェンドリンは良くなるクライエントの行動特性に TAE を見いだした。彼はもちろんアーティストやアスリートがそれを実践している

ことを知っていた。

かつて西洋では神がロゴスと、そして言葉と重ね合わされる事態が起こった。その究極が科学であり、科学は無神論であるときにもっとも自由になるという逆説を歴史が示し、その事態を予言者のような哲学者ニーチェが「神は死んだ」と言ったのである。それでも人々はロゴスに拘り、それから一と四半世紀が経つ。神なき時代の導き手として私たちは自分の身体知に頼らなければならないようである。TAE にはそのような可能性がある。幸いそこには人間の疎外がない。

【特別寄稿】

TAE と俳諧

末武康弘

最近、諸富祥彦氏のもとで研究を続けてきた山下佳久氏が執筆した博士学位請求論文（山下、2025）を読む機会があった。そこには、山下氏が自ら改変・作成した簡略版 TAE を、友田不二男氏による掌風俳諧（藤野、2009）のようにグループワークとして活用できないかというアイデアが書かれていた（山下、同上、第Ⅴ部 総括、135-6 頁）。

山下氏による簡略版 TAE（自己探索用・キャリア用）の中身や、それをどのようにグループワークの中で活用するかについては、ご本人の解説にまさるものはないだろうから、ここでは触れない。連句あるいは連詩のような形で TAE を用いる可能性はいろいろと考えられるし、おそらく山下氏の中ではユニークなワークが構想されているのではないかとも推察する。

ただ、私は私で（ささやかではあるが）、TAE にも掌風俳諧にもそれなりの学びや思い入れがある。そこでここでは、山下氏の博論に触発されて私の中でおぼろげながら見えてきた、TAE と俳諧の異同や交差の可能性について書きとめておきたい。

（発句）　終着の駅に来たりて春の風　　春風

（脇）　　椶(たら)の芽採(と)らん陽(ひ)の落ちぬ間に　　掌風

これは、1979（昭和 54）年の春に亀山山荘（千葉県君津市）で開催されたワークショップ「芭蕉の俳諧（連句）とカウンセリング」（財団法人日本カウンセリング・センター主催）に参加したときに私が詠んだ発句と、世話人だった友田不二男氏が付けた脇句である。この発句は、20 歳になるかならないかの私が何もわからぬ中で詠んだもので、初案は「終着の駅に来たりて我が春始まる」だった。それが友田氏によって「“我”が出過ぎるのはよろしくないので」と「春の風」に添削された。いま思い返すと、TAE のパートⅠでキーワードを括弧に入れる作業を彷彿とさせる。（なお、私はこのときのエピソードにちなんで、それ以降、句を詠む際に自らを「春風」と称している。一方の友田氏の俳号は当時から「掌風」であった。掌風俳諧とは、松尾芭蕉の蕉風俳諧を受け継ぎ、そこに現代のカウンセリングの精神を加味した友田不二男流の俳風のことである。）

TAE と俳諧には、古今の時や洋の東西を超えた類似点をいくつも指摘することができる。例えば、句の付け合いによる新たな意味の創造は、TAE のパートⅡにおける交差に近いものだと言えよう。「春の風」の中、友田氏に導かれて山径（すなわち、カウンセリングの道）に入った私は、今も「椶の芽」を探し続けているのかもしれない。

また芭蕉は蕉風俳諧の付け合いの妙を、貞門俳諧の「物付け」（言葉の掛け合い）や談林俳諧の「心付け」（意味の展開による付け合い）に対して、「匂付け」（余韻、余情を汲んだ付け合い）と呼んだ。この「匂い」とは、まさしくフェルトセンスのことである（ジェンドリンにそのことを確かめてみたかったが、残念ながらその機会はなかった）。そして芭蕉は

こうした匂い（フェルトセンス）を頼みとした句作を極めることによって、その名句や俳諧集は、ジェンドリンが『プロセスモデル』（Gendlin, 2018）で言うところの「モナド」となって現代にも生き続けている。

ただし、わが身に引きつけて考えてみるとき、そう簡単にモナドと言えるような崇高な何かをつくり出すことができるわけではない。句作もそうであるし、TAE においても同様であろう。

句調（ととの）はずんば舌頭に千転せよ（『去来抄』）

ことに我欲が先行しているときには、よい作品も成果も生まれない。頼みにできるのは「我」ならぬ「吾」――自然と一体であり、自然の一部である自分――であり、取り組まなくてはならないのは推敲に推敲を重ね、行いに行いを積むこと（修行）である。だが果たして、千回の推敲の後に句は立派にととのうのだろうか？ それすら誰にもわからない。私たちにできるのは、ただ自ら（すなわち「吾」）が頼みとする道をひたすら歩み続けることである。

また、芭蕉は次のようにも言っている。

文台引下ろせば則（すなはち）反古也（『三冊子』）

つまり、精魂こめてつくりあげた歌仙も、句々が書かれた懐紙を文台から下ろした瞬間にその命を失ってしまうのだ、と。芭蕉の名句や俳諧集がモナドとして生き続けていると言ったが、それらが作品としてまとめられたのは芭蕉没後のことであり、芭蕉自身はそうしたことに執着してはいなかった。ジェンドリンも『プロセスモデル』の中で、さまざまに生み出される概念や成果はとても貴重であるが、それ以上にそうした概念や成果を生み出す方法やプロセスのほうがさらに重要であると述べている（Gendlin, 2018、Ⅷ章）。

芭蕉が残した作品は言うまでもなく貴重なものであるが、俳諧という方法やそこで体験されるプロセスは、そこから新たな何かが生まれる可能性を常に提供し続けてくれるという意味で、作品以上に重要なものであると言えよう。（余談だが、初期仏教では儀式や祭礼の際に描かれた曼荼羅は、儀式等が終わった後には消されていたそうだ。吾にしたがい、行を積み重ねていれば、幾度も曼荼羅は描かれるということをいにしえの人たちは知っていたのだ。昨今有り難がられている「もったいない」の精神も、「我」が絡むとよいことばかりでは済まないのかもしれない。）

TAE も然り。TAE によって生成される概念や理論はとても貴重なものである。しかしそれ以上に、TAE という方法や、それを用いる中で体験されるプロセスは、他に替えがたい価値を有している。

2011 年に第 2 回 FOT（focusing-oriented therapy）ワールドカンファレンスに日本から参加した私たちが、ニューヨーク郊外のジェンドリンご夫妻のお宅に伺ったときのことである。ある人からの「日本の仲間たちへ伝えたいことは？」という問いかけに、メアリー・ヘンドリクスがひと言「TAE リテラシー」と応え、ジェンドリンは静かにうなずいていた。まさにこの「TAE リテラシー」こそ、私たちが大切にし続け、残していかなくてはいけない TAE の神髄であると言えるだろう。では、どのようにして？

元禄期の俳書『花見車』には、「・・・武州深川松尾桃青出(いで)て、意味深長なる事をのべてうるわしくなしたるより・・・今は誰(た)が家の風俗ともなく、云々」とある。芭蕉没後、俳諧にいそしむ人たちの間では、どの流派のものかは知らぬまま蕉風の付け合いが広まっていったということらしい。いわゆる本物はこのようにして世に残るということを示すエピソードである。

TAE が、俳諧と同様に日本の文化の中で、そして俳諧を超えて世界各地で広く深く用いられることを願っている。

参考文献

藤野和子（2009）．掌風俳諧と私　友田不二男研究―日本人の日本人による日本人のためのカウンセリング―．財団法人日本カウンセリング・センター　所収

Gendlin, E. T. (2018). *A process model.* Northwestern University Press.（ユージン・T・ジェンドリン（著），村里忠之・末武康弘・得丸智子（訳）（2023）.『プロセスモデル―暗在性の哲学―』みすず書房.）

山下佳久（2025）．簡略式 TAE の開発に関する研究―自己探索及びキャリア選択の支援法として―．明治大学大学院文学研究科 博士学位請求論文

【特別寄稿】

「ちょっとした工夫」で TAE を楽しもう―遊び心で「インタラクティブ TAE ショートバージョン」をやってみた！―

諸富祥彦

TAE をどう説明すればいいでしょう。

もともと、ジェンドリンが理論構築法の授業でおこなっていたのがスタートですし、たくさんのステップがあるので、TAE は難しいという印象を抱かれがちです。

たくさんのステップを見ていると、やはり TAE は理論を構築するための方法なのだなとそう思われる方も少なくないでしょう。

けれど「もっと気軽に TAE もどきをしてみよう」というのが、私の提案です。

「TAE をしよう」などというと、「私のこれ、ほんとうに TAE になってるかな」「TAE になってないんじゃないかな」などと考えてしまいがちです。

けれど「ほんとうは TAE になっていなくてもいい」のではないでしょうか。

TAE になっていなくても、誰にも、迷惑はかかりません。

TAE を「まだ言葉になっていない漠然としたものから自分の言葉や考えを見つけていく方法」くらいに広くとらえて、「TAE もどき」でいいからしてみよう！くらいの姿勢でいろいろと工夫をしてみると、いろんな可能性が見えてきます。

そんな姿勢で、私も、自分の講座の「ほんの一部」の時間を使って、「インタラクティブ TAE 超ショートバージョン」というのをつくってみました。

私は以前から、インタラクティブ・フォーカシングをやってきました。

気づきと学びの心理学研究会アウェアネス（morotomi.net/）という研究会で、毎年秋に 1 回「フォーカシング・アドバンスコース」という名前で、インタラクティヴ・フォーカシングをおこなってきました。毎年 70 人くらいが参加し、もう 20 年以上続けていますから、延べ 1400 人、おそらく日本でもっとも多くの方が参加してきたインタラクティヴ・フォーカシングのワークショップです。

そのなかでインタラクティヴ・フォーカシングの「二重の共感の時」を、（ふつうはイメージが中心になりがちなのを）あえて「言葉限定」にし、それを「TAE もどき」のやり方でおこなってみたらどうだろう？　カウンセラーの力量向上にすごく役にたつんじゃないか、そんなアイディアが生まれてきました。

やりたくなったら「まずやってみる」のが、私の流儀。そんなわけで、下記のような要領で「インタラクティブ TAE 超ショートバージョン」を 40 人くらいでやってみました。

●インタラクティブ TAE　（超簡易版）　一人約 15 分　4 人で 60 分

① 4 人一組でおこないます。まず 1 番が話し手、2 番が聴き手、3 番と 4 番は二重の共感の時に入ってきます

② 2番が質問し、1番が答えます

「あなたの人生で、あぁ、これは自分の人生らしいなぁ、自分の人生の本質を象徴する出来事だなぁ、と思う出来事を　1つか2つか簡単に語ってください」（5分で話す）

諸富の例　　1）人生の目的を求めて苦しむ　大学3年の時　死のうとした「いのちが私している」覚醒体験
2）失恋　死ぬ寸前までいった

③ 2番が質問し、1番が答えます

「目をつぶって、その出来事を思い浮かべてください
そのいくつかの出来事に共通するパターンを一つの『文』で表現してください」(3分)

諸富の例　「とことん求めて求めて求めて、求まらず、追い込まれる。
窮地に追い込まれ、諦め、手放した時、何か、がやってくる」

④ 2番、3番目、4番の3人は目をつぶる

1番の人が表現した「人生の本質」「在りようのエッセンス」をぴたっと表す「文」もしくは「言葉」を見つける。可能ならば書く（2分）

⑤ 3人の人が1番の人に伝える。1番の方は感じたこと、フェルトセンスが動いた言葉なのについて、簡単にフィードバックする（1・5分×3＝4・5分）

やってみたら、なかなかに面白かったのです。
一人の方の体験のエッセンスを捕まえて、短時間で「文」にするのは、けっこうハイレベルな作業です。もう少し時間をかけてやったらよさそうですが、けっこう難しいからこそ、やっているうちに、カウンセラー、聞き手としての言語化の力量が相当にアップするのではないか、と思いました。
　みなさんも、試しにやってみてください。

【実践研究論文】

TAEによる「ある日本語教師の仕事への向き合い方」分析
―シナリオを書く留学生と指導する脚本家との伴走体験をもとに―

守内映子

要旨

本研究は、ある日本語教師が、芸術系大学において体験した 4 年間の仕事を振り返り、TAE（Thinking At the Edge）を用いて分析したものである。具体的には、留学生が外国語である日本語で長編シナリオを書くことをサポートしたこと、また、それを指導したプロの脚本家との異業種連携における体験エピソードを実例として記述し資料とした。TAE の持つ内省手順に従った結果、「何かと戦っていたい」自分に気づき、仕事を取り巻くさまざまなものと戦ってきたことが判明した。そして、日本語教師が抱えていた葛藤や苦悩は、留学生と脚本家のものでもあったことが浮かび上がった。TAE のステップに沿って分析したことで、フェルトセンスと言葉の往還を繰り返し、過去の体験が現在までつながり、過去が現在となっている実感が得られた。本稿は、教師の自己省察的な研究実践例となった。

キーワード

日本語教師、シナリオサポート、脚本家、闘い、内省

1．はじめに（研究背景）

研究対象者である研究者[1]が勤務するのは、日本国内の私立大学である。そこは、映画作りを学ぶ四年制の単科大学であり、映画は国家や民族を超えて対等に理解し合えるグローバルなメディアである（佐藤、1989）という理念に基づく教育実践がなされ、多くの留学生[2]を受け入れてきた。初年次では、一般教養科目の履修とともに、演習型の実習を体験しながら、いくつかの作品づくりをチームで行うことで、映画づくりの全体像を体系的に学ぶ。そのための必修科目の一つとして設けられた「長編シナリオ演習Ⅰ、Ⅱ」では、全員がシナリオを執筆しなければならない。また、二年次から文章系に進み、三年次で「脚本コース」で学んだ学生は、最終学年で卒業制作としての「シナリオ集」を出版するところに漕ぎ着かなければならない。脚本コースを卒業した留学生は、日本国内での新人シナリオコンクール[3]で優秀賞を受賞した者も数名存在しているレベルである。研究対象者は、2018 年度から留学生の言語や脚本指導の講師とのコミュニケーションをサポートする立場から、大学 1 年と 2 年生の「長編シナリオ演習Ⅰ、Ⅱ」及び、4 年生脚本コースでの卒業制作「シナリオ」のゼミ指導に参加し、その支援に関わってきた。

当該大学において、シナリオ創作を指導するのは、現役でプロの脚本家（映画監督である人もいる）であり、年代は 40 代から 70 代にわたる。指導方法は、各指導講師に一任されており、クラス全体講義と個別指導を織り交ぜながら、それぞれの持ち味や強みを生かしたやり方で、講師 1 名が 1 つの少人数グループを担当する。グループでは、日本語母語話者と

留学生である日本語学習者とが共に創作活動を行う。評価については、大学側から提示された統一の基準が設けられ、それに従うことになっている。そこでは、日本語能力試験では高いレベルに到達していない留学生が、シナリオ創作を経て、クラスの優秀作品に選ばれたり、短編映画のシナリオとして抜擢され、それが学内で映像化されたりしてきた。それには、モノづくりを教える指導者たちと学習者たちとが、時間をかけた粘り強い対話活動を繰り返すことが必要となる。その指導に立ち合っていると、思いがけない場面に遭遇する。守内（2022）は、エクソフォニー[4]（Exophony、多和田、2003）の観点から、留学生が外国語である日本語でシナリオを書くということについて考察した。そして、2020 年度に入学した留学生の中から 24 名の長編シナリオを対象とした調査と分析をし、その学年の優秀賞を受賞した留学生 1 名にインタビューを行った。その結果、言語と物語の世界を交差させながら、日本語の外に出て母語の世界で思考しつつ、母語の外に出て日本語の世界でストーリーを編み上げることによって、一本のシナリオ作品を書き上げる上での、さまざまな困難点や日本語教育における課題を明らかにした。また、創作のためには、学習者の日本語力の向上という問題を抜きにはできないが、映像表現の設計図であるシナリオ[5]というものは、イメージや言葉の力だけが問題ではないことも報告している。

以上の教育現場においては、研究対象者は日本語教師でもあり大学教員でもあるため、さまざまな授業や大学業務をこなしながら、プロの脚本家や映画監督といった異業種の者が同僚として働く環境にある。そこでは、一般的な学校で当たり前とされる常識や通念とは異なる意識を持った者同士が協力しながら学生の指導に携わっていかなければならない。例えば、学生は指導講師を「〇〇先生」とは呼ばず、「〇〇さん」と呼ぶなどである。これは、教える側と教えられる側という考え方ではなく、一つの作品を一緒につくる仲間であるという映画業界の慣例によるところが大きい。さらに、創作という側面を考えると、異なる教育観や価値観、人生観を持ったプロ同士が、学生に一つの作品を完成させるという同じ目標に向かって仕事をこなしていくという特殊な職場環境であるといえる。

２．研究動機と研究目的

本研究の対象となるシナリオ創作の教育現場は、日本語が母語ではない留学生にとって、物語の創作と言葉の創作とを往還しながら新たな言語文化が生み出される場所である。そして、基本的な前提として、書きたいことを内に持てるかどうかを考える必要がある。創作活動においては、学習者である執筆者の内に「書きたいこと」を持たせる教師の問いかけと、指導者が学生との対話を通して、彼等の関心を汲み取る姿勢が重要となる。留学生の日本語による文章表現指導を考える場合、母語ではないことの不利を乗り越えるためには「正しい日本語」を目指すという方向性が根底には存在する。なぜなら、言語というものは、定められたルールに則って使われるからこそ正確に伝わるものであるからだ。しかし、個人の文体（個性）や芸術性などは、多少の逸脱や振れ幅があるところから生まれたりもする（永澤 2019）。確かに、留学生のシナリオサポートに携わっていると、学習者の日本語能力と、彼等が書いた執筆作品の内容的なおもしろさや読む者を引き付ける力とは、必ずしも一致していないというのが実感である（守内、2022）。そのような状況における日本語教師の役割や支援とはどんな意味を持つのであろうか。留学生が表現したい世界を描くのを助けるた

めには、プロの脚本家とどのように向き合い、信頼関係を築いていけばよいのだろうか。

本稿は、ある日本語教師が、芸術系大学において、留学生が日本語で脚本を書く作業と、それを指導するプロの脚本家に伴走した体験をもとに、どのように対峙しているのか、どのような信念を持っているのかについて、自身の仕事に対する向き合い方を探求することを目的とする。

３．方法

研究対象者（研究者 1）の、2018 年度から 2021 年度における留学生の脚本執筆に関わる授業のサポート体験エピソードを実例として収集し、質的研究法 TAE（Thinking At the Edge）を用いて分析する。体験エピソードの時期を 2018 年度から 2021 年度に限定したのは、この期間の仕事の中心軸が留学生教育にあったからだ。2022 年度以降については、留学生教育が中心にありながらも、日本語母語話を含む大学初年次教育を含む業務に移行し、仕事のフェーズが大きく変化している。

3.1 研究対象者について

研究対象者は、20 年以上にわたり日本語教師として働いてきた。大学時代に、小・中・高・養護学校の教員免許を取得し、大学附属中学校での教師経験や私塾を主宰していたこともあり、教育系の実践経験を蓄積している。日本語教育に関しては、日本語教師養成講座 420 時間取得修了後に都内の日本語学校や専門学校に勤務しつつ、日本語教育能力検定試験に合格、大学院で日本語・日本語教育を専攻し日本語学の修士号を取得した。この間は、留学生の日本語教育が中心であった。その後、中国・上海にある国立大学の外国語学部日本語学科において、外国籍教員として 2 年間日本語教育に従事した。中国滞在中及び帰国後も、在籍していた大学の中国人大学教員たちと協働で日本語教育教師用ガイドブックや聴解用教材、中日通訳試験問題集を作成している。2017 年夏に帰国後は、国内の私立大学で留学生の日本語教育に携わってきた。

一方、私生活においては、結婚後に義母が亡くなったのを機に義父と同居し、三人の娘を育ててきた。夫は海外出張が多い猛烈ビジネスマンで、いわゆる団塊の世代直後に生まれた年代であり、「ある日本語教師」とは一世代の年齢差があった。夫は激務をこなすためには、仕事に集中する必要があり、妻には家庭を守ってほしいと強く願っていた。そのため、日本語教師としての出発は、子育てがある程度落ち着いてからであった。中国の大学で教える機会を得たのは、義父を 91 歳で見送った 2 年後、夫が定年退職した時期であり、家族の理解と協力が得られるタイミングであった。

3.2 研究データについて

研究対象者の体験エピソードを研究データとして収集した。その体験時期は、2018 年度から 2021 年度である。体験の場所は、芸術系大学の必修科目である脚本の授業と脚本ゼミの授業が行われている教室と日本語支援をするサポート教室、さらに、コロナ禍におけるオンラインでの授業空間も含むものとする。加えて、その業務に関わるメールのやり取りや講師室での打合せや会議も含む。そこで印象に残り忘れられないエピソードを抽出した。ここで取り上げた出来事は、留学生

については中でも関わりが強かった数人であり、脚本家については濃い関係にあった指導講師との仕事を中心として実例とした。

3.3 分析方法について

分析にあたっては、得丸（2010）に従った。ウェブ公開されているTAEリフレクション（得丸、2016）のシートを用いて、パートⅠからパートⅢまでの手順に沿って進めた。「TAEシート」に書き込むことで、分析過程を報告する際に読者にもその過程が可視化され辿ることが可能となる。本研究では、研究者1がTAEシートに書き込む方法で、研究対象者の仕事での体験エピソードをもとに内省的に仕事への向き合い方の分析を試みる。その過程においては、TAE熟達者であるガイドの助けを借りながら進めた。具体的には、TAE研究会主催のTAEパーソナル講座を受講し、2022年5月から2024年12月にわたって考察し分析を進めている。

4．分析過程

4.1 パートⅠ

研究対象者（研究者1）は、2018年4月から2022年3月までの仕事を振り返り、特に、留学生が日本語で長編のシナリオを執筆するという授業における、留学生の日本語サポート及びそれを指導する脚本家との協働作業に関わる仕事を通した体験エピソードを思い起こした。そこには、日本語教師としての支援はどこまで必要なのかという「とまどい」、留学生の創作意欲とそれに追い付かない日本語力からくる「苦戦」、そして、脚本家が日本語教師を助手のように捉えると同時に学習者を弟子として見ている業界の「慣習による洗礼」があった。それら創作活動に携わる経験を積み重ねる中で、単なる日本語力では片付けられない「ことばを超える力」が必要な能力ではないかといった発見をする。そこで、体験したさまざまなエピソードを振り返りながら、重要だと想起される場面を「2.実例収集シート」として書き取った。39の実例が記録された。「2.実例収集シート」を書く作業を通したことで、関わった多くの留学生の中でも特定の数名の学生にまつわるエピソードが多いことと、脚本家に関しては限られた指導講師とのエピソードに集中しているという気づきが得られた。それは、研究対象者の中に残っていた痕跡に照らし合わせていく作業によって、すでに感じていた何かを語りながら形を成していくようであった。それらを見返し、4年間のサポート実践全体の意味感覚（フェルトセンス）を感じた。その後、「3.把握シート」「4.深化シート」「5.再把握シート」と進めた。そして、この時点でのマイセンテンスは、「この感じは『流儀を分かち合う己の性』という感じである」とまとめた。なお、本稿では「1.浮上シート」は使わず、「3.把握シート」において、フェルトセンスを捉えながら、言葉を浮かび上がらせるように進めた。

「3.把握シート」「4.深化シート」は、それぞれ稿末資料として収録する。なお、「2.実例収集シート」（表1）は紙幅の都合からその一部を、また「5.再把握シート」（表2）は全体を、それぞれ本文に掲載する。ここまでは、TAEステップ1～6にあたるパートⅠ（得丸、2010）となる。この時点での感想としては、経験を振り返りながらさまざまなエピソードが掘り起こされ、それに伴うフェルトセンスを捉えた実感が得られた。そして、思いがけな

いことばや表現になりながらも、言い得て妙であるというマイセンテンスを得ることができたことに、改めて驚いたのである。これらの感想は、TAE パーソナル講座において、研究者 1 が熟達者のガイドを受けながら語った内容であることを書き添える。

表 1
2.実例収集シート

本物の脚本家がそこにいる。今までの人生で会ったことのない種類の方々だ。 No.1	何度言えばわかるんだと、同じ誤用の繰り返しにうんざりするが、根気強く直し続ける。 No.26
シナリオの作法を学んでみるが、内容としてえていなかったダメ出しをくらう。 No.5	I 先生から機械翻訳の日本語を読まされると、脳みそが破壊されると訴えられる。 No.27
夢を折りたたむとか、ゾンビや特撮 SF とか、リアルではない世界観に翻弄される。 No.11	どこまで修正すればいいのか、どこまでが私の仕事なのか、でも放っておけない自分がいる。No.29
中国が舞台の場合は独特の価値観や文化事情を どう扱うべきなのか? No.13	A 先生の留学生にも厳密な日本語チェックにそこまで修正するべきかと疑問を抱くが対応せざるを得ない。 No.33
性的描写に戸惑わない自分がいる時、ある程度の歳と人生を重ねていて良かったと思う。 No.14	気づき添削で自律学習に繋げることは可能なのか。 No.32
私はあなたの助手ではないのですが、と K 先生 のメール文に内心思う。 No.22	自分の中には、留学生からの感謝の言葉や敬意を持った態度を期待する気持ちが渦巻いている。 No.36
まさか、そこまで厳密に日本語をチェックしろと言うのかとの声が脳裏をよぎる。 No.25	脚本家の個人による指導の違いが大き過ぎて、どうなんだろうと感じてはいる。 No.39

表 2
5.再把握シート

①「4. 深化シート」のマイセンテンスを書き写し、テーマとしているデータ理解のフェルトセンスを感じ直す。 マイセンテンス この感じは、【 **流儀を分かち合う己の性という** 】感じである。
②マイセンテンスで把握した意味感覚を、この段階で可能な範囲で、わかりやすく説明する。 流儀とは、脚本家の先生方がシナリオを教える上での流儀のことで、それぞれのプライドや人間性が見え隠れする物書きとしての姿勢のようなものともいえるかもしれない。一方で、私には、日本語教師としての流儀もある。それぞれの流儀は、今までに出会ったことのないも

の同士の新鮮さと刺激に満ちていると同時に、お互いの中に警戒心も生む。特に、プロの脚本家にとっては、自分の領域を侵されたくないというデリケートさが存在していた。また、日本語教師とは何者であるのかという疑心暗鬼もあったのだろう。しかし、目の前の留学生を相手にしているうちに、どこまでを教え、どのように接すればいいのかといった試行錯誤が行われるうちに、脚本家それぞれが、十人十様の着地点を定めるようになっていく。だが、中には、どうしても譲れないレベルの設定が現実とかけ離れていたり、逆に諦念観を受け入れたりする指導講師も現れる。そんな時には、私自身はどこまで関わり、どこまで助ければいいのかが不透明になると同時に、自分の立ち位置が見えなくなってしまう。それでも、日本語教師として見逃せないまちがいに拘りながら、留学生の書くシナリオと向き合うことを繰り返す時、何度も同じことを繰り返しつつも諦められない自分がいて、できる限りのサポートをし続けるのである。

③重要だと感じられる部分に下線を引く。

4.2 パートⅡ

ここからは、TAE ステップの次の段階に進む。「2.実例収集シート」を実例ごとに切り離し、39 枚の実例カードを得た。実例カードに記載された内容を見返しながら、それらの類似性の観点からグループに分けていき、「6.パターン抽出シート」（稿末に例示する）に分類した。各グループ内の類似性を実例から感じる意味感覚で掴んだパターン感覚でまとめたところ、4 つのパターンが見出された。「7.パターン一覧シート」を表 3 に掲載する。なお、体験エピソードから作成した実例カードの数を実例数としている。

表 3
7.パターン一覧シート

No.	パターン文	実例数
1	とまどい悩むが、定めて進むしかない。	5
2	疑問や不満を抱え込んで、大人の振る舞いをしている。	16
3	新しい世界に触れながら、発見が形になっていく。	14
4	ビリーフが揺らぎ、我意との戦いがある。	11

続いて、「8.交差シート」の「方法 2」を用い、パターン文を前半部と後半部に分割した方法で交差をおこなった。手順は次の通りである。まず、パターン文を意味の切れ目で前半部と後半部に分ける。パターン 1 であれば、前半を「とまどい悩むが」とし、後半を「定めて進むしかない」とする。パターン 2 は、前半「疑問や不満を抱え込んで」、後半「大人の振る舞いをしている」とする。これを全てのパターンでおこなう。次に、それぞれのパターン

の前半部と後半部を機械的につなげて新しいパターン文とする。例えば、パターン 1 の前半部とパターン 2 の後半部をつなぐと、「とまどい悩むが、大人の振る舞いをしている」という新しいパターン（交差パターンと呼ぶ）が作成される。このように、全てのパターン文の前半部と後半部を総当たりでつなぐ作業をする。さらに、それらが、文として通じるかどうかを確認し必要に応じて、助詞や語を付け足し調整する。最後に、機械的に組み合わせた交差パターン文をフェルトセンスに照らし合わせながら感じたことや気づいたことを書き留め、「ぴったりしているか」「うまく言えているか」を判定しながら「◎」「○」「△」などの印を残していった。以上の作業はエクセルファイル上でおこなった。4 パターンをそれぞれ総当たりで組み合わせるため、12 回の交差をおこなったこととなる。

以上の作業を通して、機会的に組み合わせた文（交差パターン）を眺めながら、日本語として通じるかという言語操作をおこなうと同時に、その文がフェルトセンスの言いたいことを表現するのに適当であるかどうかの吟味を繰り返した。これは、テーマである「仕事への向き合い方」を内省していたといえる。例えば、パターン 3 の前半部分「新しい世界に触れながら」とパターン 4 の後半部分「我意との戦いがある」の組み合わせの場合を見てみる。機会的なパターン文は、「新しい世界に触れながら我意との戦いがある」となったが、上手く表現できていない違和感があった。そこで、「新しい世界」とは、この場合何を意味しているか、「我意との戦い」とは一体どういうことを言いたいのだろうかと探索していった。すると、「新しい世界とは、日本語教師として携わってきた仕事では知らなかった世界」のことを指し、「それは純粋な好奇心として感じられる」のである。だが、「仕事をする以上は、純粋な好奇心だけでは片付かないものがあった」それは、「まるで善と悪の感情が交差する場所でもあったのだ」という気づきが得られたのである。そこで、新パターンは、「純粋な好奇心の一方で善と悪の感情が交差する」とした。このようにパートⅡステップ 8 で行う交差は、TAE ステップの特徴的な手順のひとつであり、機械的につくる文を作るため、分析者が一人でおこなう作業でありながら、分析者自身が気づいていなかった意味が浮上してくる（得丸、2020）といえる。ここでステップ 8 の交差を終えて生まれた新パターンをまとめ、表 4 に掲載する。交差によって、体験エピソードを今一度振り返りながらフェルトセンスに問い合わせつつ「新パターン」に整えていった。このプロセスは、「8.交差シート」によって確認することができる。「8.交差シート」は、稿末資料として掲載する。

表 4
新パターンまとめ

戸惑い悩むが 大人の振る舞いをしている。	なるほど、そうかと発見して 新しい形の作品が生まれる。	意味や価値に悩むのは 我意なのかと葛藤する。
あれやこれや感情が渦巻くが 気にしていたら進めない。	疑問や不満を飲み込んでも 発見があるから形になる。	疑問や不満の噴出が 我意を認識させる。
芸術家の世界観に触れながら 立ち位置を定めて進む。	芸術家の書く世界に触れて 求められることに応える。	純粋な好奇心の一方で 善と悪の感情が交差する。
信念が揺れながら 譲り決めて進むしかない。	互いの信念の塩梅を図り それぞれの境界線を守る。	ビリーフが揺れなら変容し 発見したことが形をつくる。

4.3 パートⅢ

このパートは、TAE ステップの「理論構築」のパートであり、ここまでの作業を理論的に概念化してまとめるものである。その「概念」を得るために、改めて、「5.再把握シート」「7.パターン一覧シート」「8.交差シート」を見返し全体を感じ直した。そして、そこで浮かび上がってくることばや表現を「9.用語選定シート」を用いて書き出した。その際には、意味が近いと感じることばは近くに配置するようにした。続いて、配置されたことばの中から、シート上の離れた位置にあるものの中から、概念の候補となる語を 3 つ選んだ。「仕事の流儀」「感情の封じ込め」「世界観のズレ」を選定した。これら 3 語を「A : 仕事の流儀」「B : 感情の封じ込め」「C : 世界観のズレ」とし、「10.用語関連シート」を用いて 2 語ずつの組み合わせを機械的におこない、意味は考慮せず文法的に正しくなるようにしつつ、形式的に「〇〇は〇〇である」という文を作成した。例えば、AB の組み合わせの場合は、「『仕事の流儀』は『感情の封じ込め』である」となる。同じ方法で、BA、BC、CA、 AC の組み合わせの 6 文をつくった。次に、それらの文をテーマとフェルトセンスに照らし合わせて微修正する。その際は、各文が論理的につながっており、なおかつ、テーマを表現する文になるように進めた。その過程での気づきは「10.用語関連シート」に書き留めていった。さらに、「11.用語探索シート」では、この ABC を用いて「〇〇は〇〇の性質をもつ」の文型に従い、「その性質とは何だろうか」と問いかけながら探求し、2 語間に位置づく新用語を探索した。例えば、AB の場合は、「『仕事の流儀』は『感情の封じ込め』の性質をもつ」となる。日本語教師としては、「ここまでが日本語の問題だという境界線を引いて対処する」という仕事の流儀を守り、それを通していく上で、あらゆる感情を封じ込めて乗り越えることも大事な流儀の要素ともいえそうだ。とメモを書いたところで、『仕事の流儀』と『感情の封じ込め』の双方に関係づく語として、新用語「D : 境界線」を得た。同じ手順を繰り返し、BA、BC、CB、CA、AC を組み合わせて探索した結果、新用語として、「E : やり遂げなければならない」「F : 教えることの意味」「G : 折り合い」「H : 前に進まなければならない」「I : バージョンアップ」が得られた。

さらに、「12.用語組込シート」の「用語リスト」欄に、ここまでの探索で得た用語と新用語をリストアップした。ここまでの過程で見出したことを表現するにはどうだろうかと問いかけ、リスト全体を眺め、表現の中心となりそうだと感じる語を 3 つ選び、それぞれを OPQ とした。「O : 世界観のズレ」「P : 境界線」「Q : バージョンアップ」が概念の要となると判断した。そして、3 用語を相互に組み込む段階に進んだ。まずは、「O : 世界観のズレ」を主語として、述部に「P : 境界線」「Q : バージョンアップ」を含む一文で表現していく。この場合、述部の語は順不同で扱う。次に、主語を P とし述部に OQ を含む一文さらに、主語を Q とし述部に OP を含む一文をつくる。以下に 3 文セットを示す。

O「世界観のズレ」は、私と学生、脚本家の間にあるもので、その存在によって P「境界線」を引きながらも自分が Q「バージョンアップ」される結果をもたらす。
P「境界線」は、お互いの O「世界観のズレ」によって生じるものだが、それがあることによって自分を守っているのかもしれなし、それがあっても Q「バージョンアップ」できることに気づけた。
Q「バージョンアップ」は、O「世界観のズレ」から生まれた P「境界線」を維持しつつ

も、前に進むことによって見える景色が変わった新しいステージのことである。

ここで、OPQ の文セットの組み込みの最終段階で、新しく組み込みたいと気づく語が得られたため、「R：新しいステージ」と置いた。同様に、OPQR 文セットを進める過程で、既に用語リストに選んでいた「E：やり遂げなければならない」が重要であると気づき、新しく組み込む用語として「S：やり遂げなければならない」に格上げした。さら OPQR 文セットと進め、これ以上、追加したい用語はないと判断できたので、「12.用語組込シート」の作業を終了することとした。ここまでのステップにおいて、「O：世界観のズレ」「P：境界線」「Q：バージョンアップ」「R：新しいステージ」「S：やり遂げなければならない」の 5 語を使用した論理的な文セットが得られた。

しかし、これらの作業を終えた段階で TAE パーソナル講座でのガイドを受けたことから、「やり遂げなければならない」とは一体何なのだろうかと問い直す必要があることに気づき、内省を深めた。そして、「やり遂げなければならない」とは、「自分の中にある日本語教師としての強い使命感とプライドではないだろうか」という意味でありそうだと気づき、ここは「使命感いっぱい」という語がぴったりすると考えた。そこで、「13.入替シート」の形式を用いて「S：やり遂げなければならない」の語を「使命感いっぱい」に入れ替えることとした。その後、「14.骨格文・結果文シート」に書き込み、入れ替え後の 5 つの概念により構成された文セット（概念システム）は以下の通りとなりこちらを骨格文とした。ここまでの作業で使用した「9.用語選定シート」「10.用語関連シート」「11.用語探索シート」「12.用語組込シート」は、稿末に掲載する。

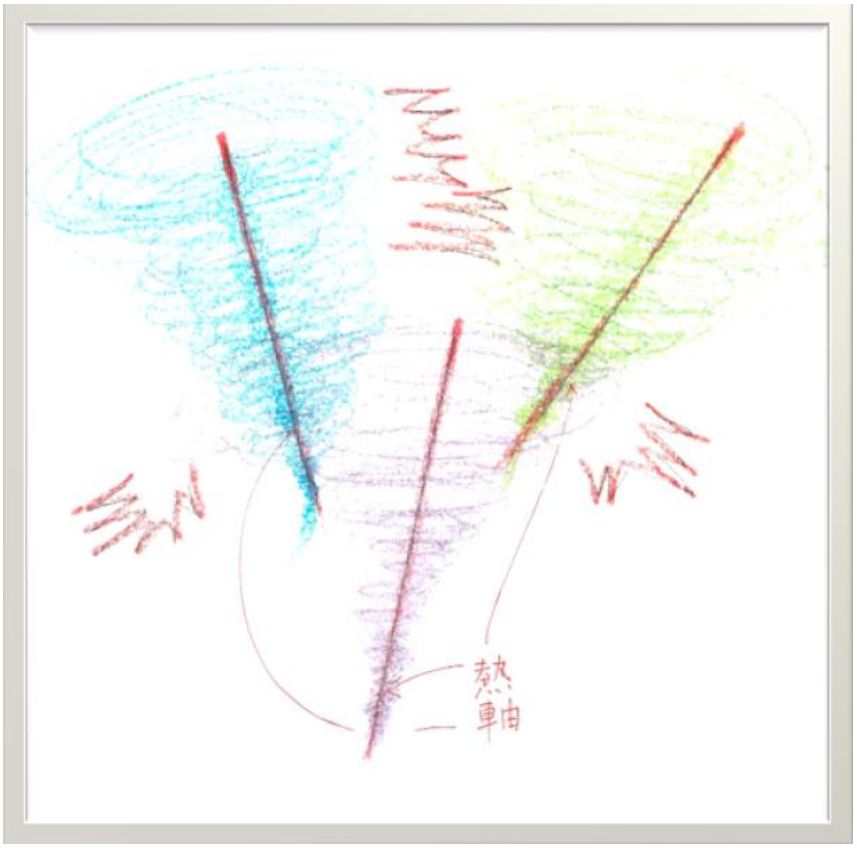
骨格文

S「使命感いっぱい」というのは、日本語教師としての強い使命感でありプライドなのだ。それが時には、留学生や脚本家との間に O「世界観のズレ」を生む。そして、P「境界線」を引くことで自分を守る。しかし、O「世界観のズレ」を認識しながらも、P「境界線」を維持して共に前に進むことによって、それぞれが Q「バージョンアップ」されていく。そうすることで、今までに見たことのない景色が見える日が来て、R「新しいステージ」に立っていることを知ることになるのである。

なお、ここまでで理論の中核を得たことから、「ある日本語教師が留学生の書くシナリオをサポートするために、それを指導する脚本家と仕事をするというのは、何に喩えられるのだろうか」と感じ直してみた。そこで生まれたイメージ絵が図 1 となった。3 つの竜巻のようなエネルギーは、それぞれ、留学生と脚本家、そして、日本語教師の三者を表現している。

図 1

パートⅢ図解



ここまでで得られた骨格文を見直したところ、テーマに応じた具体性も加味されていると考えたことから、これを結果文とした。次に、「結果文」を意味のまとまりにより分割し、3 つの「結果パターン」を得た。さらに、3 つの「結果パターン」がテーマを適切に表現しているかどうかを検証するために、「2.実例シート」に書き出された 39 の体験エピソードを、「結果パターン」に基づいて再分類した。以下に、結果パターン一覧と実例数を示す。なお、「15.結果パターンシート」一覧に実例カードを分類した資料は、稿末に掲載する。

結果パターン一覧

結果パターン 1（実例数 18）

使命感いっぱいというのは、教師としてのプライドなのだ。それが時には、留学生や脚本家との間に世界観のズレを生む。

結果パターン 2（実例数 14）

境界線を引くことで自分を守る。しかし、世界観のズレを認識しながらも、境界線を維持しつつ共に前に進むことによって、それぞれがバージョンアップされていく。

結果パターン 3（実例数 7）

そうすると、今までには見たことのない景色が見える日が来て、新しいステージに立っていることを知ることになるのである。

５．分析結果

TAE パートⅠからパートⅢまでの分析過程を経て得られた結果パターンに基づき、それぞれの結果パターンにおける気づきを分析結果としてまとめる。

まず、結果パターン 1 の結果文については、実例数が最も多い。ここでは、日本語教師としての構えが見えてくる。そして、その教師としての構えがあるからこそ、そこに生まれてくる葛藤や苦悩とも向き合うことになるのである。脚本家と一緒に留学生をサポートし指導するという協働作業をするうえで、納得できない扱いを受ける場面も出てくることもある。それでも、感情を爆発させたり衝突したりすることのないように踏みとどまっている自分を知る。そこには、強い気持ちで立っている自分があり、そのように立っていられるのは、脚本家という創作のプロと対等に対峙しようとする、日本語教師としての使命感があるからなのだ。この場合の使命感とは、大学教員として、留学生が何としてもシナリオを書き上げ、作品として認めてもらえることで、必修科目の単位が取得できるように導かなければならないということでもある。また、そうさせることができるのは、自分しかいないというプライドを持っているからできることでもあるのだといえる。

次に、結果パターン 2 の結果文である。こちらの実例数は 14 であり、結果パターン 2 に次いで多い。ここには、日本語を教えるだけでは知り得なかった、また、今まで生きてきた人生において出会ったことのない仕事（具体的には脚本家や映画監督）を生業としている人と、協力し連携しなければならない仕事をしているからこそ生まれるエピソードが集約されている。それが、吉と出るか凶と出るかは全て自分にかかっている。従属、隷属しないで補完し合う関係性づくりに転換できることが、仕事をするうえでの重要なポイントになるかもしれない、ということに気づくに至る。

最後に、結果パターン 3 の結果文である。こちらは実例数 7 となっており、とても少ない。しかし、脚本家 A 氏からもらった「日本語の直しなのかシナリオの直しなのか分からなくなる時があった。先生との二人三脚の指導、ありがとうございました」という言葉で、全てが報われる自分がおり、ヤラレタと観念するのであったというような印象深いものが含まれている。A 氏との体験エピソードは、脚本コース専攻の 4 年生のゼミ指導に立ち合ったものである。その留学生 R に関しては、日本語サポートに来た回数だけ取り上げても過去に例を見ない学生であった。また、卒業作品として完成させなければならない過程を通して、日本語教師の自分だけが迷い苦悩していたと感じていたことが、実は同じ思いを抱えながら留学生と向き合う同志のような存在であった脚本家 A 氏の存在にも気づかされたといえる。そして、作品を創り上げる、作品が生まれたという現前とした事実が残るのである。

６．結論と考察

6.1 結論

以上の分析結果を踏まえると、ある日本語教師がどのように仕事に向き合っているのかの結論は、次の通りとなる。「いつも、どこかで、何かと戦っていたのだ、ということである。闘う意味は、怒りをバネにしながら自分が自分らしく生きるためなのである。」それでは、「一体、何と戦っていたのか」という観点から考察する。

6.2 考察

初めてシナリオのサポートをした時を思い出す。それは、2018 年 2 月に余命宣告された夫の病床で付き添っていた頃だった。

そもそも、日本語教師として人生の再スタートを切った時から、いろいろなものと戦っていたのだと気づいた。ビジネスマンの夫は「物事は結果が全てで、どんなに頑張っても成果が上げられなければ意味がないのだ。教育者のあなたは、過程が大事だと教えるのだろうが、世の中はそうじゃないんだ。あなたの仕事は極めて生産性が低いよ」と言っていた。その視点はなかったなと驚くと同時に世の中の見え方が違ってきたと記憶している。異なる分野で仕事をするとは、そういうことであり、価値観に隔たりがあって当然なのでもある。

最初のシナリオサポートは、2018 年の 4 月と 5 月が繁忙期だった。その頃、緩和ケア病棟にいる夫の病室から職場に通っていた。正に夫の言葉通り、極めて効率が悪く生産性が低いといえる「外国人留学生が日本語で書いたシナリオをサポートする」自分と向き合っていた。その時の自分は、夫の価値観と日本語教師としての自分の覚悟とを相手に戦っていたのである。特に、その年のシナリオサポートは、留学生の中でも最も日本語に難点を抱える中国人留学生 12 名だけのクラスを担当していたからだ。だが、初めての体験だったからか、全てが新鮮で使命感にも燃えていたので熱量も大きかった。一方で、仕事にのめり込む自分と病棟から職場に向かう私生活とのバランスと戦っていた。

その後、毎年同じ時期がやってきて、2 年生の長編シナリオ演習が始まるたびに、闘う相手は変化していった。例えば、ある時は、脚本家の先生がこちらを助手感覚で捉えていることがあった。「僕は日本語を教えるためにここに来ているのではありません。シナリオしか教えませんよ」というスタンスである。そこでは、脚本家であっても留学生を理解し教えることを納得してもらうための信頼関係を築かなければならなかった。また、ある時は、脚本家の先生と留学生が衝突したこともあった。「僕は脚本家になるために、この大学に来たんじゃありません。映画を勉強するために来たんです」と言われて逆鱗に触れてしまったのである。その仲裁では脚本家をなだめすかし、留学生を諭さねばならなかった。そこでは、この授業そのものの問題点が明らかに自覚されるようになった。この段階では、職場環境や大学組織と戦っていたといえるだろう。

2020 年からは、冬を迎えた頃に 4 年生脚本コース専攻の留学生のシナリオをサポートするようになった。そこでは、シナリオを卒業作品として出版するため、作品として求められる質が高いものだった。脚本家と留学生と、より親密な関係で向き合うことになった。そのために生じる問題や葛藤はより深刻なものになっていった。例えば、日本人男性と結婚した中国人女性の連れ子が性的虐待を受けているというストーリーの中で、同居する母が娘の下着を洗濯するか否かの議論になった。「そんなことはおかしいよ。母娘関係がおかしいんじゃないの」と非難された際、シナリオの一場面を検討しているのに、私的なことを否定されたようで、胸に何かが突き刺さるような感覚を覚えたのだった。生活や習慣、文化的な背景は最早、日本語だけの問題ではなくシナリオの内容に関わる問題なのである。ここでは、日本語の問題なのか、シナリオの問題なのかを巡って戦っていた。

最後に 1 つ付け加える。ここへ来て大きな変化があった。それ以後は、AI のお蔭というべきか、この親密なサポートの必要性が激減した点である。胸に刺さる痛みを経験する必要はなくなったのだが、どこか寂しく物足りないのも確かである。やはり、戦っていないと生

きている気がしないのではないかと、そんな自分を知ることができた。

「戦っていないと生きた気がしない」「苦しい、大変、辛い方がそれを乗り越えた時に喜びが大きく達成感が強い」のである。しかし、どこから見ても「バカだなあ、こんなに一生懸命にやって」と自分に呆れるが、それに支えられてきたから今の自分がここにいることは明らかである。どこかで何かといつも戦っていたいのかもしれない。それが、生きているということであり、自分が自分でいられるということなのである。誰かの役に立つということが生きる意味だと思ってここまで歩んで来たのだということがわかったといえる。

あることが蘇る。それは、2023 年 12 月に行われた身体表現俳優コースの卒業舞台公演『銀河鉄道の夜』である。そこでの主演と助演を務めたのは留学生 T と O であり、入学した時から関わりが多くあった。この公演は、4 年生に日本語母語話者の学生が多数いたにも関わらず、留学生が重要な役に抜擢された珍しいものであった。留学生 O は、最後の場面で「誰かの『幸い』が自分の『幸い』だから」と語った。そのセリフが半地下の小さな舞台上から発せられた瞬間、自分（研究者 1）のフェルトセンスに響き、身体に刻まれた気がした。それは、本研究テーマでの分析が最後のステップに到達していたからだと推察できる。

7．まとめ

ある日本語教師の体験エピソードは、映画を専門に学ぶ教育機関での留学生と脚本家との間に起こったものであった。分析を始める前において、それは、仕事としての体験であり、特定の職業に関わる特殊なものであるという認識があった。なぜなら、それまでの日本語教育では知ることのなかった授業をサポートするという内容であり、異なる専門職の脚本家と信頼関係を築かなければならないという未知の体験であったからだ。しかし、TAE の手順に従って分析を進めた結果、2018 年度から 2021 年度の期間だけに限定されるものではないことが明らかとなった。得られた結論は、「いつも、どこかで戦っている」ということであり、「闘う」自分は過去であり現在でもあるのだ。さらには、恐らく、今後もそういう自分であるのだろうということも示唆されたといえる。「何と闘うのか」「なぜ闘うのか」を探求する過程では、フェルトセンスと言葉を何度も往還したことで、日本語教師になる以前の自分も見つめることができた。シナリオをサポートする場所にいる現在の自分自身が抱えているものは、人生の伴侶との何十年という関係を浮かび上がらせた。過去はすでに過去ではなくなり、現在として生きている。「闘う」というところに集約されたものが向こうからやって来て、自分の中にぴったり収納されたようである。

以上、このようなところまで辿り着けたのは、TAE ステップのおかげである。TAE パーソナル講座を受け続け、ゆっくりじっくりガイドをしてくださった熟達者とそこに集う仲間の存在があってのことである。この場を借りて感謝申し上げたい。

注

1. 日本映画大学映画学部准教授
2. 本稿の研究対象時期における留学生の国籍は、中国、香港、韓国、台湾、モンゴル、マレーシア、タイ、ネパール、インドネシア、アメリカであった。留学生の 9 割が中国籍である。全体に占める外国人留学生の割合は年度により異なる。例年の平均は 3

割以上 4 割未満といったところである。

3. 新人シナリオコンクールとは、一般社団法人シナリオ作家協会などの主催で毎年開かれており、このコンクールでの受賞は脚本家の登竜門でもある。
4. エクソフォニーとは、「母語の外に出る」という意味であり、自分の母語ではない言語を使って作品を創作することを指す。そこでは、二つの異なる言語空間の狭間に置かれることで、「自由な」思考が可能になると言われている。
5. シナリオとは、テレビドラマや映画などの映像になることを想定して書かれるものであり、映像表現の設計図ともいえるものである。シナリオには、登場人物の行動や仕草のみを書き、小説のように心理描写はしない。つまり、目に見えないものは書かないという大原則を持つ。そして、主に、柱と ト書き、セリフから成る。この柱と呼ばれるのは、「場所」と「時間」を明記したもので、ト書きは柱ごとに書き、地の文といわれる。ト書きには、登場人物の動きや周囲の様子を書く（守内、2022）。

参考文献

佐藤忠男（1989）.『映画で世界を愛せるか』岩波書店.

多和田葉子（2003）.『エクソフォニー―母語の外へ出る旅―』岩波書店.

得丸さと子（2010）.『ステップ式質的研究法―TAE の理論と応用―』海鳴社.

得丸智子（2020）．アプリを活用した単語学習を中心とする日本語独習―TAE によるインタビュー分析―.『開智国際大学紀要』*19*, 35–63.

永澤済（2019）．留学生の作文教育(2)―クラスにおける相互の高め合い―.『名古屋大学日本語・日本文化論集』*26*, 57–89

守内映子（2022）．母語の外に出てシナリオを書くということ―留学生の視点から―．多田孝志（監修）『グローバル時代を共に生きる―学校教育を軸とした多様な国際交流―』(pp. 110–125)．三恵社.

資料

3.把握シート

① テーマを書く

留学生が日本語で書くシナリオのサポートをする自分を探る

②「1. 浮上シート」または「2. 実例シート」の全体をながめる。書かれている場面や事柄全体を感じる姿勢で、しばらく感じ続ける。どちらも作成していない場合は、テーマとしているデータ理解を感じ直す。その感覚を、身体の内側で指差すような感覚で「この感じ」と特定する。この感覚を「フェルトセンス（意味感覚）」と呼ぶ。

1. フェルトセンスがどんなことばで表現できるか自問し、浮かんでくることばを、単語や短い句で書き取る。

おもしろい　通じる日本語　悩ましい
新鮮　わかる日本語　困難
知らなかった　正しい　役割分担　ズルい
気づかなかった　正しくない　手を出さない　自分でやって
初体験　未知　下請け工場　仕方ない
摩訶不思議　わからない　助手か　身につまされる

流儀　意思疎通　すみ分け　耳が痛い
仁義　日本人ならでは　当たり前　疑問
習性　プロならでは　根気　交わりづらさ
ビリーフ　紙の束　忍耐　関わりづらさ
信念　紙の山　下積み　戸惑い
哲学　修行　苦渋
蓄積　正解　脳みそ破壊
世界観　誤用　いい加減　イライラ
融和　バランス　ドロドロ
分かち合う　ズレ　意味不明
理解不可能　、、、、、、、、

④ある程度書いたら、最後に「、、、」をつけて終了する。重要だと感じられる2、3の語句に下線を引く。

⑤下線を引いた語句の一部または全部を使い、フェルトセンスを表現する。下の【　】に書き入れる。この文を仮マイセンテンスと呼ぶ。フェルトセンスをいくらか表現できていると感じる文ができれば可とする。

仮マイセンテンス

この感じは、【　流儀を分かち合う　】という感じである。

⑥さらに探りたい感覚が最も強い語に、二重下線を引く。

4.深化シート

①「3. 把握シート」の仮マイセンテンスと二重下線を書き写し、フェルトセンスを感じ直す。

仮マイセンテンス

この感じは、【　流儀を分かち合う修行　】という感じである。

②①の【　】の二重下線部分を空所にして書き写す。

この感じは、【　流儀を分かち合う　（　　）　】という感じである。

③二重下線の語をキーワード1とする。

キーワード1（　修行　　）

④キーワード1の一般的意味を書く。

仏道を身につけたり、武芸や芸能を身につけたりするために努力すること。
悟りを求めて仏の教えを実践すること。托鉢をして巡礼すること。
精神を鍛え、学問・技芸などを修め磨くこと。また、そのために諸国を巡ること。

⑤②の空所を感じ、キーワード1で表現したいフェルトセンスの意味感覚を書く。一般的意味にこだわらず自由に書く。

ありとあらゆる日本語のまちがい、主に語彙・文法の誤用を訂正したり、おかしな表現を推測して適切な言い方に修正したりするのだが、意味不明な箇所は聞き取りを行って何を言いたいのか理解したうえで添削しつつ、言いたいことが言えているのかを確認しなければならないため、根気と忍耐が必要となり、果てしなく時間がかかるのだ。それに耐えながら黙々とこなさなければならない難行苦行とも言える。だが、それは１つの本に仕上げるための指導を受けるには欠かすことのできない前提条件であり、日本語について新たな気づきが生まれる鉱山での採掘作業のようなものでもある。　、、、、、、、、

⑥「、、、」をつけて終了する。重要だと感じられる2、3の語句に波線を引く。

⑦⑥で波線を引いた語句の中から、さらに探りたい感覚が最も強い語を選ぶ。

キーワード2（　採掘作業　　）

⑧キーワード２の一般的意味を書く。

地中の好物や石炭・石油を掘り取る作業のこと。

⑨②の空所を感じ、キーワード ２ で表現したいフェルトセンスの意味感覚を書く。一般的意味にこだわらず自由に書く。

この作業は、石油や石炭を掘るというよりは、宝石の原石を掘り当てるようなもので、なかなか見つけられない作業であるが、その原石を見つけた時には驚きと発見につながる。ただ、多くの作業は徒労に終わるとも言え、報われることは極めて少なくて、虚しさと背中合わせにあるものである。、、、、、

⑩「、、、」をつけて終了する。重要だと感じられる2、3の語句に波線を引く。

⑪⑩で波線を引いた語句の中から、さらに探りたい感覚が最も強い語を選ぶ。

キーワード3（　徒労に終わる　　）

⑫キーワード 3 の一般的意味を書く。

　頑張って苦労して行ったが、成果が出ることなく、苦労が報われず終結すること。無駄骨。

⑬②の空所を感じ、キーワード 3 で表現したいフェルトセンスの意味感覚を書く。一般的意味にこだわらず自由に書く。

　どんなに添削して、それを書き直したとしても、学生の誤用がおさまるとは言い難い。また、シナリオとしての内容面での問題が大きい場合は、日本語の問題では解決できないため、そのサポートには限界がある。そして、当たり前の存在としてそこにいることで、誰にも感謝されない悲しい性だと思わずにはいられない。　、、、、、、、、、

⑭「、、、」をつけて終了する。重要だと感じられる2、3の語句に波線を引く。

⑮⑬で波線を引いた語句の中から、さらに探りたい感覚が最も強い語を選ぶ。

キーワード4（　性ーさが　）

⑯キーワード4　の一般的意味を書く。

　1.生まれつきの性質、性格、もちまえ。　2.持って生まれた運命、宿命。
　3.ならわし、習慣、くせ。　　4.良いところと悪いところ。特に、欠点や短所。

⑰②の空所を感じ、キーワード4で表現したいフェルトセンスの意味感覚を書く。一般的意味にこだわらず自由に書く。

　生まれつきという側面もあるだろうが、どちらかというと日本語教師としての性と言えるかもしれない。おかしな日本語をおもしろいと許される範囲なら良いのだが、シナリオという創作となると、そんな悠長なことも言っていられない。

　ましてや、必要十分条件となる作品にするためには、放置しておくわけにはいかないという教師魂のようなものが私に呼びかけてきて、適当なところで手を打つわけにはいかないと思っているのだろう。一方で、どこかで誰かのためになっていると信じることで自分のやっていることに価値や意味を見出そうとしているのかもしれない。そうしてしまう己の性を恨めしく思うのだ。、、、、、、、、

⑱「、、、」をつけて終了する。重要だと感じられる2、3の語句に波線を引く。

⑲キーワード1、2、3と波線を引いた語を集め、コンマで区切って並べる（順不同）。

この感じは、【　流儀を分かち合う、修行、採掘作業、徒労に終わる、悲しい性、己の性　】という感じである。

⑳集めた語をながめながら、フェルトセンスを感じ直す。感じているフェルトセンスを一文で表現する。

マイセンテンス

この感じは、【　流儀を分かち合う己の性という　】感じである。

6.パターン抽出シート

パターン１			
とりあえずやるしかない	戸惑い悩みながらも、ここまではと定めて進むしかない。		
シナリオだけ読んでも文章として理解に至らない自分に気づく。	シナリオの作法を学んでみるが、内容として見えていなかったダメ出しをくらう。	シナリオの内容的な部分には踏み込んでほしくないと脚本家たちは考えている。	何度言えばわかるんだと、同じ誤用の繰り返しにうんざりするが、根気強く直し続ける。
内容的にどうかなんて考えないようにする。	ともかく読んで、日本語としてわかるところまで直すというスタンスで臨む。	留学生ならではの作品のために、それぞれが骨身を削って携わっていく。	どこまで修正すればいいのか、どこまでが私の仕事なのか、でも放っておけない自分がいる。

パターン２			
ダメダメ、それでは意味ない	疑問や不満を抱え込んで、大人の振る舞いをしている。		
夢を折りたたむとか、ゾンビや特撮SFとか、リアルではない世界観に翻弄される。	日本人なら分かるでしょうと、荒井晴彦大先生に言われるが、それは私の仕事か？と内心毒づく。	留学生の日本語力では書けない部分を助けることから生まれる葛藤がある。	K先生の留学生にも厳密な日本語チェックにそこまで修正するべきかと疑問を抱くが対応せざるを得ない。
まさか、そこまで厳密に日本語をチェックしろと言うのかとの声が脳裏をよぎる。	私はあなたの助手ではないのですが、とK先生のメール文に内心思う。		やり過ぎてもやらなさ過ぎても問題になることは自明の理。

パターン3					
見える、新しい世界	新しい世界に触れながら、面白さと発見が形になっていく。				
本物の脚本家がそこにいる。今までの人生で会ったことのない種類の方々だ。	あの作品を書いた人、このドラマを書いた人など、初めてのことばかりです。	日本人ならそうは言わないだろうという時はどうすればいいのか？	丸山大先生に「私と同じく職人ですね」と言われた。	はためにも、3年かけて信頼関係ができてきたのがわかると言われるようになる。	日本語以前の問題は、学生たちが描こうとする世界観にあるのではないかという思いが強くなる。
映像とシナリオの関係を教えてもらう。なるほど、そういうことかと思う。	多発する文法的な誤用例は重なるものばかりで、分類して整理するようになる。	性的描写に戸惑わない自分がいる時、ある程度の歳と人生を重ねていて良かったと思う。	気づき添削で自律学習に繋げることは可能なのか。	日本語力というより、母語での創造性や思考力に重大なポイントがあると気づく。	どうしても描きたいという留学生の世界観に触れ、何度も繰り返しサポートする。

パターン4					
何なんだろう、これって	自分のビリーフの揺らぎと我意との戦いがある。				
そこまで気づかなければならないのかとも思ってしまう自分が、どこかにいる。	シナリオならではの間違いに気づくと直さずにはいられない。	中国が舞台の場合は独特の価値観や文化事情をどう扱うべきなのか？	当初の仕事は中村クラスからの送り込みだったことを思い出す。	留学生の新人類かとも思う物語の世界観は、もはや日本語レベルの問題ではない。	自分の中には、留学生からの感謝の言葉や敬意を持った態度を期待する気持ちが渦巻いている。
日本語教師として正しい日本語にしなければ、正しいとはどこまでをいうのかと疑問を抱き悶々とする。	秀作には手厚くという方針から、こちらが請け負うのが当然という留学生の態度がある。	日本語面でのサポートができていないと思われたくないと考えている自分に気づく。	I先生から機械翻訳の日本語を読まされると、脳みそが破壊されると訴えられる。	提出してしまえば、留学生たちは全てが忘却の彼方へと捨て去られる。	脚本家の個人による指導の違いが大き過ぎて、どうなんだろうと感じてはいる。

8.交差シート

	パターン1後半部 定めて進むしかない	パターン2後半部 大人の振る舞いをしている	パターン3後半部 発見が形になっていく	パターン4後半部 我意との戦いがある
パターン1前半部 戸惑い悩むが	―	交差パターン1×2 戸惑い悩むが 大人の振る舞いをしている(◎) 交差して浮かんでくること どこまでサポートすべきか そこまでせねばと疑問 求められることに応じる 新パターン 脚本家の求めに応じるのは 仕事としての大人の振る舞いだ。 判定（ △ ）	交差パターン1×3 戸惑い悩むが 発見が形になっていく 交差して浮かんでくること そんなところが引っ掛るのか なるほど、そうかと発見する 発見して新しい形が生まれる 新パターン なるほど、そうかと発見して 新しい形の作品が生まれる。 判定（ ○ ）	交差パターン1×4 戸惑い悩むが 我意との戦いがある 交差して浮かんでくること 作品に貢献する意味はあるの 助けるだけの価値はあるの 新パターン 意味や価値に悩むのは 我意なのかと葛藤する。 判定（ ◎ ）
パターン2前半部 疑問や不満を抱え込んで	交差パターン2×1 疑問や不満を抱え込んで 定めて進むしかない 交差して浮かんでくること 日本語の上達が望めるのか 当たり前だと思っていないか 感情に囚われずやるしかない 新パターン あれやこれや感情が渦巻くが 気にしていたら進めない。 判定（ ○ ）	―	交差パターン2×3 疑問や不満を抱え込んで 発見が形になっていく 交差して浮かんでくること 日本語指導としての疑問 学生への感情的な不満 飲み込んでも発見がある 新パターン 疑問や不満を飲み込んでも 発見があるから形になる。 判定（ ◎ ）	交差パターン2×4 疑問や不満を抱え込んで 我意との戦いがある 交差して浮かんでくること 教える上での疑問や個人的な 感情を抑え込むのは我意だと 認めたくないから 新パターン 疑問や不満の噴出が 我意を認識させる。 判定（ ◎ ）

パターン3前半部 新しい世界に触れながら	交差パターン3×1 新しい世界に触れながら 定めて進むしかない 交差して浮かんでくること シナリオを書くという世界 芸術家の世界観 自分の立ち位置を定める 要望に応えるしかない 新パターン 芸術家の世界観に触れながら 立ち位置を定めて進む。 判定（ ○ ）	交差パターン3×2 新しい世界に触れながら 大人の振る舞いをしている 交差して浮かんでくること シナリオを書くという世界 芸術家たちのつくる世界 要求に応える振る舞いをする 新パターン 芸術家の書く世界に触れて 求められることに応える。 判定（ ◎ ）	―	交差パターン3×4 新しい世界に触れながら 我意との戦いがある 交差して浮かんでくること 知らなった新しい世界 純粋な好奇心 善と悪が交差する感情がある 新パターン 純粋な好奇心の一方で 善と悪の感情が交差する。 判定（ ◎ ）
パターン4前半部 ビリーフが揺らぎ	交差パターン4×1 ビリーフが揺らぎ 定めて進むしかない 交差して浮かんでくること 正しい日本語というビリーフ 何が正解なのか揺れる 揺れていたら終わらない 新パターン 信念が揺れながら 譲り決めて進むしかない。 判定（ ◎ ）	交差パターン4×2 ビリーフが揺らぎ 大人の振る舞いをしている 交差して浮かんでくること 日本語教師としての信念 脚本家としての信念 境界線を引く 新パターン 互いの信念の塩梅を図り それぞれの境界線を守る 判定（ ◎ ）	交差パターン4×3 ビリーフが揺らぎ 発見が形になっていく 交差して浮かんでくること 本当にこれでいいのかと問う 揺れながら変容 新パターン ビリーフが揺れながら変容し 発見したことが形をつくる 判定（ △ ）	―

9. 用語選定シート

① テーマを書く。

留学生が日本語で書くシナリオのサポートをする自分を探る

②「5. 再把握シート」「7.パターン一覧シート」と「8.交差シート」（作成していない場合は、「2. 実例シート」）をながめながら全体を感じる。ここまでで気づいたことを、重要語（句）を拾い上げる方法で、書きとめていく。意味の近い語（句）は近い位置におく。図を描いてもよい。完全にまとめあげてしまわず、浮かんでくることを置いていく感覚でおこなう。

ざわざわ　行くべきか行かざるべきか

悩ましい　感情より理性　どう動くか

脚本家のケア　もはや介護状態　創作者

仕事の流儀　創り続ける人　尊敬と唖然

感情の封じ込め　そこが大事なのか

そこまでやるべきか　折衷案の提示

自分の浅はかさ　深いより早い解決

効率と対話の狭間

真意を探る　やり遂げなければならない
世界観のズレ　ズレの仲裁　闇の原理
弱みやプライド　自分のためなのではないか
他者の尊重　他者の尊重

正しさとセンスの関係　勘所を押さえる

③大きな三角形を描く感覚で、なるべく広い範囲が含まれるよう、重要語（句）を、3つ選び、用語とする。複数語（句）をまとめる新しい語（句）を考えてもよい。

用語	仕事の流儀	感情の封じ込め	世界観のズレ

10.用語関連シート

<table>
<tr><td colspan="4">①「9. 用語選定シート」で選んだ用語 A、B、C を。２用語ずつ関連づけていく。</td></tr>
<tr><td colspan="2">用語</td><td>A：仕事の流儀</td><td>B：感情の封じ込め</td><td>C：世界観のズレ</td></tr>
<tr><td>A
B</td><td colspan="4">②意味を考慮せずに、(　) に用語を記入する。
（A　仕事の流儀　　）は（B　感情の封じ込め　　）である。
③②で作った文がフェルトセンスを表現するよう文を変形する。「は」と「である」は残す。最低限必要な語句は追加可。
【日本語教師としての仕事の流儀としては、脚本家を前にして感情の封じ込めをすることが必要】（もの）である。
④気づいたことを自由に書く。重要部分に下線を引く。
互いの<u>棲み分け</u>が仕事の流儀だが、前提意識の齟齬からくる一言モノ申すという感情を封じ込めることで上手くいく。</td></tr>
<tr><td>B
A</td><td colspan="4">⑤意味を考慮せずに、(　) に用語を記入する。
（B　感情の封じ込め　　）は（A　仕事の流儀　　）である。
⑥⑤で作った文がフェルトセンスを表現するよう文を変形する。「は」と「である」は残す。最低限必要な語句は追加可。
【一言進言したい感情を封じ込めるということは、求められる自分の役割をこなすという仕事の流儀を形づくる】（もの）である。
⑦気づいたことを自由に書く。重要部分に下線を引く。
<u>対立を避ける</u>ためにしていることが精神的な負担にならないように、求められることに存在価値を見出そうとする防衛本能がある。</td></tr>
<tr><td>B
C</td><td colspan="4">⑧意味を考慮せずに、(　) に用語を記入する。
（B　感情の封じ込め　　）は（C　世界観のズレ　　）である。
⑨⑧で作った文がフェルトセンスを表現するよう文を変形する。「は」と「である」は残す。最低限必要な語句は追加可。
【自分と脚本家の仕事の境界線が曖昧なことから来る対立を避けるために感情を封じ込めることは、相互の世界観のズレに気づかないまま進むという　】（もの）である。
⑩気づいたことを自由に書く。重要部分に下線を引く。
この場合の世界観とは、日本語でシナリオを<u>書くことの意味</u>について抱いている教育というものの世界観と言える。</td></tr>
<tr><td>C
B</td><td colspan="4">⑪意味を考慮せずに、(　) に用語を記入する。
（C　世界観のズレ　　）は（B　感情の封じ込め　　）である。
⑫⑪で作った文がフェルトセンスを表現するよう文を変形する。「は」と「である」は残す。最低限必要な語句は追加可。
【教育に関する世界観がズレていてもお互いの役割分担ができれば悪くはないので、進言したいという感情を封じ込めた方が良いという】（もの）である。
⑬気づいたことを自由に書く。重要部分に下線を引く。</td></tr>
</table>

	日本語教師として持っていた世界観と異なる世界観に気づいたことで、役割分担できるから感情を自分の中に封じ込める。そして、改めて、留学生が日本語でシナリオを書くことの意味を考えるようになる。
C A	⑭意味を考慮せずに、(　)に用語を記入する。 （C　世界観のズレ　　）は（A　仕事の流儀　　）である。 ⑮⑭で作った文がフェルトセンスを表現するよう文を変形する。「は」と「である」は残す。最低限必要な語句は追加可。 【なぜ世界観がズレているのかという答えは、仕事の流儀が異なるところにある　】（もの）である。 ⑯気づいたことを自由に書く。重要部分に下線を引く。 日本語でシナリオを書くという目標と、映像制作の専門家になるためにシナリオを書くという**目標は異なる**のだということに気づくようになった。シナリオを書くことの意味の違いに気づく。
A C	⑰意味を考慮せずに、(　)に用語を記入する。 （A　仕事の流儀　　）は（C　世界観のズレ　　）である。 ⑱⑰で作った文がフェルトセンスを表現するよう文を変形する。「は」と「である」は残す。最低限必要な語句は追加可。 【脚本家が持っている仕事の流儀と、日本語教師が持つ仕事の流儀とは世界観にズレがある　】（もの）である。 ⑲気づいたことを自由に書く。重要部分に下線を引く。 全く違う分野の仕事の流儀の異なりを知ることは、新しい発見をもたらし得る。

11.用語探索シート

<table>
<tr><td colspan="4">① 「10. 用語関連シート」と同じ語を用語 A、B、C とする。２用語ずつ、本質的な関連を探索する。</td></tr>
<tr><td>用語</td><td>A：仕事の流儀</td><td>B：感情の封じ込め</td><td>C：世界観のズレ</td></tr>
<tr><td>A
B</td><td colspan="3">② 意味を考慮せずに、（ ）に用語を記入する。
（A 仕事の流儀 ）は（B 感情の封じ込め ）の性質をもつ。
③ ②で作った文がフェルトセンスを表現しているとすれば、何が言えるだろうかと自問する。浮かんでくることを自由に書く。
（A 仕事の流儀）が（B 感情の封じ込め）の性質を受け継いでいるとすればその性質は何だろうと、自問してもよい。
日本語教師としては、「ここまでが日本語の問題だという<u>境界線</u>を引いて対処する」という仕事の流儀を守り、それを通していく上で、あらゆる感情を封じ込めて乗り越えることも大事な流儀の要素ともいえそうだ。
④ 重要だと感じられる語が出て来たら、新用語とする。 →新用語 D 境界線</td></tr>
<tr><td>B
A</td><td colspan="3">⑤ 意味を考慮せずに、（ ）に用語を記入する。
（B 感情の封じ込め ）は（A 仕事の流儀 ）の性質をもつ。
⑥ ⑤で作った文がフェルトセンスを表現しているとすれば、何が言えるだろうかと自問し、浮かんでくることを自由に書く。
（B 感情の封じ込め）が（A 仕事の流儀）の性質を受け継いでいるとすれば、その性質は何だろうと、自問してもよい。
どこまでやればいいのか、そこまでやる必要があるのか、疑問や苛立ちといった感情の封じ込めは、日本語教師として<u>やり遂げなければならない</u>ために、いつの間にか自分の流儀として身についている。
⑦重要だと感じられる語が出て来たら、新用語とする。 →新用語 E やり遂げなければならない</td></tr>
<tr><td>B
C</td><td colspan="3">⑦ 意味を考慮せずに、（ ）に用語を記入する。
（B 感情の封じ込め ）は（C 世界観のズレ ）の性質をもつ。
⑧ ⑧で作った文がフェルトセンスを表現しているとすれば、何が言えるだろうかと自問し、浮かんでくることを自由に書く。
（B 感情の封じ込め）が（C 世界観のズレ）の性質を受け継いでいるとすれば、その性質は何だろうと、自問してもよい。
封じ込めた感情の原因は、お互いの専門領域における世界観のズレがあるからだと気づき、今ここで<u>教えることの意味</u>に齟齬があるからだと分かる。</td></tr>
</table>

	⑨　重要だと感じられる語が出て来たら、新用語とする。　　→新用語Ｆ　**教えることの意味**
C B	⑪意味を考慮せずに、（　）に用語を記入する。 （C　世界観のズレ　）は（B　感情の封じ込め　）の性質をもつ。 ⑫⑪で作った文がフェルトセンスを表現しているとすれば、何が言えるだろうかと自問し、浮かんでくることを自由に書く。 （C 世界観のズレ）が（B 感情の封じ込め）の性質を受け継いでいるとすれば、その性質は何だろうと、自問してもよい。 **お互いの生きて来た世界観のズレは解消できないと悟っているから、賢明な方法として感情の封じ込めをしながら<u>折り合い</u>をつけていく。** ⑬重要だと感じられる語が出て来たら、新用語とする。　　→新用語Ｇ　**折り合い**
C A	⑭意味を考慮せずに、（　）に用語を記入する。 （C　世界観のズレ　）は（A　仕事の流儀　）の性質をもつ。 ⑮⑭で作った文がフェルトセンスを表現しているとすれば、何が言えるだろうかと自問し、浮かんでくることを自由に書く。 （C 世界観のズレ）が（A 仕事の流儀）の性質を受け継いでいるとすれば、その性質は何だろうと、自問してもよい。 **お互いに世界観のズレがあるが、異なる仕事の流儀を尊重する。それは、譲れない事情を抱え込みながらも<u>前に進まなければならない</u>からである。** ⑯重要だと感じられる語が出て来たら、新用語とする。　　→新用語Ｈ　**前に進まなければならない**
A C	⑰意味を考慮せずに、（　）に用語を記入する。 （A　仕事の流儀　）は（C　世界観のズレ　）の性質をもつ。 ⑱⑰で作った文がフェルトセンスを表現しているとすれば、何が言えるだろうかと自問し、浮かんでくることを自由に書く。 （A 仕事の流儀）が（C 世界観のズレ）の性質を受け継いでいるとすれば、その性質は何だろうと、自問してもよい。 **異なった仕事の流儀に触れて、世界観のズレを知ることは、自分をバージョンアップすることに繋がる。** ⑲重要だと感じられる語が出て来たら、新用語とする。　　→新用語Ｉ　**バージョンアップ**

12.用語組込シート

<table>
<tr><td colspan="4">①「9. 用語選定シート」「10. 用語関連シート」「11. 用語探索シート」（作成していない場合は「2. 実例シート」）の中　から重要語（句）を集め。用語リストを作成する。その他のシートから選んで付け足してもよい。</td></tr>
<tr><td>用語リスト</td><td colspan="3">A：仕事の流儀　B：感情の封じ込め　C：世界観のズレ　D：境界線　E：やり遂げなければならない　F：教えることの意味　G：折り合い　H：前に進まなければならない　I：バージョンアップ</td></tr>
<tr><td colspan="4">②用語リストの中から重要だと感じられる３用語を選び、概念 O、P、Q とする。３用語を相互に組み込み文を作る。</td></tr>
<tr><td>用　語</td><td>O：　世界観のズレ</td><td>P：境界線</td><td>Q：バージョンアップ</td></tr>
<tr><td rowspan="2">O
P
Q
文
セ
ッ
ト</td><td colspan="3">O を主語とし、述部に P と Q（順不同）を含む文で、フェルトセンスを表現する。
↓P と Q（順不同）を使って文を続ける。
③（O 世界観のズレ）は、私と学生、脚本家のそれぞれの間にあるもので、その存在によって境界線を引きながらも自分がバージョンアップされる結果をもたらす。
P を主語とし、述部に Q と O（順不同）を含む文で、③と同内容を表現する。
↓O と Q（順不同）を使って文を続ける。
④（P 境界線）は、お互いの世界観のズレによって生じたものだが、それがあることで自分を守っているのかもしれないし、それがあってもバージョンアップできることに気づけた。
Q を主語とし、述部に O と P（順不同）を含む文で、③と同内容を表現する。
↓P と O（順不同）を使って文を続ける。
⑤（Q バージョンアップ）は、世界観のズレから生まれた境界線を維持しつつも、前に進むことによって見える景色が変わった新しいステージのことである。</td></tr>
<tr><td colspan="2">用語リストから１つ選び R とする。</td><td>R：新しいステージ</td></tr>
<tr><td>O
P
Q
R
文
セ
ッ
ト</td><td colspan="3">③の文をなるべく変えずに R を付加し、フェルトセンスを表現する。文法上必要な変更は可。複数の文に分割可。
↓③の述部に R を付加する。
⑥（O 世界観のズレ）は、私と学生、脚本家のそれぞれの間にあるもので、その存在によって境界線を引くのだが、自分がバージョンアップされた結果、新しいステージに立っていることに気づくのである。
④の文をなるべく変えずに R を付加し、⑤と同内容を表現する。文法上必要な変更は可。複数の文に分割可。
↓④の述部に R を付加する。
⑦（P 境界線）は、お互いの世界観のズレによって生じるものだが、それがあることで自分を守っているのかもしれないし、それがあってもバージョンアップできることに気づけたのは、新しいステージに立った時である。
⑤の文をなるべく変えずに R を付加し、⑤と同内容を表現する。文法上必要な変更は可。複数の文に分割可。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="4"></td><td colspan="2">↓⑤の述部に R を付加する。
⑧（**Q バージョンアップ**）は、**世界観のズレから生まれた境界線を維持しつつも、前に進むことによって見える景色が変わった新しいステージのことである。**</td></tr>
<tr><td colspan="2">R を主語とし、述部に OPQ（順不同）を含む文で、⑤と同内容を表現する。</td></tr>
<tr><td colspan="2">↓O、P、Q（順不同）を使って文を続ける。
⑨（**R 新しいステージ**）は、**世界観のズレから生まれた境界線を維持しつつも、前に<u>*共に進む*</u>ことによって見えた景色であり、自分がバージョンアップされて辿り着けたところである。**</td></tr>
<tr><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td rowspan="4">O
P
Q
R
S
文
セ
ッ
ト</td><td>用語リストから１つ選び S とする。</td><td>S：**やり遂げなければならない**</td></tr>
<tr><td colspan="2">⑥の文をなるべく変えずに S を付加し、フェルトセンスを表現する。文法上必要な変更は可。複数の文に分割可。
↓⑦の述部に S を付加する。
⑩（**O 世界観のズレ**）は、**お互いの世界観のズレによって生じるものだが、それがあることで自分を守っているのかもしれないし、それがあってもバージョンアップできることに気づけたのは、新しいステージに立った時であり、そこにはやり遂げなければならないという自分がいた。**
⑦の文をなるべく変えずに S を付加し、⑩と同内容を表現する。文法上必要な変更は可。複数の文に分割可。
↓⑧の述部に S を付加する。
⑪（**P 境界線**）は、**世界観のズレから生まれた境界線である。それを維持しつつも、前に進むことによって見える景色が変わり、新しいステージに立つ。すると、そこにはやり遂げなければならないという自分がいた。**
⑧の文をなるべく変えずに S を付加し、⑩と同内容を表現する。文法上必要な変更は可。複数の文に分割可。
↓⑨の述部に S を付加する。
⑫（**Q バージョンアップ**）は、**世界観のズレから生まれた境界線を維持しつつも、前に<u>*共に*</u>進むことによって見えた景色であり、自分がバージョンアップされて辿り着けたところである。そこには、新しいステージがあり、やり遂げなければならならないという自分がいた。**
⑨の文をなるべく変えずに S を付加し、⑩と同内容を表現する。文法上必要な変更は可。複数の文に分割可。
↓⑥の述部に S を付加する。
⑬（**R 新しいステージ**）は、**自分がバージョンアップされた結果、そこに立っていることに気づいた場所である。そして、そこには<u>*常に*</u>やり遂げなければならないという自分がいた。**
S を主語とし、述部に OPQR（順不同）を含む文で、⑩と同内容を表現する。
↓O、P、Q、R（順不同）を使って文を続ける。
⑭（**S やり遂げなければならない**）**というのは、日本語教師としての強い使命感であり、プライドなのだ。それが時には、学生や脚本家との間に世界観のズレを生む。そして、境界線を引くことで自分を守ろうとする。しかし、世界観のズレを認識しながらも、境界線を維持して共に前に進むことによって、それぞれがバージョンアップされていく。そうすると、今までには見たことのない新しい景色が見える日が来て、新しいステージに立っていることを知ることになるのである。**</td></tr>
</table>

15.結果パターンシート

① 結果パターンNo.（ 1 ）			
使命感いっぱいというのは、日本語教師としての強い使命感であり、プライドなのだ。それが時には、学生や脚本家との間に世界観のズレを生む。			
② ①の結果パターンが表れている実例カードを貼付ける（ホチキスで留めたり、書き写したりしてもよい）。			
シナリオだけ読んでも文章として理解に至らない自分に気づく。No.3	そこまで気づかなければならないのかとも思ってしまう自分が、どこかにいる。No.6	ともかく読んで、日本語としてわかるところまで直すというスタンスで臨む。No.7	多発する文法的な誤用例は重なるものばかりで、分類して整理するようになる。No.9
日本人ならそうは言わないだろうという時はどうすればいいのか？No.12	性的描写に戸惑わない自分がいる時、ある程度の歳と人生を重ねていて良かったと思う。No.14	M大先生に「私と同じく職人ですね」と言われた。No.15	日本語教師として正しい日本語にしなければ、正しいとはどこまでをいうのかと疑問を抱き悶々とする。No.16
日本語面でのサポートができていないと思われたくないと考えている自分に気づく。No.17	日本人なら分かるでしょうと、荒井晴彦大先生に言われるが、それは私の仕事か？と内心毒づく。No.19	私はあなたの助手ではないのですが、とK先生のメール文に内心思う。No.22	当初の仕事は中村クラスからの送り込みだったことを思い出す。No.23
何度言えばわかるんだと、同じ誤用の繰り返しにうんざりするが、根気強く直し続ける。No.26	どうしても描きたいという留学生の世界観に触れ、何度も繰り返しサポートする。No.28	どこまで修正すればいいのか、どこまでが私の仕事なのか、でも放っておけない自分がいる。No.29	秀作には手厚くという方針から、こちらが請け負うのが当然という留学生の態度がある。No.30
気づき添削で自律学習に繋げることは可能なのか。No.32	自分の中には、留学生からの感謝の言葉や敬意を持った態度を期待する気持ちが渦巻いている。No.36		

① 結果パターンNo.（ 2 ）			
そして、境界線を引くことで自分を守る。しかし、世界観のズレを認識しながらも、境界線を維持して共に前に進むことによって、それぞれがバージョンアップされていく			
② ①の結果パターンが表れている実例カードを貼付ける（ホチキスで留めたり、書き写したりしてもよい）。			
本物の脚本家がそこにいる。今までの人生で会ったことのない種類の方々だ。No.1	あの作品を書いた人、このドラマを書いた人など、初めてのことばかりです。No.2	シナリオの作法を学んでみるが、内容として見えていなかったダメ出しをくらう。No.5	内容的にどうかなんて考えないようにする。No.8
夢を折りたたむとか、ゾンビや特撮SFとか、リアルではない世界観に翻弄される。No.11	中国が舞台の場合は独特の価値観や文化事情をどう扱うべきなのか？No.13	シナリオの内容的な部分には踏み込んでほしくないと脚本家たちは考えている。No.18	留学生ならではの作品のために、それぞれが骨身を削って携わっていく。No.21
日本語以前の問題は、学生たちが描こうとする世界観にあるのではないかという思いが強くなる。No.24	まさか、そこまで厳密に日本語をチェックしろと言うのかとの声が脳裏をよぎる。No.25	井上先生から機械翻訳の日本語を読まされると、脳みそが破壊されると訴えられる。No.27	留学生の日本語力では書けない部分を助けることから生まれる葛藤がある。No.31
金子先生の留学生にも厳密な日本語チェックにそこまで修正するべきかと疑問を抱くが対応せざるを得ない。NO.33	留学生の新人類かとも思う物語の世界観は、もはや日本語レベルの問題ではない。No.34		

①結果パターンNo.（ 3 ）			
そうすると、今までには見たことのない新しい景色が見える日が来て、新しいステージに立っていることを知ることになるのである。			
② ①の結果パターンが表れている実例カードを貼付ける（ホチキスで留めたり、書き写したりしてもよい）。			
映像とシナリオの関係を教えてもらう。なるほど、そういうことかと思う。No.4	シナリオならではの間違いに気づくと直さずにはいられない。No.10	はためにも、3年かけて信頼関係ができてきたのがわかると言われるようになる。No.20	日本語力というより、母語での創造性や思考力に重大なポイントがあると気づく。NO.35
やり過ぎてもやらなさ過ぎても問題になることは自明の理。No.37	提出してしまえば、留学生たちは全てが忘却の彼方へと捨て去られる。No.38	脚本家の個人による指導の違いが大き過ぎて、どうなんだろうと感じてはいる。No.39	

【実践報告】

異年齢学級におけるインクルージョンの実現
—Thinking at the Edge による質的分析—

海老澤佳輝

キーワード
Thinking at the Edge、インクルーシブ教育、異年齢教育、国際バカロレア

１．はじめに

中教審（2021）は『令和の日本型学校教育』において、「インクルーシブ教育システムの理念を構築」を求めており、日本においてもインクルーシブ教育に関わる多くの実践が行われてきた。しかし、その殆どは同年齢学級において行われているものであり、異年齢保育を除き、小学校において異年齢学級に基づいた実践は多くない。そこで、本実践では、インクルージョンを促す上での異年齢学級が及ぼす影響を分析し、その有効性を検討する。

２．方法

2.1　実践の概要

中教審（2021）は『令和の日本型学校教育』において、「インクルーシブ教育システムの理念を構築」を求めており、日本においてもインクルーシブ教育に関わる多くの実践が行われてきた。しかし、その殆どは同年齢学級において行われているものであり、異年齢保育を除き、小学校において異年齢学級に基づいた実践は多くない。そこで、本実践では、インクルージョンを促す上での異年齢学級が及ぼす影響を分析し、その有効性を検討する。

実践校は私立の小学校で、国際バカロレア（以下 IB）PYP 認定校である。本校は、ホームと呼ばれる異年齢学級と、クラスと呼ばれる同年齢学級を持っており、朝の支度、朝の会、給食、掃除、帰りの会、学校行事などを異年齢で、学習は主に同年齢で行っている。ホームは 1 年生から 5 年生、各学年 5, 6 名程度で合計 30 名弱の異年齢集団を形成している。係や当番、関係性作りや活動を円滑に進められる仕組み作りなど、通常の学級経営と比べて教師の介入に大きな差はないが、行事やホームで行うイベントは児童主体で進めることを求めており、教師は児童同士の話し合いのファシリテーションを行いながら調整を行っていく。異年齢による共同生活は、多様性を尊重する態度や協働する力を育むことができ、同年齢で可視化される障害や「できなさ」を見えづらくする効果を期待できる。

2.2　データの収集

本実践では、ホームとクラスの二つの集団を経験している、1 年生（6 名）、2 年生（5 名）、3 年生（6 名）、4 年生（4 名）、5 年生（5 名）合計 26 名の異年齢集団を対象に、20××年 4 月から 20××年 3 月までの 1 年間の振り返り、質問紙への回答を行う。回答されたワークシートを文字データに変換し、分析を行った。

３．データの分析（Thinking at the Edge の活用）

まず初めに、テキストマイニングによる分析を行った。そこでは、共起キーワードから「多様性・協働性」に対する意識や、異年齢活動に対してポジティブに捉える児童が多くいることが示唆された。学年や性別に関係なく過ごしていることが推測され、障害の可視化がなされない環境になっていると言える。しかし、ネガティブな感想を記述する児童も複数名見られ、テキストマイニングのデータだけでは課題の吸い上げを十分に行うことが難しい。そこで、Thinking at the Edge（Gendlin, 2004, 以下 TAE）を用いて質的な分析を試みた。TAE は、Eugene Gendlin と Mary Hendricks が共同開発した「うまく言葉にできない感覚」を言語化していく具体的な方法であり、Gendlin の「暗在性哲学」に基づいた理論である。本稿においては、得丸・小林（2016）がウェブサイト上に公開している「TAE リフレクション」から、ワークシートをダウンロードし、一部改変し手順に従って分析を進めていった。

3.1 Part Ⅰ フェルトセンスから語る

文字起こししたデータを読み返し、言葉になる以前のぼんやりとした「からだの感覚」であるフェルトセンス（Gendlin, 2004）を感じ直し、「マイセンテンスシート」（得丸, 2008）を作成した。浮かび上がってくる数語を書き出し、特に重要だと感じられる語を選び、一般的な意味とフェルトセンス独自の意味を表現した。記述していく中で、フェルトセンスを表現する一文（マイセンテンス）を作成し、結果「この感じは『違うことが当たり前であるために、他の人と違うことが気にならない』という感じである。」となった。マイセンテンスシートは表１の通りである。

表１
マイセンテンスシート

①テーマ＊テーマを 1 つ選び、「この感じ」としてもつ。下に事柄をメモする		
小学校の異年齢学級におけるインクルージョンの実現		
②　浮かんでくる語句＊「この感じ」の意味感覚（フェルトセンス）に浸りながら書く		
楽しい、学年関係なく、協力、友達、違いが気にならない、気持ち、場所、リーダーシップ、役割、、、		
③　仮マイセンテンス＊意味感覚を短い 1 つの文または句にする。語も文型も自由に作る		
この感じは、「異年齢学級は、違いを気にせずにすごせる場所」という感じである。		
④　空所のある文＊仮マイセンテンスの二重線の部分を空欄にした文を書く		
この感じは、「異年齢学級は、（　　）過ごせる場所」という感じである。		
キーワードの通常の意味と、意味感覚独自の意味を書く		
⑤ キーワード１	⑧ キーワード２	⑪　キーワード 3

学年関係なく	違いが気にならない	役割をもって
⑥　通常の意味	⑨　通常の意味	⑫　通常の意味
年齢に関係なく、一緒にいられる。	相手のことを意に介さない	割り振られた役目
⑦　意味感覚独自の意味	⑩　意味感覚独自の意味	⑬　意味感覚独自の意味
学年に関係なく、関係性が対等である。年齢の違いによって確執や差別が生まれることなく、安心して一緒にいることができる・・・	違うということが当たり前で、違うからといってあいてを排除しない。無関心でいられる。相手を受け入れられる・・・	ともに過ごしていく中で、各個人の適性や特性に応じて自然発生的に与えられた役割、役目・・・
⑨　拡張文を書く　＊空欄に、すべてのキーワードと下線の語を並べた文を書く		
この感じは「異年齢学級は、（学年関係なく、対等に、安心して、違いを気にせずに、排除せずに、無関心で、受け入れて、役割をもって、適性や特性に応じて、自然発生的に、役割を持って）過ごせる場所、、、」という感じである。		
⑩　マイセンテンス＊意味感覚を短い１つの文にする。語も文型も自由に作る		
この感じは「違うことが当たり前であるために、他の人と違うことが気にならない」という感じである。		
⑪　メモ（マイセンテンスの補足）		
異年齢学級では、年齢も、特性も、バックグラウンドも、様々な児童と生活を共にする。そこでは、「違う」ということが当たり前になっている。同質性を求めるがゆえの排除が起きないため、自分らしくいられる場所であるといえる。違うことによる差別がないので、安心感があり、対等である。特徴や得意に応じて、役割分担がなされる。		

3.2 PartⅡ 側面（実例）からパターンを見つける

データを読み込み、子どもたちが書き出した経験を「実例」として抜き出し、105 の実例が得られた。これらの実例の類似性を見つけ、グループ化を行い、グループを一文で表す「パターン文」を作成した。得丸（2016）の「実例シート」「パターン抽出シート」「交差シート」を基に、スプレッドシート上でパターンの抽出を行った。パターンは全部で 10 に分けられた。シートの一部を一例として示す。

表 2
パターン抽出シートの例

No.3　人間関係に淀みが生まれる。（8）
8　ちょっときびしいばしょ、たくさん話し合いをするばしょ、たくさんきょうりょくしているばしょ、もうちょっとなかよくしたいばしょ 17 りそうは仲よくていつでもわらっていられるところ。でも今の D1 はみんないつもおこったりして仲がよくないと思う。 67 5 年生はずっとせかきれて混沌としている。 68 時間通りに回らず結局いやな気持ちで終わる。 69 みんながびしっと終わるようにしようと大変だった。 70 レクでみんながやなきもちになった。 71 劇ではみんながまとまらず結局意味わからなくなった。 72 泣いていたりふざけたりしている人がいると、話やレクがまとまらないし、悲しい結果になってしまう。（略） 103 レクがおもしろくなかった。みんな話を聞かなかった。

No.9　個性が認められる一人一人が輝ける居場所　（6）
14 クラスとはちがって、異学年で様々な個性があり、まとまりはないけど、いざという時にチームワークが発動できる。そしてなにより、それぞれの個性が発揮できるような場所だと思う。 87 個性あふれる明るいホーム 88 ホームとは、みんなの個性があふれるカラフルなすてきな世界だと思います。笑顔はホームをよくする鍵だと思います。 11 みんながかがやく場所。様々な意見を取り入れるみんなが笑顔になれる場所 86 カラフルで笑顔な楽しいホーム

それぞれのパターン文を前半後半に分け（表 3）、交差を行った。交差とは、それぞれのパターン文を前半と後半に分け、組み替えて新しい文を作ることである。出来上がった交差文がフェルトセンスにどのように当てはまるのかを感じ、「新パターン」を表現した。操作はスプレッドシート上で行い、総当たりで交差を行った。

表 4 で示しているのは、交差文と新パターンの例である。10 パターンを前半と後半の総当たりで 90 回の交差を行い、それぞれの新パターンが得られた。

表 3
パターン文一覧

No.	前半部	後半部
1	多様な人々と	一緒に過ごす

2	対立を乗り越え	解決する
3	人間関係に	淀みが生まれる
4	楽しく安心して	過ごせる場所
5	違いを	受け入れる
6	協力して	仲を深める
7	話し合いをしながら	物事を決めていく
8	役割をもって	責任を果たす
9	個性が認められ	一人ひとりが輝ける居場所
10	異年齢の友達と	行事やイベントを行う

表 4
交差文と新パターン

交差パターン 1×7 パターン 1 前半部 パターン 7 後半部 ［多様な人々と ］［物事を決めていく］ 異年齢学級では色々な学年の友達と物事を決めていく必要がある。それぞれが役割を果たしながら進めていくことができる。 【新パターン】 合意形成は、他者理解から始まる。	交差パターン 2×5 パターン 2 前半部 パターン 5 後半部 ［ 対立を乗り越え］［ 受け入れる］ 一度対立すると、相手は主張をぶつけてくることがある。そこで相手の考えを知り、受け入れることができる。 【新パターン】 対立とは、相手を理解する助けとなることがある。
交差パターン 6×4 パターン 6 前半部 パターン 4 後半部 ［協力して］［過ごせる場所］ 違いがあるからこそ、それぞれが役割を持ち、協力関係が生まれる場所である。 【新パターン】 違いは役割を生み、協力関係を作る。	交差パターン 10×3 パターン 10 前半部 パターン 3 後半部 ［異年齢の友達と］［淀みが生まれる］ 違いは時に人間関係の対立を生むこともあるが、相手を受け入れる態度を育てることにもつながる。 【新パターン】 違いは対立と受容を生む。

交差パターン 2×3 パターン 2 前半部 パターン 3 後半部 ［ 対立を乗り越え］［淀みが生まれる］ 対立を乗り越えてもなお、淀みを持ったまま過ごしている。 【新パターン】 対立を乗り越えた先にも淀みが残る。	交差パターン 8×9 パターン 8 前半部 パターン 9 後半部 ［役割をもって］［一人ひとりが輝ける居場所］ 個性に応じた役割を持つことで、より個性が引き出される。 【新パターン】 役割は個性の強味を生かす。

3.3 PartⅢ理論構築

パート 3 では、「用語選定シート」「用語関連シート」「用語探索シート」「用語組み込みシート」「骨格文・結果文シート」「結果パターンシート」（得丸, 2016）を使用し、理論構築を試みた。

まず初めに、パート 2 までの分析過程で経たデータを読み、フェルトセンスを感じ直しながら現時点での”感じ“を記述し、用語選定を行った。フェルトセンスと照らし合わせながら、用語は「淀み」「受容」「相互作用」の三語を選んだ（表 5)。記述内容は以下の通りである。

個性が受け入れられ、認められ、生かすことができる場所は、違いのある関係性ができた集団の中である。そこには安心感が必要で、安心感があれば、自分を押し殺さずに自分の意見を言うことができる。そして自分を出すことは相手を理解することの第一歩である。そこには対話があり、その相互作用によって個性は際立ち自己理解にもつながる。個性が出るようになると、役割ができる。その役割は個性を輝かせるものである。

異年齢学級は、違うことが当たり前であるが故に、違いが気にならない。この気にならないというのは、他者への無関心でいられることもあれば、攻撃や排除、差別の理由とせず、受容するということもある。

多様な人々との関わりは、時に対立を生むこともあるが、その対立を乗り越え、合意形成を図るには他者理解が第一歩となる。また、対立をすることによって、お互いの意見をぶつけ合うことで、それが相手を理解する足掛かりとなることがある。しかし、1 年生から 5 年生までの違う年齢の子がいるため、高学年の児童にとって、まとめるのが非常に困難である。その中で人間関係の淀みが生まれることがある。違いは違いを目立たせなくなる一方で、違いによってコミュニケーションがうまく取れず、人間関係が歪んでしまうこともある。自分らしくいられる場所でありながら、合意形成を図ることの難しさもある。また、高学年児童は「まとめなくては」というプレッシャーを感じている側面もある。

次に、選定された語を用いて「〇は〇である」といった文型に当てはめ、関連付けを行う。A と B、B と A、B と C、C と B、C と A、A と C のそれぞれ 6 回繰り返し、気づ

いたことを記述し、重要だと思われる箇所に下線を引いた。この操作を経て、6 つの「有意味文」が表れたところで、論理的関係のある用語群（ABC）が得られたとみなした。「受容」と「淀み」は一見相容れないものに思われるが、「相互作用」において人間関係は受容と拒絶の二者択一で括れるものではなく、相手のすべてを受け入れられるわけではないということがわかる。

表 5
用語関連シート

用語	A：受容	B：淀み	C：相互作用

A B	②意味を考慮せずに、（ ）に用語を記入する。 （受容）は（淀み）である。 ③②で作った文がフェルトセンスを表現するよう文を変形する。「は」と「である」は残す。最低限必要な語句は追加可。 【 受容は 】時に「淀み」を生む（もの）である。 ④相手のことを一度受け入れたとしても、自分の中で<u>納得のできていない部分</u>があり、それが淀みとして残ることがある。
B A	⑤意味を考慮せずに、（ ）に用語を記入する。 （淀み）は（受容）である。 ⑥⑤で作った文がフェルトセンスを表現するよう文を変形する。「は」と「である」は残す。最低限必要な語句は追加可。 【 淀みは 】時に受容を助ける（もの）である。 ⑦人間関係の淀みは、お互いの意見や考え、個性がぶつかって生じる。淀みが生まれるということは、相手の<u>感情</u>をぶつけられるということ。受容は<u>相手を知るとこ</u>ろから始まる。
B C	⑧意味を考慮せずに、（ ）に用語を記入する。 （淀み）は（相互作用）である。 ⑨⑧で作った文がフェルトセンスを表現するよう文を変形する。「は」と「である」は残す。最低限必要な語句は追加可。 【 淀みは 】相互作用から生じる（もの）である。 ⑩人間関係の淀みはお互いが相互作用するから生じるものである。お互いの<u>個性がぶつかる</u>からこそ淀みが生まれる。
C B	⑪意味を考慮せずに、（ ）に用語を記入する。 （相互作用）は（淀み）である。 ⑫⑪で作った文がフェルトセンスを表現するよう文を変形する。「は」と「である」は残す。最低限必要な語句は追加可。 【 相互作用は】淀みができる原因になる（もの）である。 ⑬相互作用をしなければ、人間関係に<u>軋轢</u>は生じない。<u>相互作用は良い方向に作用する</u>こともあれば、淀みの原因になることもある。

C A	⑭意味を考慮せずに、（ ）に用語を記入する。 （相互作用 ）は（受容）である。 ⑮⑭で作った文がフェルトセンスを表現するよう文を変形する。「は」と「である」は残す。最低限必要な語句は追加可。 【 相互作用 は】お互いを受容することを促す（もの）である。 ⑯相互作用をしなければ、お互いを知ることはできない。お互いを知ることは、受容することの第一歩である。
A C	⑰意味を考慮せずに、（ ）に用語を記入する。 （受容 ）は（相互作用 ）である。 ⑱⑰で作った文がフェルトセンスを表現するよう文を変形する。「は」と「である」は残す。最低限必要な語句は追加可。 【 受容は 】相互作用を促進させる（もの）である。 ⑲ひとたび受容をすると、さらなる相互作用が促される。

さらに、「用語探索シート」（表 6）では、上述の語の関連を表す性質を探求すべく、「○は○の性質を持つ」という定型文に当てはめ、その性質がどういったものであるかを内省しながら記述した。その性質を表す語を得られたら書きとるという手順で実施した。用語関連シートと同様、3 語を 2 語ずつ組み合わせ、6 回行った。ここでは、「違和感の残る受容」「流動的」「複雑多岐」「受容と拒絶の狭間」といった新しい語が得られた。

表 6
用語探索シート

用語	A：受容	B：淀み	C：相互作用

A B	②（受容）は（淀み）の性質をもつ。 ③心の底から納得し、相手を認め、受容できることもあれば、どこか受け入れられない要素もあり、それが淀みを生んでしまうことがある。それは違和感の残る受容である。 ④違和感が残る受容
B A	⑤淀みは受容の性質を持つ。 ⑥人間関係の淀みの中から他者を知り、受容につながっていく。淀みは他者を全否定するものではない。淀みの中にも受容できるものがある。 ⑦距離感をつかむ
B C	⑧淀みは相互作用の性質を持つ。 ⑨淀んでいる関係性は、流動的なものである。時に離れたり、近づいたりしている。 ⑩流動的　紆余曲折
C B	⑪相互作用は淀みの性質を持つ。 ⑫相互作用には、正の作用、負の作用どちらもあり、それぞれにグラデーション、多

	面性がある。 ⑬複雑多岐
CA	⑭相互作用は受容の性質を持つ。 ⑮相互作用によって受容されることもあれば、拒絶されることもある、その中間で淀みを抱えたままの関係性になることもある。 ⑯受容と拒絶の狭間
AC	⑰受容は相互作用の性質を持つ。 ⑱受容は他者がいて初めて成り立つものである。そこには相互作用がある。違いのある集団は「できないこと」を目立たせなくする。それは時に受容を促す。 ⑲目立たない

その後、前項で得られた語を基に、用語を選びなおした。「用語組込シート」では、初めに用語 OPQ を選びなおし、ここまでのステップで気づいたことを O を主語とし、PQ を含む文で表現する。また、同様の意味を表現する P を主語とした OQ を含む文、Q を主語とした OP を含む文を用語を組み入れながら作成し、用語数と同じ数の文セットを得る。これらと同じ意味になるよう、用語 R を挿入し、加えて用語 R を主語とする同義の文を表現し、4 つの文セットを得る。この手順で S～U までの用語を一つずつ増やし、最終的に 7 文からなる文セットが得られた。

表 7
用語組込シート

用語	O：淀み　P：流動的　Q：違いが目立たない R：受容 S：違和感 T：複雑多岐　U：距離感をつかむ
OPQRSTU文セット	㉒（距離感をつかむ）という営みは、「複雑多岐」な関わりの中で行われるものであり、それは「流動的」な「淀み」を生み、「違和感」のある「受容」をもたらすことがある。
	㉓（淀み）は、「流動的」なものであり、「複雑多岐」な関わりの中で人間関係の「距離感をつかむ」。それは時に「受容」をもたらし、それは「違いを目立たなくさせる」ものであるが、心の中に「違和感」を残すものである。
	㉔（流動的）は、「淀み」の不安定さ変化しやすさを表しており、その「複雑多岐」な関係性の中で相手を知り、「距離感をつかみ」「受容」につながっていく。結果として「違いを目立たせなくする」ものであるが、「違和感」が生じるものでもある。
	㉕（違いが目立たない ）は、「流動的」な「淀み」からもたらされるものであり、お互いの「複雑多岐」な関係性によって相互理解を図る中で「距離感をつかむ」ことができるようになる。しかし、それは完全ではなく「違和感」を残したままの「受容」

	を促すものである。
	㉖（受容 ）は、「流動的」な「淀み」のある関わりの中からも生まれるもので、相互理解を図っていきながら「距離感をつかんで」いく過程でなされる。それは「違いを目立たなく」させるものであるが、その関係性の「複雑多岐」さ故に、「違和感」を残してしまうこともある。
	㉗（違和感）は、「流動的」な「淀み」の中に存在し、「複雑多岐」な関係性によって生まれた「受容」の中に残り続けるものである。それは「距離感をつかむ」過程の中で生じてくるものである。
	㉘（複雑多岐）は「流動的」な「淀み」そのものであり、「違和感」のある「受容」はその一つである。「距離感をつかむ」ことは、これらのプロセスの中で獲得していくもので、相互理解にもつながっていくものである。

４．結果

前項の用語組込シートで得られた文の中から、最もよくフェルトセンスを表している文を選び、骨格文とした。骨格文は『「受容」は、「流動的」な「淀み」のある関わりの中からも生まれるもので、相互理解を図っていきながら「距離感をつかんで」いく過程でなされる。それは「違いを目立たなく」させるものであるが、その関係性の「複雑多岐」さ故に、「違和感」を残してしまうこともある。』とした。

この骨格文に具体性を持たせ、より明確にしたものが結果文となる。結果文は『異年齢学級における子どもたち同士の関わりは、常に「流動的」で、時には対立して不仲になることもあり、「淀み」を生んでしまうが、対立を乗り越え、相手を理解して「受容」する態度も身につけることができる。その関わりの中から色々な年齢、国籍、特性、役割の子たちと「距離感をつかんで」いくことで、人との付き合い方を学んでいく。 この多様さは「違いを目立たなく」させ、できなさや独特さを目立たなくさせるが、同時に「複雑多岐」な性質も持っている。どのような相手でも完全に受け入れることや集団としてまとまりをもつことが難しく、個々の中に「違和感」を持ったまま過ごすこともある。』となった。

この結果文を意味のまとまりごとに分割し、文末を整えた文を「結果パターン」と呼ぶ。結果パターンは以下の通りとなった。

（No.1）異年齢学級における子ども同士の関わりは流動的である
（No.2）時には対立し、人間関係に淀みを生む。
（No.3）相互理解を図る中で相手との距離をつかみ、対立を乗り越えて相手を受け入れる。
（No.4）多様な人々とのかかわりが、違いを目立たなくさせる。
（No.5）異年齢学級の中の関わりは、複雑多岐な性質を持つ。
（No.6）相互作用によって、個々の中に「違和感」を残すことがある。

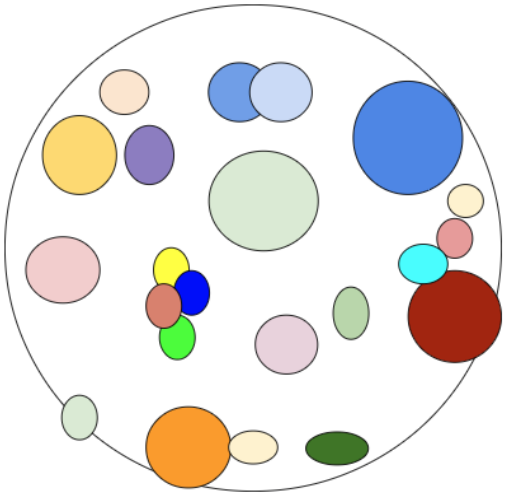
パート 2 で立ち上げた実例データをこの結果パターンに当てはめ、「パターン抽出シー

ト」とは別の新しい実例グループ（パターンクラスター）が得られた。データに戻って再びフェルトセンスと照らし合わせて考察することで、結果文がより精緻なものとなる。実例のグループを分ける作業をしながら、別の側面が切り出された。ここで気づいたことを記述したものが表８の結果パターンシートである。

表８　結果パターンシート

結果パターン No.（１）異年齢学級における子ども同士の関わりは、流動的である
異年齢学級における流動性とは、それぞれの関係性の浮き沈みだけでなく、時程の複雑さ、多様な活動を行うことも同時に示している。集団としても関係性はもちろん、気持ちの切り替えや変化、役割の変化、出来事の流れ、できることの多さなども見られる。
結果パターン No.（２）時には対立し、人間関係に淀みを生む。
仲が良いと言っている子が多い中、関係性が良くないと感じている児童が一定数いた。その多くが４・５年生の中からの意見であった。多様であるが故に意見や考えも多岐に渡り、まとめるのが困難であった。上級生にとってはまとめるという仕事を自然に担わされ、集団としての機能をうまく果たせないことへの葛藤や怒りが綴られている。
結果パターン No.（３）相互理解を図る中で相手との距離をつかみ、対立を乗り越えて相手を受け入れる。
みんなで意見を出し合い、決め事をする中で、合意形成を図る経験をしてきた。この経験から、相互理解を促され、関係性の構築がなされた。役割分担もなされ、上級生は下級生の面倒を見る、得意な領域で活躍するといったようなことも見られた。
結果パターン No.（４）多様な人々とのかかわりが、違いを目立たなくさせる。
1 年生から 5 年生までの学級は違うことが当たり前で、容姿や年齢、国籍、特性、机の高さや道具などすべてが違う。ここでは同質性を求めるが故の排除が行われない。個性が受け入れられ、認められ、自分の居場所ができるという感覚がある。人と違うことで悩むということがなくなる。
結果パターン No.（５）異年齢学級の中の関わりは、複雑多岐な性質を持つ。
異年齢学級には多様性や楽しいイベントなどの良さもあれば、関係性を築くことが難しいという様々な性質を持っている。良い悪いの二面性が括れるものではなく、そこにはグラデーションが存在する。多様な人がいることで、関係性も複雑になる。
結果パターン No.（６）相互作用によって、個々の中に「違和感」を残すことがある。
楽しく過ごすはずのところが、できないことがある。それぞれの相互作用の中で、関係性が上手くいかずに、「違和感」が残ってしまう。その違和感には先があり、解決に向かうこともあれば、良くない思い出として残り続けることもある。その後の関係性にも影響するものである。

図１
図解シート



図解シートでは、ここまでの分析で得られた結果を図で表した。図の説明は以下の通りである。

異年齢学級は複雑で、流動的である。個性を認め、上手く関係性を築けている子もいれば、中心になり努力をしているのに、かえって孤立してしまうこともある。もう少しで外に出てしまう子もいる。グループ化されることもあり、いろいろな子と適度な距離感を保っている子もいる。その関係性は常に流れており、離れたりくっついたりしている。異年齢学級は「違うことが当たり前」である。学校の特性上、国籍や文化も豊かであるが、小学生の発達段階において、学年の差というものは、大きな違いがあり、同学年学級以上に多様性のある環境を作ることができる。「多様性の尊重」という意味でインクルージョンを達成できている側面もあれば、「ただ色々な子が同じ空間にいて、無関心、距離をとっているだけ」ということもある。

５．考察

TAE ステップを通して、テキストマイニングにおいて数値としては見過ごされていたデータに向き合うことができた。異年齢学級の振り返りのテキストマイニングでは、概ねポジティブな意見を持っている児童がいることが示唆されたが、「違和感」や「淀み」を抱えたまま一年間を終えた児童も複数名見られた。

異年齢学級は複雑で、流動的である。学年に関係なく、得手不得手によって役割分担をしていることもあれば、上級生だからという理由でまとめ役を担わされることもある。そこに逃げ場はなく、関係性を上手く築けずに「淀み」を生む。違いすぎることが、集団として機能することを困難にしている側面がある。

しかし、違うことが当たり前であるがゆえに、違いを排除せず、すべての児童に居場所があり、個性を認め受け入れるような発言や記述も多く見られた点においては、インクル

ージョンが達成できているといえる。実際に、同年齢での学習が苦手な子や、反対に学習が進みすぎている子は異年齢学級を居場所と感じている児童も見られ、多くの児童のアクセスも促されている。

一方で、違いが気にならないということからは、「無関心でいられる」という安心感と危機感を同時に感じる。攻撃されずに自分らしくいられるという点では安心感があるが、「よそはよそ、うちはうち」「人それぞれだから」という発想は、衝突を避けることはできるが、分断を生みかねない。心の中に違和感や淀みを抱える児童が一定数いるが、大きな軋轢が生じていないのは、悲嘆や怒りの他にも諦念といった感情があるからではないか。小集団ごとにそれぞれやりたいものをやる、というのはセグリゲーションの考え方に近い。「やりたくなければ、やらなくていいよ。」は相手を尊重していると言えない。かと言って無理に同じものをさせることは本末転倒で、できる方法や役割で参加することが重要である。

異年齢交流はインクルージョンを実現するための一つの要素となり得るが、リレーションやアタッチメントの形成といった点では再考の余地がある。多種多様な人が共にいるだけの空間はインクルージョンとは言えない。

昨今では、同年齢学級において、様々な学習者が学習にアクセスするための柔軟なカリキュラムの設計や、学習方法がとられるようになった。合理的配慮はその一例で、障害や特性によって学習の積み上げが妨げられるということは改善されつつある。異年齢学級では、学習で見られる認知能力だけでなく、コミュニケーション能力、社会性スキル、対応力、メタ認知、クリエイティビティ、セルフコントロール、セルフマネジメントなどの非認知能力が求められている。異年齢学級の複雑多岐さはこういった必要とされる能力の多様さからも表れていると言えよう。異年齢の活動では、多くの行事や学校生活での関わりなど、「きっかけ」は多くあるものの、こういった能力を育むカリキュラム策定や具体的な方策を十分に吟味しておらず、結果として活動への円滑な参画が阻害されている場面があると考えられる。インクルージョンを促すための要素はそろっているため、こういった点を考慮しながら、より効果的なインクルーシブ教育を実現するための環境づくりを行う必要がある。

６．今後の展望

多様性を尊重し受容する態度を育むうえで、1 年生から 5 年生までの学級集団という環境は、一定の効果が得られると考えられる。一方で複雑すぎる環境設定でもあると言える。特に高学年はこの複雑な学級をまとめる役割を担わされ、ある意味で逃げ場がない。「上級生だから」という価値づけがなされてしまい、その児童の持ち味が損なわれてしまう。

そこで、異年齢学級における学級経営では、役割分担をより柔軟に行う必要がある。学年ではなく、得手不得手によって分担を行われなくてはならない。また、インクルージョンを阻害する「無関心」に対応するためには、適切なリレーションを形成するための具体的な手立てが必要である。

非認知能力を育むためには、異年齢学級においてどこでどのように使われているのか、さらなる考察が必要である。IB では Approaches to Learning で学習者に求めているスキ

ルが明示されているため、ただ一緒に過ごす、遊ぶではなく、ゴールを決めた上で目標に対する自分の立ち位置をメタ認知するために活用ができる。ゴールや具体的な活動、方法など、能力を養うためのカリキュラム策定、また児童のバリアを特定し、すべての児童が参画ができる環境作りを行っていくことが今後の課題である。

また私立学校のインクルージョンという点も検討の余地がある。私立学校は入試があり、学費を払えることが前提であり、特にIBでは高難易度の課題が課されることから、全員が等しくその教育を受けられるわけではない、限られた範囲のインクルージョンとなる。限られた範囲とは言え、私立学校におけるクラスルームの中もまた多様である。女子校であっても子どもたちが持つ性質は様々である。伝統校であれば受容的なコミュニティ、公立校にはない連帯感などもあると考えられる。私立学校でどのようにインクルーシブ教育を実施していくかが、筆者の課題でもある。

淀みや違和感には“先”がある。淀みや違和感は解決に向かうこともあれば、抱えたまま過ごしていくということもある。その時間は様々で、遠い未来に糧となることもあれば、乗り越えた経験が役に立つこともある。決して淀みや違和感は排除すべき概念ではなく、学習者の成長を助け、より前へ進むための原動力になると考える。

参考文献

赤木和重（2017-2021）.「異年齢教育による障害の「不可視化」機能：インクルーシブ教育の新次元」科学研究費助成事業 研究成果報告書

中央教育審議会（2021）.「『令和の日本型学校教育』の構築をめざして」（答申）

得丸智子・小林浩明（2016）. TAE リフレクション（ウェブサイト）. http://gen.taejapan.org（2024 年 3 月 4 日最終閲覧）

得丸さと子（2008）.『TAE による文章表現ワークブック―エッセイ，自己 PR，小論文，研究レポート…，人に伝わる自分の言葉をつかむ 25 ステップ―』図書文化社.

得丸さと子（2010）.『ステップ式質的研究法―TAE の理論と応用―』海鳴社.

ユーザーローカル テキストマイニングツール（https://textmining.userlocal.jp/）2023.4.6 使用

Gendlin, E. T. (2004). What is TAE? Introduction to “Thinking At the Edge.” *The Folio*, *19*, 1–8.

IBO (2018). The learner. International Baccalaureate Organization.

【倫理的配慮】

本研究は、個人情報および倫理面に配慮し行った。発表と掲載について、学校長の同意を得た。また利益相反関係はない。

【実践報告】

ドラマのシーンと挿入歌で TAE
―フェルトセンスからのイメージの展開―

佐東香織

キーワード
TAE、ドラマ、テーマ決め、マイセンテンスシート、全体構成のイメージ図

１．はじめに

1.1 TAE との出逢い

2021 年のフォーカシング協会の集いがコロナ禍となり、オンラインでの開催となった。その時に、初めて TAE を知った。

それがきっかけとなり、他日のオンラインでの講座のワークに参加できた。講師による TAE ガイドでのワークで、初めてマイセンテンスをみつけることができた。その時の体験は、自分の身体の内側の感覚が浮かび上がってきて、言葉となって紡ぎ出されるようだった。今でも鮮明に思い出せる程、優しく研ぎ澄まされていくような喜びを感じた。

そして、秋からのパーソナル講座に直ぐに申し込みをし、TAE に取り組むようになった。

２．テーマ決め

2.1 ドラマからのテーマ決めの経緯

2.1.1 困難だった初めてのテーマ決め

初めてのテーマ探しは、どうしてそんなに大変だったのだろうかと思う程、私にとっては困難だった。自分が表現したいけれどもしてこなかった内容にするか、他者に伝えたいけれども上手く伝えられないことにするかを、どちらも譲れずにずっと迷っていた。

そして、そのすり合わせができるテーマをみつけた 2022 年春から、ようやく書き始めることができた。パーソナル講座がスタートしてから、約半年後のことだった。

2.1.2 NHK の朝の連続ドラマをテーマとして取り組んだメリット

ドラマをテーマにしたことによって、TAE をすることが、日常の感動を楽しむことと地続きとなった。前向きで賢明な内容が豊富な NHK の朝の連続ドラマは、日々生きていく中での大切なことを教えてくれる感じが好きで、何年間も習慣的にみていた。

つまり、NHK の朝のドラマをテーマとすることで、TAE が伴奏のように日々に寄り添ってくれたり、調律のように行く手を取り戻してくれたりした。また、優しい人生の補助線となってくれた。

2.1.3 ドラマの中に、心から焦点化していきたい部分がみつかったことについて

１つのテーマに関わっていくうちに、自分にも作品にも向かい合う時間を定期的にとるこ

とになった。また、テーマの中のある部分に心から焦点化していきたくなったり、作品と自分の体験との交差を感じるようになったりした。

このドラマの中には、特別な歌がでてきた。様々な場面でいろいろな登場人物が歌ったり演奏したりした。喜怒哀楽の挿入歌としても使われた。どのシーンも素敵だが、111 話のシーンが書きたいと強く思ったのは、パート 1 が書けてからのことだった。

2.2 テーマの 111 話のシーンについて

2.2.1 テーマのシーンの説明

2021 年秋から翌年の春にかけて、NHK 朝の連続ドラマ「カムカムエブリィバディ」が放送された。今回のテーマは、111 話であり、娘が母に 2 人にとっての特別な曲を、歌う場面だった。

わだかまりを最後に仲違いのまま行方知れずになった母と娘が､約 40 年ぶりに再会した。大勢の前で歌う大人になった娘（るい）が、突然現れた母（安子）に思いを込めて歌った。それは、娘が、過去の混乱の中で「I hate you.」と母に言ってしまった後悔を胸に、「I love you.」と時を超えて言い直すことができた、親子の和解のシーンだった。

2.2.2 テーマにこのシーンを選んだ理由

娘（るい）が歌う 2 分弱の短時間で、親子の長年のわだかまりが溶けていくシーンに感動した。自分なりの言葉で語れるようになりたいと強く思い、このシーンをテーマに選んだ。様々な登場人物がいろいろな場面で On the Sunny Side of the Street を歌った。111 話の娘が母に歌うシーンは特別で、今までのどの場面とも時間軸や喜怒哀楽が繋がっているような、味わい深さを感じた。ドラマの最終回を見終わった感動から言葉が思い浮かび、マイセンテンスシートに直ぐに書くことができた。

３．パート１

3.1 マイセンテンスシートの作成

3.1.1 直ぐに取り組めたマイセンテンスシートの作成

ドラマの最終回の余韻が残っている中で、フェルトセンスを感じることができた。それによって、マイセンテンスシート作成に楽しく取り組め、作品理解へと繋がった。

3.1.2 浮かんでくる語句とテーマ

手順②で浮かんでくる語句は、自分のフェルトセンスにピッタリとした言葉だったが、このドラマ全体からの漠然としたものでもあった。

パート 1 のマイセンテンスシートが書けた後で、111 話で、娘（るい）が母（安子）に「On the Sunny Side of the Street」を歌うシーンを、手順①のテーマとして書きたいと強く思った。そこで、このシーンにもピッタリのフェルトセンスになっているかを、何度も感じてみては確認した。ドラマ全体にもテーマのシーンにも繋がる、浮かんでくる語句として、フェルトセンスがピッタリと馴染んだ。再考を重ねることが作品理解を深めた。

3.1.3 仮マイセンテンス・キーワード・拡張文・マイセンテンスの作業手順の豊かさ

浮かんでくる語句から、仮マイセンテンスを作り、仮マイセンテンスの空所にキーワードを入れ、マイセンテンスを作っていく作業手順を理解することにより、フェルトセンスからの言語表現を豊かにしてくれた。

また、キーワードの通常の意味と、フェルトセンス独自の意味を書く丁寧な作業が、感覚を大事にすることや、語彙の意味を理解することに繋がった。

3.1.4 マイセンテンスの補足説明を書くことの楽しさ

他の人にも理解できるように考えながら、マイセンテンスの補足説明を書くことが、ここまでの内容理解に繋がった。マイセンテンスシートに書いた中から語彙を選び文章にし、何度も書き直し、この作品のシーンから伝わる何かを、自分の言葉で表現することができた。

表 1

マイセンテンスシート

<table>
<tr><td colspan="3">①テーマ　＊テーマを１つ選び、「この感じ」としてもつ。下に事柄をメモする。
NHK 朝の連続ドラマ「カムカムエブリィバディ」の 111 話で、娘（るい）が母（安子）に「On the Sunny Side of the Street」を歌うシーン</td></tr>
<tr><td colspan="3">②浮かんでくる語句　＊「この感じ」のフェルトセンスに浸りながら書く。
素材の味、陰と陽、生きる力、バランス、原動力、秩序、セッション、あなたらしさ、一緒…
＊大切な語、数個に下線を引く。</td></tr>
<tr><td colspan="3">③仮マイセンテンス＊フェルトセンスを短い１つの文にする。語も文型も自由に作る。
原動力は、あなたらしさと素材の味…
＊最も大切な語句に二重線を引く。</td></tr>
<tr><td colspan="3">④空所にある文　＊仮マイセンテンスの 2 重線の部分を空所にした文を書く。
原動力はあなたらしさと（　　）
＊空所に入る言葉をフェルトセンスから呼び出す。</td></tr>
<tr><td colspan="3">キーワードの通常の意味と、フェルトセンス独自の意味を書く。</td></tr>
<tr><td>⑤キーワード１
素材の味</td><td>⑥キーワード２
タイミング</td><td>⑦キーワード３
突破力</td></tr>
<tr><td>⑧通常の意味
素質・素養・可能性</td><td>⑨通常の意味
適切な時期・瞬間</td><td>⑩通常の意味
困難を克服する力</td></tr>
<tr><td>⑪フェルトセンス独自の意味
素朴でコクのある風味…</td><td>⑫フェルトセンス独自の意味
グッとくる…</td><td>⑬フェルトセンス独自の意味
五感に響く…</td></tr>
<tr><td colspan="3">＊大切な語、数個に波線を引く。</td></tr>
<tr><td colspan="3">⑭拡張文を書く　＊空所に、すべてのキーワードと波線の語を並べた文を書く。
原動力は、あなたらしさと（　　）
素材の味、素朴でコクのある風味、タイミング、グッとくる、突破力、五感に響く…</td></tr>
<tr><td colspan="3">⑮マイセンテンス　＊フェルトセンスを短い１つの文にする。語も文型も自由に作る。</td></tr>
</table>

素材の味にグッとくる
⑯マイセンテンスの補足説明　＊他の人にも解りやすく説明すること。 ここでいう素材とは、あなた自身のことだ。味とは、日常の鍛錬のことや、大事にしているあなたらしさの軸のことだ。繰り返し身につけたことが素養となり、必要なタイミングにグッと五感に響く。それは、絶体絶命の時の、突破口となった。 111 話で娘（るい）が母（安子）に歌う場面に、これまでの生き方が問われるような原動力からの生きる力を感じた。

４．TAE の全体構成イメージを非言語表現で掴み取る

4.1 フェルトセンスを図で表現しながらの言語化

最初のテーマ決めに、数か月かかった。パート１は比較的直ぐに書けたが、パート２は進めるのが困難だった。そこで、フェルトセンスを感じてみたら、イメージが浮かんできた。

また、『ステップ式質的研究法 TAE の理論と応用』（得丸、2010、P38-39）の図 7.TAE ステップの全体構造のイメージを、何度も眺めては、フェルトセンスを感じてみた。そして、パーソナル講座の講師のお話や皆様の発表、ドラマと挿入歌を思い出しては、フェルトセンスを感じてみた。

するとイメージがよぎってきたので、図に表現してみたくなった。それで、パート１が終わったところで感じた、創作動画ができあがった。

その後、パート 2・パート 3 についても、イメージ図の作成と言語化を繰り返すことで、表現を深めることができた。

各図には、対応する TAE のパートやステップとその説明をつけた。それは、『ステップ式質的研究法 TAE の理論と応用』（得丸, 2010, pp. 34–36）のオリジナル TAE の見出しや、14 ステップの流れなどを参考にしながら記載してある。

4.2 TAE 全体構成イメージの動画の作成と展開

4.2.1 イメージ動画作成からの言語化の利点

展開図を詳細に作成することで、図や動画にする際に確認した具体的な内容の理解が深まった。その利点としては、感覚を言葉にする際にハンドルとなるような、手掛かりの当たりが付きやすくなり、フェルトセンスからの表現が前よりも短時間でできるようになった。

4.2.2 イメージ動画作成からの展開

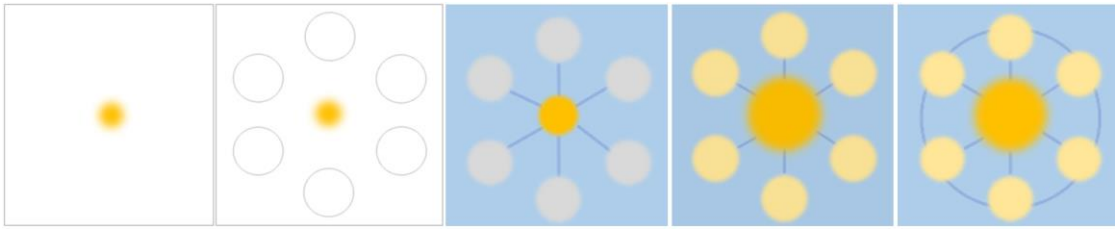
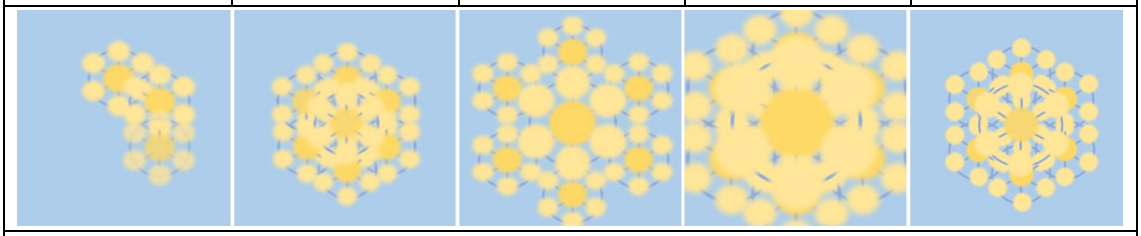
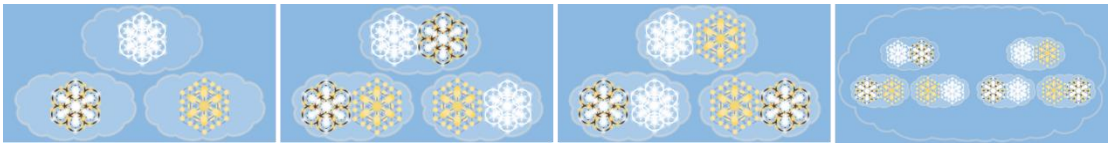
創作動画で表現できたことが突破口となり、最初は言葉にしにくかったパート 2 やパート 3 が書けた。以前より、言語・非言語に関心がもてるようになり、表現の幅が広がった。

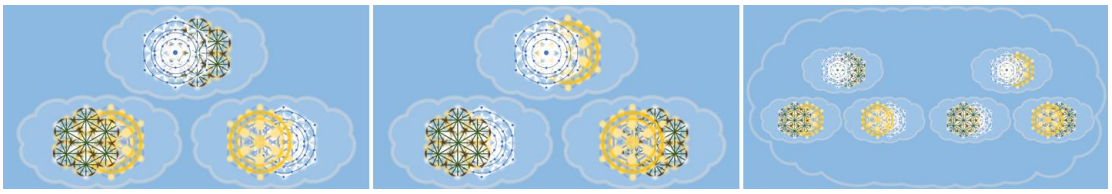
そして、自分自身の独特な捉え方に親しみを感じるようになった。それが、自分らしさを大事にすることに繋がり、落ち着いて感覚に浸れる時間が多くなった。

TAE のある日常が、あたたかで穏やかな変化へと私を導いてくれた。表現できたことで腑に落ち、スッキリとした気持ちになった。また、今回のテーマに関する、フェルトセンスからの語彙が増えた。それは、歌の歌詞に感情がのるような、思いのこもった言葉となった。

表 2

パート 1-3.ステップ 1-12 前半の TAE ステップのイメージの展開図とその説明

パート 1　ステップ 1-5　フェルトセンスから語る。				
ステップ 1	ステップ 2-3	ステップ 4	ステップ 5	
フェルトセンスに注意を向けるイメージ。	浮かんだ語句を書き始めるイメージ。	仮マイセンテンスをみつけた、イメージ。	マイセンテンスを見つけた、イメージ。	マイセンテンス補足説明の短い文のイメージ。
				
パート 2　ステップ 6-8　側面からパターンをみつける。				
ステップ 6	ステップ 7	ステップ 8		ステップ 9
側面を集めるイメージ。	側面の詳細構造にパターンをみる、イメージ。	集めたパターンの側面を交差させるイメージ。	気づいたことが拡散するイメージ。	思ったことが言葉でまとまってくるイメージ。
				
パート 3　ステップ 10-12 前半　理論構築により、暗在的な知性を精緻化する。 （※パート 3 は、ステップ 10-14 ステップまである。この動画では、構造体としての骨格の概要ができあがる、パート 3 ステップ 12 前半までのイメージの展開図を表現した。）				
ステップ 10				
ABC とタームを選ぶイメージ。	である文シートで相互に関係づけ、論理を立ち上げ気づきをメモするイメージ。 (A=B・B=C・C=A・C=B・B=A・A=C)			ABC と重要なタームを出てきた順に書き出すイメージ。
				
ステップ 11				
もともとシートで本来的関係を探求し、論理を立ち上げ、気づきをメモするイメージ。 (A,B・B,C・C,A・C,B・B,A・A,C)				ABC と重要タームを出てきた順に書き出すイメージ。



ステップ 12 前半

これまでのステップを振り返り、OPQ とタームを選び直した。概念組み込みシートで用語を組み込み、OPQ の構造体となる。そこに、新ターム R を加え、更に組み込む。
組み込んでは新タームが加わり、更に組み込むイメージ。
タームが増え、より構造体になり、理論構築が精緻化するイメージ。
加えたいタームがなくなったら、理論化作業を終了し、タームが概念となるイメージ。

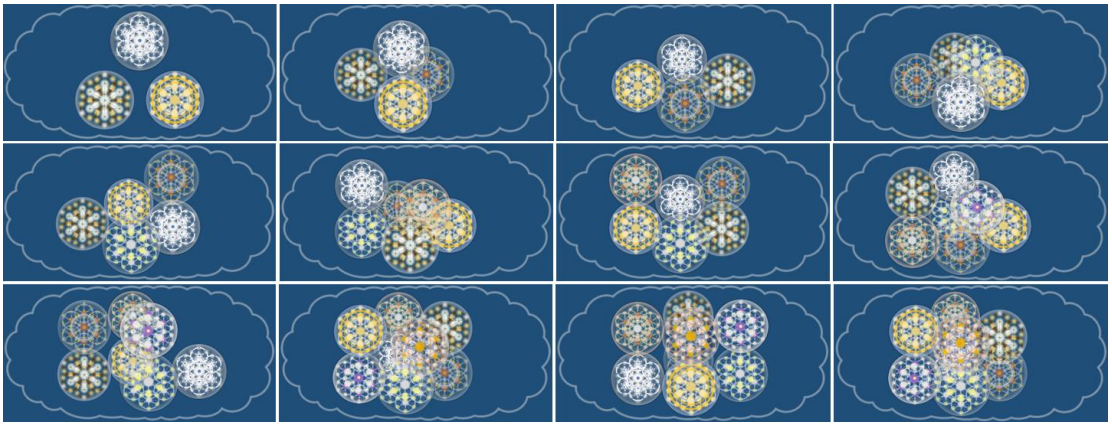


表 3

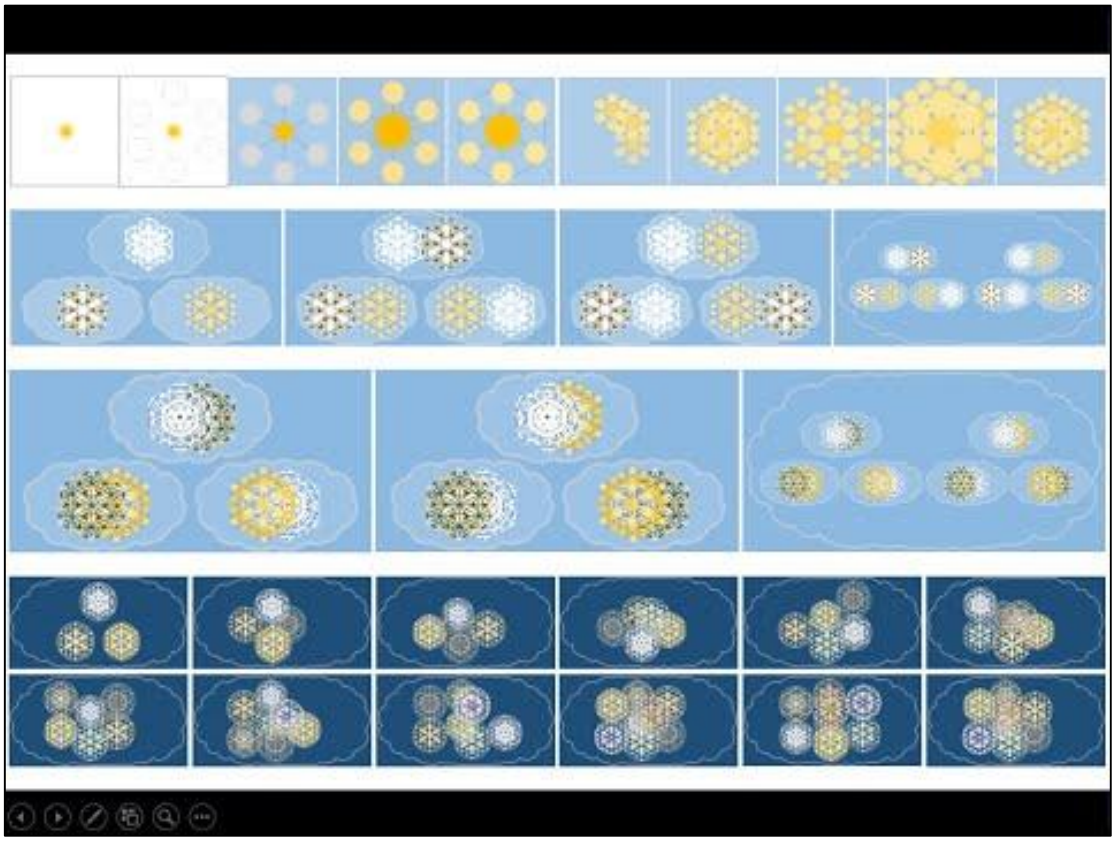
図や動画にする際に確認した具体的な内容

① ほのかなフェルトセンスから、象徴化⇒デザイン化⇒シンプル化する際にしたこと					
動画を繰り返し観て、フェルトセンスがピッタリくるまで書き直し、試行錯誤した					
② 図や動画に表現する際に気をつけたこと					
詳細内容	動き	全体の流れ	色	質感	コントラスト
	動きの方向性 緩急スピード	展開する 循環する	モノクロ カラー	ぼかす 際立たせる	背景との明暗 背景との対比
③ 浮かんできたイメージに、具体的な表現として取り入れたこと					
	パート 1・パート 2		パート 3		
具体的なイメージ	水が繋がっていくイメージ	太陽エネルギーのイメージ	雲のイメージ	構造体に新タームが加わるイメージや各タームの表現	
	1 つ 1 つが出現し繋がる動きを表現	陽だまりを表現	フェルトセンスを感じながら、再考する様子を表現	構造体ができたら出現する様子を表現 3 つのパーツを OPQRSTUV ごとに作成し、組み合わせ表現	

	ぼかしの淡いグレー 水色の線	ぼかしの淡い橙色や黄色	透明度のある白色 グレーの枠線	ぼかしや透明度や線の太さを変え、白・青・緑・黄・橙・赤・茶・紫・桃・肌色などを組み合わせる
背景	近い距離	離れた距離	ステップ 12 で、論理構築から概念構築に変わる、ABC を OPQ タームに捉え直す場面	
	内観を表現	空を表現	空の奥にある遠い空を表現	
	白色（透明色）	水色（空の色）	紺色（宇宙の色）	

図 1

パート 1-3.ステップ 1-12 前半の TAE ステップのイメージ図の展開動画



謝辞

本稿は、TAE 研究会主催のパーソナル講座にて、得丸智子先生にご助言を頂きながら、作成した。また、講座の皆様で作っていくような TAE 研究会の学び場が心の拠り所となったことで、継続的に安心して創作することができた。心からの敬意と感謝をここに表する。

参考文献

得丸さと子（2010）.『ステップ式質的研究法―TAE の理論と応用―』海鳴社.

【実践報告】

言葉を大切にすること—小説『山月記』に対する生徒の感想と教師自身の感想との交差から得たこと—

佐藤聖子

キーワード
言葉、授業、存在

１．はじめに

これまで「生徒一人ひとりの言葉を大切にする授業をしたい」と考えてきた。それは、勉強の苦手な子ども、発言できない子どもなど一人ひとりの声を拾いたかったからである。特に心がけてきたことは、授業中に扱った作品（教材）について、その都度、感じたことや考えたことを生徒一人ひとりに書かせ、教師側の抽出をせず、全ての感想を全員で共有するためにプリントを作成し、全ての感想や発表については良い悪いなど評価的なコメントをしないようにすることである。そのような中、ある授業で気になる生徒の言葉と遭遇した。小説への感想である。その授業で扱った小説『山月記』（中島敦）は高等学校の国語の授業では定番教材で「李徴という主人公がある日虎に変わってしまう」という変身譚である。この話は、一般的に主人公が救われない話としてとらえられることが多い。感想には主人公の経験を自身に置き換えたものが多い。だが、感想の中に「虎になっても友達が気づいてくれた」というものがあった。この言葉が筆者の中から離れないものとなり、その意味を色々と考えてきた。そして、経験の意味を大切にするジェンドリン哲学に出合ったのである。

本稿は、2022 年にジェンドリン哲学に出会った筆者にとって、最初のまとまった TAE である。ジェンドリン哲学については『プロセスモデル』や「TAE」を行う中だけの、狭い知識だが、今後、自身が様々な点においてどう変化していくか、いかないかも含めての記録として報告する。

２．問題と目的

筆者は授業で現れた生徒の感想の意味の答えを「なぜそのような感想が生まれたのか」として様々な概念や理論をもとに考えようとしてきた。それは、問いの答えは外部のどこかにあると考えていたからだ。だが、そのような答えは見つけられる人には見つけることができるけれど、私のような凡人にはどんなに頑張っても見つけることはできないとも思わされてきた。

しかし、ジェンドリン哲学のインタラクションファーストという概念に出合い、自身の経験の意味をしっかり考えていくことで何かが見つかるのではないか、と思うようになった。ジェンドリンはインタラクションファーストについて「相互作用のプロセスはそれが識別

されるようになるはるか以前から存在しているだろう。“それらの”相互影響は、多数になることに先行し、多数になっても続くのである」（ジェンドリン、2023、p.40）と述べている。自身の内部に現れた問いへの答えは自分自身の内部を掘り下げていくことで見つかるのではないだろうか。

さて、筆者が追い求めているテーマは「言葉を大切にすること」である。特に、自身のフィールドである学校という場において、「生徒の言葉を大切にする」とはどういうことかということを授業という枠組みの中からとらえようとしている。したがって、本稿の中心にある生徒の感想も、このような自身の考えと結びついているのではないか。さらに、ジェンドリンの考え方をもとに授業での出来事をとらえるならば、生徒から生まれたその感想は、クラスという枠組みの中の、生徒それぞれ、私の授業、教材、担任としての私という存在…の相互作用によって生じているといえるだろう。したがって、生徒の感想の意味はその場に存在している個々人の中に現れるのではないか。

そのような考えから、授業者である筆者自身について、以下のように TAE を行った。

３．方法

2023 年 3 月に行われた TAE シンポジウムで「辺縁で考えることーある授業との対話より」として口頭発表を行い、その後 6 回 TAE を行った。本稿は、その内容をもとに、2024 年 2 月に実施された TAE パーソナル講座で「小説『山月記』に対する生徒の感想と教師自身の感想との交差から得たこと」として報告したものをまとめたものである。

４．分析過程

4.1 1 回目から 6 回目の TAE について

小説『山月記』（中島敦）の生徒 A の感想「虎になっても友達が気づいてくれた」をもとに TAE を 6 回繰り返した。

【1 回目】「生徒一人ひとりの言葉を大切にする授業」とは大切なことは蓋をされているため伝わらないから気づかない。したがって、気づいてくれたことは必要なこと。「この言葉」が彼女にとって大切な言葉であることに気付いたことが大切なのである。

【2 回目】「生徒 A の言葉の意味」について…ブランクを二つ作って失敗した。

【3 回目】【2 回目】を考えるために、自身の小説に対する感じ方を探った。仮マイセンテンスを「野心家の挫折」した。そこから『山月記』は「自ら守り誰かから守られる物語」であるという言葉が導き出された。この言葉から、先行研究にあるような「救済の物語」なのだろうかという気づきが生まれた。

【4 回目】「山月記のテーマ」とは何かとしたが、交差に納得いかず中断した。

【5 回目】テーマを「山月記の感想」とし『ステップ式質的研究法　TAE の理論と応用』「練習ワーク８　文学ショートワーク」p. 95 を参考にして、仮マイセンテンスを「叫びに込められた冷たく厳格な魂の叫び」とし、理論「関係性を成立させる一つの方法は、存在の言葉に耳を傾けることである。本小説では、友人が主人公の存在に気づき彼の言葉に耳を傾け、人としての関係性を成立させた。だが、そもそも虎となった李徴が言葉を発しなければ

友人は彼に気づくことができなかったのだ」を導きだした。※本稿
【6 回目】【4 回目】「山月記のテーマ」を再開した。「他者に守られるのではなく自分が自分を守るのだ」という言葉が導き出された。

繰り返すことによって見えてきたことは、人は言葉によって関係性を作る。しかし、言葉を発しなければ伝わらず、関係性を持つことはできない。生徒の「虎になっても友達が気づいてくれた」には「虎」になったら人間同士の関係性を持つことはできないため、誰にも気づいてもらえないが、主人公は虎の中にある人間としての存在を友達に伝えようと言葉を発した。「虎になっても」という言葉と「友達が気づいてくれた」という言葉の間には、虎の中にある人間としての存在を友達に伝えようと言葉を発する主人公の姿が含まれている。そのため、この言葉が気になったのではないか、ということである。

4.2 5 回目に行った TAE の記録

『山月記』（中島敦）に対する生徒 A の感想「虎になっても気づいてくれた」の意味を考えるために、筆者自身の『山月記』の感想をテーマに TAE を行った。

ステップ 1-5　フェルトセンスから語る

マイセンテンスシート		
①テーマ　＊テーマを一つ選び、「この感じ」としつてもつ。下に事柄をメモする。		
『山月記』の感想		
②浮かんでくる語句　＊「この感じ」のフェルトセンスに浸りながら書く。		
孤独、悲しみ、冷たさ、青白さ、岩、真面目、博学才穎、叫び、孤高、厳格、後悔、猛獣、魂…		
＊大切な語、数個に下線を引く		
③仮マイセンテンス　＊フェルトセンスを短い一つの文にする。長めの句でもよい。		
叫びに込められた冷たく厳格な魂の叫び。　＊最も大切な語句に二重線を引く。		
④空所のある文　＊仮マイセンテンスの二重線の部分を空欄にした文を書く。		
（　　）に込められた冷たく厳格な魂の叫び。＊空欄に入る言葉をフェルトセンスから呼び出す。		
キーワードの通常の意味と、フェルトセンス独自の意味を書く。		
⑤キーワード１	⑦キーワード２	⑨キーワード３
詩	言葉	対話
⑥通常の意味	⑧通常の意味	⑩通常の意味
文学の一部門。風景・人事など一切の事物について起こった感興や想像などを一種のリズムをもつ形式によって叙述したもの。	ある意味を表すために、口で言ったり時に書いたりするもの。物の言い方。言語による表現。	向かい合って話すこと。二人の人が言葉を交わすこと。

⑪フェルトセンスの意味	⑫フェルトセンスの意味	⑬フェルトセンスの意味
詩人になりたくてもなれなかった人生の回顧。	主人公の正直な内面を表すもの。	親友だからこそ話せること。
＊大切な語、数個に波線を引く		
⑭拡張文を書く。　＊空欄に、すべてのキーワードと波線の語を並べた文を書く。		
（　詩、言葉、対話、詩人、正直、内面、親友、…　）に込められた冷たく厳格な魂の叫び。		
⑮マイセンテンス　＊フェルトセンスを短い１つの文にする。語も文型も自由。		
優しさに触れたから話すことができた自分の苦しい気持ち。		
⑯メモ（マイセンテンスの補足）		
彼はいつも誰かに苦しい胸の内を聞いてほしいと思っていたが、誰にも自分の苦しいと感じている弱さを見せることができなかった。		

ステップ 6-8　側面（実例）からパターンを見つけましょう

パターンシート			
テーマとしているフェルトセンスに関連する場面を抜き出し、パターンを見出す。			
場面		見出したパターン	
場面 1	①冒頭文「隴西の李徴は博学才穎天宝の末年、若くして名を虎榜に連ね、ついで江南尉に補せられたが、性、狷介、自ら恃むところすこぶる厚く、賤吏に甘んずるを潔しとしなかった。」	パターン 1	⑤才能ある者の自負心。（自負＝自分の才能や仕事に自信や誇り持つこと）
場面 2	②第一段落「人と交わりを絶って、ひたすら詩作にふけった。」	パターン 2	⑥孤高の人。（ひとりかけはなれて高い境地にいること）
場面 3	第一段落「詩家として名を死後百年に遺そうとしたのである。しかし、文名は容易に上がらず、生活は日を追うて苦しくなる。」	パターン 3	⑦落胆と挫折。
場面 4	第二段落「どうか、ほんのしば	パターン 4	⑧勇気ある自己開示。

	らくでいいから、我が醜悪な今の外形をいとわず、かつて君の友李徴であったこの自分と話を交わしてくれないだろうか。」		

パターン交差シート＋自由記述				
パターンと場面を交差させる。メモを書き、新しいパターンを見出す。				
	パターン 1	パターン 2	パターン 3	パターン 4
場面1	—	④若くて優秀な彼と話の合う人はいなかっただろう。そのイライラによって人と距離を取るようになり、プライドの高い人物になったのではないか。**新パターン**優秀であるがゆえの孤立。	⑦才能があっても若ければ地方の役人から始まるのは当然ではないだろうか。**新パターン**自分本位の落胆と挫折。	⑩名を虎榜に連ねられることは自信があっても不安だっただろう。優秀だというレッテルをはられたと同じ。優秀だという仮面をつけ続けていたのでは。**新パターン**ガラスの仮面。
場面2	①人と交際すれば誘惑に惑わされてしまう。いくら才能があっても集中できなければその才能を発揮できない。**新パターン**才能ある者のストイックな様子。（自らを厳しく律する様子）	—	⑧詩作のような芸術はさまざまな経験が必要なのではないだろうか。**新パターン**自分本位の孤立。	⑪優秀というレッテルを貼られた彼は仮面をつけていることを見破られることを恐れた。**新パターン**孤高と孤立。
場面3	②最難関の試験には合格したが詩家としての才能はあったのだろうか。生活を犠牲にしてまでその夢追い求めたかったのか。**新パターン**高い自	⑤同年代で周囲に参考になるような人物を見つけることができなかったため、学力以外の創作の世界で自分の実力を知ることができなかった。	—	⑫勇気を出して著名な詩人に教えを乞うこともできたはずだが、生活のために地方官吏に戻るが自尊心が傷つき逃げ出した。**新パターン**言葉に

	負心は時に間違った方向に人を導く。	**新パターン**孤高ではなく孤立。		出さなければ誰も気づかない。
場面4	③同年に最難関の試験に合格した友は自分の気持ちを分かってくれると思ったのだろうか。**新パターン**本当に才能のある者は心に余裕がある。	⑥同年に最難関の試験に合格した唯一の友との再会。友は中央の役人となっていた。**新パターン**二人の人生と性格。	⑨友達自身も落胆しているのではないか。だが、友は挫折したことはあるのだろうか。**新パターン**自分本位の要望。	—

ステップ 9　自由記述メモ	ステップ 9　自由記述
才能ある者のストイックな様子。	この話は孤立した独りよがりの自信家の末路を描いたものといえるだろう。知識をたくさん持っていることと、優秀であることは違う。本当に優秀な人には余裕がある。李徴の優秀さは余裕のないもの。そもそも李徴に才能はあったのだろうか。余裕がないから本心を見せることができなかった。誰にも本心を見せられなかったから誰も気づいてくれなかった。詩人として名をなすにしても人とのつながりは大切。彼には知識人としての才能はあったが、詩人としての才能はなかったのに、そのことを認めなかったために、本当に人と交わることができなくなってしまった。または、本当に詩人として名を挙げたかったのだろうか。本物の知識人ではない。
高い自負心は時に間違った方向に人を導く。	
本当に才能のある者は心に余裕がある。	
優秀であるがゆえの孤立。	
孤高ではなく孤立。	
二人の人生と性格。	
自分本位の落胆と挫折。	
自分本位の孤立。	
自分本位の要望。	
ガラスの仮面。	
孤高と孤立。	
言葉に出さなければ誰も気づかない。	

ステップ 10-14　理論構築

である文シート（タ―ム関連シート１）		
①テーマとしているフェルトセンスを感じ直す。		
『山月記』の感想		
②3 つのタ―ムを選ぶ。＊フェルトセンスの中に大きな三角形を描くつもりで、頂点におくタ―ムを選ぶ。		
A：孤高	B：自分本位	C：ストイック

<table>
<tr><td colspan="3">タームをイコール（「である」）で結びフェルトセンスに合うように加筆する。気づいたことをメモする。</td></tr>
<tr><td>ターム</td><td>形式的に論理的な文</td><td>形式的に論理的で、かつ、フェルトセンスに合っている文。</td></tr>
<tr><td>A=B</td><td>③「孤高」は「自分本位」である</td><td>④「孤高」は「自分本位」にならざるを得ないほど孤独である。</td></tr>
<tr><td colspan="3">⑤若くして難関試験に合格した彼には話の合う友人がいない。そのため孤高にならざるを得ない。そのことが自分本位に見えてしまった。</td></tr>
<tr><td>B＝C</td><td>⑥「自分本位」は「ストイック」である</td><td>⑦「自分本位」は「ストイック」な自分自身を貫くために必要なことである</td></tr>
<tr><td colspan="3">⑧人と交わりを絶って詩作を続ける李徴だが、詩人としての才能があるかどうかにかかわらず、優秀であるという自分自身を貫くためには人と交わるという欲望を捨てる必要があった。</td></tr>
<tr><td>C=A</td><td>⑨「ストイック」は「孤高」である</td><td>⑩「ストイック」に自分の様々な欲望を抑えるには「孤高」となる必要があった。</td></tr>
<tr><td colspan="3">⑪人との交わりを絶つことはストイックなあり方だが、友が言う、彼の詩に何かが欠けているというのは、ストイックなあり方によるもので、人の心を動かす詩を作るにはストイックなあり方は間違っていた。</td></tr>
<tr><td>B=A</td><td>⑫「自分本位」は「孤高」である</td><td>⑬「自分本位」では「孤高」にならざるを得ない。</td></tr>
<tr><td colspan="3">⑭李徴の中にある基準はどのようなものだろうか。難関試験に合格した自分の何を認めて欲しかったのか。優秀であるということを今まで誰からも認めてもらっていなかったのか。</td></tr>
<tr><td>C=B</td><td>⑮「ストイック」は「自分本位」である</td><td>⑯そもそも「ストイック」になろうとすること自体が「自分本位」なのである。</td></tr>
<tr><td colspan="3">⑰きっと彼はストイックであるということ自体が好きなのだ。</td></tr>
<tr><td>A=C</td><td>⑱「孤高」は「ストイック」である</td><td>⑲「孤高」であることと「ストイック」はイコールではない。</td></tr>
<tr><td colspan="3">⑳彼は気高い人物とは言い難いが、協調性を欠く人物ではある。人と交わりを絶つことは欲望を抑えていることにはならない。したがって、彼をストイックと表現したのは誤りである。</td></tr>
<tr><td colspan="3">㉑このシートの作業全体を通じて気づいたことを書く。
私はこれまで、人と交わりを絶つこと＝欲望を抑えることと思い、彼のストイックなあり方のどこが非難されるべきなのか、虎にならなければならないのか、と考えていた。しかし、詩人として名をなすほど素晴らしい詩を作るためには、人と交わりを絶っ</td></tr>
</table>

たことは間違った方法だったのではないかと考えるようになった。なぜなら、人間は、人との関わりの中で様々なことを考えるからである。友の言う、彼の詩に欠けたところがあるとは、そういった人との交わりの中で経験する様々なことが表現できていないということなのではないか。あるいは、彼は人と交わりを絶って、自然とともにあったのだろうか。自然から何かを得、そのことについて詩を書いたのだろうか。しかし、いずれにしても、人と交わりを絶っては詩人として名をなすことはできない。

もともとシート（ターム関連シート２）		
①テーマとしているフェルトセンスを感じ直す。		
『山月記』の感想		
②３つのタームを選ぶ。＊フェルトセンスの中に大きな三角形を描くつもりで、頂点におくタームを選ぶ。		
A：孤高	B：自分本位	C：ストイック
タームを、「～は、本来（もともと）、～である（の性質をもっている）の文にあてはめ、フェルトセンスで感じて気づいたことをメモし、新しいタームを追加する。		
ターム	～は、本来（もともと）、～である（の性質をもっている）	
A, B	③「孤高」は、本来（もともと）、「自分本位」である（の性質をもっている）	
④（メモ）人よりも高い境地にいるためには、自分自身をしっかりと持っていなければならない。自分の理想を貫く。　新しいターム：理想		
B, C	⑤「自分本位」は、本来（もともと）、「ストイック」である（の性質をもっている）	
⑥（メモ）自分の欲求のみにしたがって行動に移すためには自分を厳しく律することが大切である。そうでないとただのわがままだ。　新しいターム：わがまま		
C, A	⑦「ストイック」、本来（もともと）、は「孤高」である（の性質をもっている）	
⑧（メモ）目的を達成するために自分を厳しく律することは孤独であるということだ。　新しいターム：孤独		
B, A	⑨「自分本位」、本来（もともと）、は「孤高」である（の性質をもっている）	
⑩（メモ）自分の欲求のみにしたがって行動に移すことは孤独だが自分の理想の高い境地にいることができる。自分の引き出しが枯渇すると自分の理想は貫けない。　新しいターム：枯渇		
C, B	⑪「ストイック」は、本来（もともと）、「自分本位」である（の性質をもっている）	
⑫（メモ）自分の意志の力で感情を抑制することと自分の欲求のみにしたがって行動に移すというあり方は同じである。自分の意志も欲求も誰も客観的に見ていない。　新しいターム：客観的		
A, C	⑬「孤高」、本来（もともと）、は「ストイック」である（の性質をもっている）	
⑭（メモ）高い理想を持っている彼は孤独だが物事にこだわらずにいられるので目的を達成するために自分を厳しく律していられる。世俗はわずらわしい。		

新しいターム：世俗
⑮タームの書き出し＊A、B、C と新しいタームを出てきた順に書き出す。気づいたことを書く。 孤高、自分本位、ストイック、理想、わがまま、孤独、枯渇、客観的、世俗 （メモ）俗世間からみれば理想を貫こうとする姿は孤高やストイックといった高い境地にいるすばらしい人のように表現されるが、一方で、その姿は自分本位な人やわがままな人という印象を与える。孤独なあり方は自分の考えにのみこだわることで、自分の考え以外の考えや事実をもとにするような客観的な姿勢をどこからも得ることはできず、やがて自分自身は枯渇する。

概念組み込みシート			
①テーマとしているフェルトセンスを感じ直す。			
『山月記』の感想			
②新たなタームを３，４個、選定。＊これらが相互定義されたとき概念になる。			
O：わがまま	P：枯渇	Q：理想	R：孤高
③諸概念の相互定義。＊各概念を残りの諸概念を使って定義する。諸概念が相互に組み込まれる。			
O を PQR を使って定義する。			
「わがまま」は「理想」が「枯渇」した「孤高」の状態である。			
P を QRO を使って定義する。			
「枯渇」は「孤高」という「理想」が「わがまま」となったときに内面に生じる。			
Q を ROP を使って定義する。			
「理想」は「枯渇」しなければ「わがまま」ではない「孤高」の中で生み出される。			
R を OPQ を使って定義する。			
「孤高」は「理想」が「枯渇」しないように「わがまま」を押し通すことである。			
④新しいタームの追加		S：関係性	
⑤新概念の組み込み　＊諸概念 OPQR の定義に新しいターム S を組み込む。			
O の定義に S を組み込む			
「わがまま」は「関係性」が失われ「理想」が「枯渇」した「孤高」の状態である。			
P の定義に S を組み込む			
「枯渇」は「孤高」という「理想」が「関係性」を拒絶し「わがまま」となったときに内面に生じる。			
Q の定義に S を組み込む			
「理想」は「関係性」が「枯渇」しなければ「わがまま」ではなく「孤高」と表現でき			

る。
R の定義に S を組み込む
「孤高」とは「関係性」の中で「理想」が「枯渇」しないよう「わがまま」を押し通すことである。
⑥新概念の定義＊新概念 S を諸概念 OPQR を使って定義する。
S を OPQR を使って定義する
「関係性」は「理想」を求めて「孤高」となっても「枯渇」しないようにするために必要なものである。
（メモ）「理想」を追い求めて「孤高」となっても「枯渇」しては元も子もない。そのためにはやはり「関係性」が必要である。
（理論の骨格）「わがまま」は「理想」が「枯渇」した「孤高」の状態である。「枯渇」は「孤高」という「理想」が「わがまま」となったときに内面に生じる。「理想」は「枯渇」しなければ「わがまま」ではない「孤高」の中で生み出される。「孤高」とは「関係性」の中で「理想」が「枯渇」しないよう「わがまま」を押し通すことである。「関係性」は「理想」を求めて「孤高」となっても「枯渇」しないようにするために必要なものである。 　この小説は、詩人として名を挙げるという「理想」をもった主人公が「孤高」となり「理想」を貫こうとしたが、人との「関係性」を絶ち信念を貫くという行為は「孤高」ではなく孤立という「わがまま」な行為となってしまった。そんな心許せる存在が周囲に誰もいなくなってしまった「わがまま」な彼の話をじっくり聞くという、この話でいえば友人という存在があった。つまり友人という存在が主人公の存在を示すこととなった。この話は存在することについての話である。存在はそれとは異なる存在との関係性によって成立する。そして、成立させる一つの方法がある存在の言葉に耳を傾けることである。 ＊人との関係性をつなぐ言葉を発するという行為はすべての人間が持ちうるものか。 「山月記」が『文字禍』の中の一つの作品であるということは重要な意味を持っている。

ステップ 13
①テーマとしているフェルトセンスを感じ直す。
『山月記』の感想
理論①「わがまま」は「関係性」が失われ「理想」が「枯渇」した「孤高」の状態である。
理論②「枯渇」は「孤高」という「理想」が「関係性」を拒絶し「わがまま」となったときに内面に生じる。
理論③「理想」は「関係性」が「枯渇」しなければ「わがまま」ではなく「孤高」と表現できる。

理論④「孤高」とは「関係性」の中で「理想」が「枯渇」しないよう「わがまま」を押し通すことである。
新概念「関係性」は「理想」を求めて「孤高」となっても「枯渇」しないようにするために必要なものである。
（メモ）「理想」を追い求めて「孤高」となっても「枯渇」しては元も子もない。そのためにはやはり「関係性」が必要である。 「山月記」が『古譚』の中の一つの作品であるということは重要な意味を持っている。 「山月記」が『古譚』の中の一つの作品であるということ、そこに何らかの共通性があるはず。
関係性を成立させる一つの方法は、存在の言葉に耳を傾けることである。

ステップ 14	
A の感想	何らかの共通性があるはず
私の感じたこと	
作品に含まれる意味	
ステップ 13 より	
A の感想「虎になっても友達が気づいてくれた」	
私の TAE「関係性を成立させる一つの方法は、存在の言葉に耳を傾けることである」	
（メモ）A の感想に「虎になっても友達が気づいてくれた」とあるが、主人公が虎になったとしても、友達に対して人間の言葉を発しなければ気づいてもらえなかった。したがって、人との関係性を得るには言葉が重要である。	
追加事項「山月記」が『古譚』というまとまりの中にある意味についても考える。	

５．おわりに

以上のように、そもそも筆者自身は『山月記』という小説についてどのような感想を持っているのかについて TAE を行った。そこに現れたのは「人との関係性を得るには言葉が重要である」であり「関係性を成立させる一つの方法は、存在の言葉に耳を傾けることである」ということだった。

では、筆者の「生徒の言葉を大切にすること」とのつながりはどのように考えればよいか。生徒 A の感想は「虎になっても友達が気づいてくれた」であるが、自身の感想の TAE のメモには「主人公が虎になったとしても、友達に対して人間の言葉を発しなければ気づいてもらえなかった」とある。つまり、生徒の言葉を大切にするということは、言葉を発することができるような場を作ることなのだ。では、そのような場とはどのような場なのか。それは、一般的に言われていることだが「安心・安全」な場なのである。しかし、TAE を繰り返すことによって生まれ出たこの言葉はもはや借り物の言葉ではない、とても重たい言葉とな

った。それは、経験によって導き出された言葉だからだ。

ジェンドリン哲学、そして、TAE の最も重要なことは、経験から意味を導き出すということである。今後も自身の経験の意味を大切にしていきたい。

参考文献

得丸さと子（2010）.『ステップ式質的研究法―TAE の理論と応用―』海鳴社.

ユージン・T・ジェンドリン（著），村里忠行・末武康弘・得丸智子（訳）（2023）.『プロセスモデル―暗在性の哲学―』みすず書房.

【実践報告】

システマと関わりながら生きるという身体感覚について

山﨑統太

キーワード
システマ、身体感覚

１．はじめに

（＊注：本稿はシステマそのものを定義することを目的とせず、またシステマに関して特定の用途や効用を支持する一切の立場もとらない。ここでは、具体的な一人の人間である筆者がシステマと関わる中で感じた感覚そのものについて議論していく。）

「システマ」は、ロシアの武術、軍隊格闘術である。システマに関する動画はインターネット上に数多く公開されているが、例えば、以下（2007 年に国連で行われたデモンストレーション動画）を参照されたい （Systema Vasiliev、2018）。システマは人の生活を向上させるためのトレーニング体系であり、人間の身体、心理、スピリチュアルに至るまで、非常に多くの要素が含まれる（Systema HQ Toronto、2024 年 8 月 4 日閲覧）。したがって、システマが扱う範囲や特徴をいざ具体的に言葉で説明しようとすると、その広さと抽象度の高さに途方に暮れることになる。筆者は約 10 年前にシステマに出会い、トレーニングを継続してきた。システマには段位や試合も無いため、現在の自分のレベルや成果の実感が得られにくいといった意見も一定数存在するのだが、筆者自身は全くそんな風に思うことは無く、むしろ日々のトレーニングに楽しみを感じている。そして単に戦闘スキルの獲得に留まらず、システマから多くを学び、人生そのものに良い影響があると実感している。しかしそれは一般的には目に見えず定性的な感覚で、客観的な観測手段によって定量することが難しいとされる。システマに取り組む中で感じる、“この感覚”は、言葉にすることが可能なのだろうか。あるいは言葉にしたところで、曖昧で不確かな個人の感想でしかないのだろうか。

身体感覚を自分なりの言葉で説明することは、能力を高めていくための重要なカギ（加藤、2017）であることは、知識としてだけでなく、実感として持っていたが、長らくその方法、きっかけが掴めないでいた。筆者が TAE と出会ったのはちょうどそのようなタイミングであった。「TAE （Thinking At the Edge）は、うまく言葉にできないけれども重要だと感じられる身体感覚を、言語シンボルと相互作用させながら精緻化し、新しい意味表現を生み出していく系統立った方法」（得丸、2010）である。この方法が自身の課題解決の糸口となることを直感した筆者は、TAE を熟知したガイドのもと、各々がテーマを持ち寄って自身のテーマを研究する実践的な場である TAE 研究会に参加し、自分の内側の分析を行うことにした。

２．目的

本研究は、システマ実践者である筆者自身が感じている“この感覚”を研究課題として、システマと関わる中で感じる感覚を、TAE ステップを用いて分析することを目的とする。そして、身体感覚から言葉や理論をどのようにして生み出していくのかを、TAE ステップの分析手順、過程を見ながら検討していく。

３．方法

筆者自身の“この感覚”を対象として、 TAE ステップに沿って分析した。TAE の全 14 ステップのうち、本研究では、ステップ 12 まで取り組んだ。

４．過程

TAE の全 14 ステップは、3 つのパートに分かれている。以降、パートⅠ（ステップ 1～5)、パートⅡ（ステップ 6～9)、パートⅢ（ステップ 10～12）に 分けて TAE の過程を記述する。

4.1 パートⅠ（ステップ 1～5）

パートⅠは、フェルトセンス（まだイメージや言葉にならない、漠然としたからだの感じのこと）から語るパートである。マイセンテンスシートを使い、身体感覚であるフェルトセンスからマイセンテンス（短い文）を実体化させることが、パートⅠの役割である。

フェルトセンスをつかむことは、TAE ステップの最初の取り組みであり、続く分析の方向性が決まる極めて重要な部分である。自分の中で感覚がまとまるまで、安易に言葉にせず、“この感覚”に浸る。そして“この感覚”を、いつでも好きなときに引き出せるようになるまで、何度も感じることを繰り返す。ここで得られた“この感覚”が、TAE で分析する対象となる。

フェルトセンス（“この感覚”）が感じられたら、テーマを決める。テーマはリサーチクエスチョン（研究課題）とも呼ばれ、TAE においては、“この感覚”さえあれば、ここで決めるテーマ名はどのようなものであっても良いとされる。本研究では「システマの感じ」をテーマ名とした。テーマ名は、前述の“この感覚”に、後から自分で思い返せるように、「システマの感じ」という、他と区別するための名前（目印）を付けたものである。パートⅠにおいては、“この感覚”がまず先にあり、それを指示する役目としてのテーマ名という関係性さえ守られていれば、たとえ客観的に意味不明な言葉であったとしても全く問題ではない。なぜなら、ここではテーマ名の辞書的な意味はあまり関係なく、言葉の役割はあくまで指示することであって、分析で扱うのは常に、指示された対象のフェルトセンス（“この感覚”）だからである。このような意識を常に持ち続けることが、パートⅠでは特に重要となる。

続くステップでは、「システマの感じ」と名付けた感覚を手がかりとしながら、浮かんでくる語句を書き出す。「自然の広い湖」「やることが少ない」「何もないことがない」「現実」「在る」、、、などの語が抽出された（表 1)。なぜ浮かんできたのか、なぜこの言葉なのか、説明できなくて構わない。ただし、テーマの感覚から出た言葉かどうか（＝頭で考えた言葉

ではないか）だけにはこだわるようにする。

次に仮マイセンテンス（仮の短い文）として「湖はただ在り続ける」を作成した（表 1）。「在る」という語の辞書的な意味は、「物事が存在する」であるが、筆者のフェルトセンス独自の意味としては、「静か」「辛いことがあっても」「強さ」「どんと構える」、、、というような意味が含まれていた（表 1）。これは、エゴを出さずにカームであり続けるという、システマのキーとなる教えが現れていると考えられる。このようにして、独自の意味が含まれている重要ワードを挙げていき、最後にフェルトセンス表現する短い一つの文を作成した。ここでは「システムが動き続けている」というマイセンテンスを得た（表 1）。実際の作業は「マイセンテンスシート」（得丸、2010）を用いて行った。

表 1

マイセンテンスシート

①テーマ＊テーマを１つ選び、「この感じ」としてもつ。下に事柄をメモする システマの感じ		
②浮かんでくる語句＊「この感じ」のフェルトセンスに浸りながら書く 自然の広い湖 、やることが少ない、何もないことがない、（チューニング）、（乗り越える）、現実、（弱さに向き合う）、在る・・・ ＊大切な語、数個に下線を引く		
③仮マイセンテンス＊フェルトセンスを短い１つの文にする。語も文型も自由に作る 湖はただ在り続ける ＊最も大切な語句に二重線を引く		
④空所のある文＊仮マイセンテンスの二重線の部分を空所にした文を書く 湖はただ（　　）続ける ＊空所に入る言葉をフェルトセンスから呼びだす		
キーワードの通常の意味と、フェルトセンス独自の意味を書く		
⑤キーワード１ 在り	⑦キーワード２ こなし	⑨キーワード３ 向かい
⑤通常の意味　在る 物事が存在する	⑧通常の意味　こなす うまく処理する	⑩通常の意味　向かう ある方向をさして動いていく
⑪フェルトセンス独自の意味 良い状態でいる、カーム、静か、持続、辛いことがあっても、強さ、どんと構える・・・	⑫フェルトセンス独自の意味 受動と能動 MIX の感じ、マシーンのように、居着かない、辛いことがあっても、選ばない、粛々と、秩序、調和・・・	⑬フェルトセンス独自の意味 意志、魂、内的なものによって、諦めない、前進の源、辛いことがあっても、自分次第・・・
＊大切な語、数個に波線を引く		
⑭拡張文を書く　　＊空所に、すべてのキーワードと波線の語を並べた文を書く		

ただ（在り、こなし、向かい、静かに、辛いことがあっても、粛々と、調和し、内的なものによって・・・）続ける
⑮マイセンテンス＊フェルトセンスを短い１つの文にする。語も文型も自由に作る **システムが動き続けている**
⑯マイセンテンスの補足説明　　＊他の人にもわかりやすくする 世界には自然の理があり、私たちもその中で生きている。原理は感情を持っていないので、誰にも迎合しない。どんなときもただ在るだけ。全体が繋がっていて、平衡しつつも常に進歩している。 人間の都合に関係なく理不尽な事がしばしば起こる。が、思考と行動は常に自由であり、意志は困難を乗り越える原動力になり得る。そしてこれらの事実さえもまた、全体システムを構成する要素の一つである。

4.2 パートⅡ（ステップ 6～9）

パートⅡは、実際に起こった実例からパターンを見出し、さらにパターンを操作することで、新しい気付きを得ていくパートである。

まずは、パートⅠでフェルトセンスを感じるために手掛かりにした過去の状況、つまり、筆者が「システマの感じ」を感じた過去の状況（実例）を書き出す。実例は、実際に起こった事実並びにその時自分が感じたことを具体的に記述することを心掛ける。表 2 に実例の一部を示す。

表 2
実例（一部）

実例 1	「練習中」キックワーク、相手がキックでアタックしてくる。それを感じて足でさばいて動く。相手の意思や動きがわかる。知っているわけではないが感じる。自分がどう動けば良いか、知識によってではなく、こう動きたい or 必然性がある。
類似例 1c	「仕事」すぐに数式化できない、論理的にエビデンスを並べることはできない。しかし、身体感覚的に確信することがある。人の話の行間のニュアンスから“わかる”感じ。ただし、他の人に対してはそれでは通じないので、直感をサポートするような、かつ他人にわかりやすい指標で表現できるデータを集めて、他の人に同じ感覚を届ける。プレゼン資料作成。創造的。アートのよう。

実例 1 は、とあるシステマの練習場面であり、この時感じた、知識として知っているわけではないが、自分がどう動けば良いかを必然性を伴って身体的に感じられた経験を挙げた。一方、類似例 1c は仕事の一場面である。まだ論理的に説明できないが、状況全体を感じて確信しているという感覚から、他人にわかるように筋道を立てて説明するために、様々な角度から工夫した経験である。なぜ練習と仕事という異なるカテゴリの場面で、テーマである同じ「システマの感じ」を感じたかについては、自分でもはっきりとはわからないが、実は

それこそが重要な感じがしたので、以降も様々なカテゴリから実例を書き出していった。同様の作業を続けていくつかの実例が集まったら、次はそこからパターンを見出す。「『パターン』は、言語による細部間（部分間）の関係を表す短い文で（中略）、さまざまな物、事、人に当てはめることができる何かと何かの関係を表す一般的な表現形式」（得丸、2010、p.70）である。ここでは、前述の実例 1、類似例 1c を含む 5 個の実例クラスターから、パターンとして、「感覚で動くと気持ちが良い」を取り出した。

このようにして、実例、類似例を挙げ、パターンを見出していく作業を繰り返し行い、結果として、19 個の実例を集め、そこから 4 個のパターンを得た（表 3）。

次のステップは交差と呼ばれ、先のステップで得た実例とパターンから新たなパターンを見出すことをその目的とする。交差のやり方には自由度があり、研究内容やデータ量等を勘案して決めれば良いとされている。ここでは、オーソドックスなやり方を採用することにした。手順としては、先般の実例を、別の実例クラスターから抽出したパターンを通して見ることにより、新しい気付きを得、そこから新しいパターンを見出していく流れとなる。交差の作業により、最終的に 12 個の新パターンを得た（表 3）。（新）パターン一覧を眺めてみたところ、“この感覚”という同じ対象を、切り口を変えて言い直している感じがあり、また、マイセンテンスを言い得ている程度を判断することで（表 3）、“この感覚”の輪郭がより浮かび上がってくる感じがした。

表 3

抽出された 4 個のパターンと交差によって得られた 12 個の新パターン

テーマ	システマの感じ
マイセンテンス	**システムが動き続けている**

マイセンテンスを言い得ている程度↓

1	パターン	1	感覚で動くと気持ちが良い	○
2	パターン	2	行動することで理解できる	○
3	パターン	3	**当たり前のことだけが起こる**	○
4	パターン	4	弱さとともに**生きていかなければならない**	○
5	新パターン	1x2	快が動機だから継続する	○
6	新パターン	1x3	自分で必要なことを感じることができる	○
7	新パターン	1x4	不調和を乗り越えながら変化し続ける	○
8	新パターン	2x1	身体にしかわからないことがある	○
9	新パターン	2x3	重要なものは行動することでしか得られない	○
10	新パターン	2x4	どんなことからも学ぶことができる	□
11	新パターン	3x1	**因果律は実感することができる**	◎
12	新パターン	3x2	体験を通じて信念を強化していく	○
13	新パターン	3x4	全てにおいて悪ということはあり得ない	□
14	新パターン	4x1	調節する自由は常に開かれている	○
15	新パターン	4x2	不都合に対処する術はある	□
16	新パターン	4x3	適切に理解することで強くなれる	○

パート II 最後のステップは、ここまでで気付いたことを自由にメモするステップである。メモを箇条書きしているうちに、自分が何を言いたいのか、さらにわかっていく感覚があった。次にそれらをまとめた図を描き、そこから気付いたことをメモする。これらの作業を自分が納得するまで繰り返した。中でも特に重要と感じた図（図 1）とメモの一部（表 3）を以下に示す。

図 1
重要と感じた連関図（ステップ 9）

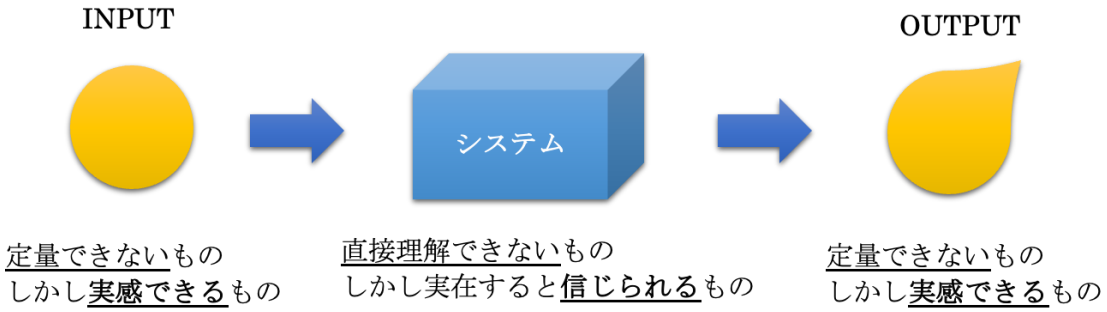


表 3
重要と感じたメモ（一部）（ステップ 9）

・ 「“変わり続ける”という、変わらない仕組み」これを上手く表現したい ・ システムの中身＝システマとは何かについては、直接言及することを巧みに避けながらも、その周囲を取り巻く要素については、はっきりとかつ詳しく表現されている ・ 自分自身もまた全てが含まれる世界（＝システム）の一員として構造の中に入り込んでいる ⇒自分が生きることから分離して考えることはできない ・図 1 が示すのは「帰納」そのもの、辞書的には帰納法により導出するのは「法則」

4.3 パートⅢ（ステップ 10～12）（＊本研究ではステップ 13～14 は未実施）

パートⅢは、概念生成、理論構築、及び理論の検証のパートである。理論をまとめた数行の文章（マイセオリー）が、ステップ 10～12 の最終的なアウトプットとなる。

手順としては、まずはここまでの作業シートやメモを眺めて全体を良く感じ、重要と思われるターム（用語）を 3 個選ぶ。ここでは A「生きること」、B「実感」、C「法則」を選定した。さらに 3 語を相互に関係づけるために、「A は B である」のように、2 個ずつタームをイコールで結んだ文を作り（全 6 通り）、機械的に作った文をフェルトセンスに合うように修正する。「<法則>は<実感>可能である」や「<生きること>は現実を<実感>し動き続けることである」等が得られた。作業を進める中で、言いたい“もの”の全体像は図 1 の連関図であり、図のどの部分をどうやって言いたいか、に自分自身で気付いていく感覚があった。次に今度は 3 語の本来的な関係を探求するために、「A は、本来（もともと）、B である（の性質を持っている）（A is inherently B.）」のように 2 個のタームを繋いだ文を全 6 通り作

り、それぞれの文に対して気付いたことをメモしていく。例えば、「<法則>は本来<生きること>である」という文を作り、メモとして「生きることは、動くこと。動いているとわかるから、生きているとわかる。法則は概念であるから、直接見ることができない。法則は、具体的な何かが動く軌跡が描くグラフから見出すもの。」と記入した。この作業によって、新しいタームとして「軌跡」を見出した。同様の作業を繰り返し、最終的に、最初の 3 個の重要ターム「生きること」「実感」「法則」から、6 個の新ターム「自律」「変数」「軌跡」「自然」「世界観」「超越」を得た。

続いて、ターム間の関係を相互に定義し、論理的な構造を構築することで概念を表現していく。ここまでの作業で得られた感覚を言い表すために必要な恒久的なタームを 3 個選び直して O、P、Q とする。これらのタームを使って、あるタームを主語とし、残りのタームを述語に含む文を作ることで、フェルトセンスを表現する。タームを入れ替えて同様の作業を繰り返すことにより、O、P、Q が相互に組み込まれた形で定義される（相互定義文セット）。相互定義文セットによる構造体ができたら、フェルトセンスをより表現するために必要なタームを一つずつ加えていき、これを加えたいタームがなくなるまで続ける。実際の作業で使った「概念組み込みシート」（得丸、2010）の一部を表 5 に示す。本作業によって、自分の中にまだ曖昧に存在していた図 1 の連関図について、O、P、Q で基本的な関係性を定義し、R、S、T でその周辺を補足する形で、はっきりと文で実体化された感覚が得られた。

表 5
概念組込シート（一部）

3 つの恒久的なタームを選び、OPQ とする。
O「法則」　P「変数」　Q「軌跡」*これらが相互定義されたとき概念になる。
一つのタームを他のタームを使って定義する。諸概念が相互に組み込まれる。
O「法則」は全ての P「変数」がなす Q「軌跡」の総体
P「変数」は O「法則」に従い Q「軌跡」を描く
Q「軌跡」は P「変数」を O「法則」に結び付ける
R、S、T・・・と新タームを加えていく。 上の文に新タームを加えた後に、新タームを主語とする文を作る。
O「法則」は全ての、S「生きている」中で R「実感」可能な P「変数」がなす、あらゆる T「世界観」に基づく Q「軌跡」の総体
P「変数」は、S「生きている」中で R「実感」できるものであり、O「法則」に従いながらも、T「世界観」を反映して Q「軌跡」を描く
Q「軌跡」は、T「世界観」によって定義されるものであり、S「生きている」中で R「実感」された P「変数」を O「法則」に結び付ける
R「実感」は、O「法則」に則していてかつ T「世界観」を反映した Q「軌跡」を構成する P「変数」を観測するための、S「生きている」ものだけが持つ指標
S「生きている」とは、O「法則」の中で P「変数」を R「実感」しながら T「世界観」に基づき Q「軌跡」を描き続けること

T「世界観」は、S「生きている」中でR「実感」されたP「変数」をO「法則」へと導くためのQ「軌跡」を描くのに必要な設計思想

タームの追加が終了したら、最終的な相互定義文セットで表現している内容を、リサーチクエスチョンを主語とし、全てのタームを含んだ文で表現し直す。以下が、本研究における、“この感覚”を表現する最終的な結論、「システマの感じ」に関する理論（マイセオリー）である（表 6）。

表 6
マイセオリー

システマの感じは、システマが提唱する「法則」、その理解及び実践に向かう営為、即ち、「生きている」中で「実感」された「変数」から、自らの「世界観」に基づいて「軌跡」を描き続ける活動において感じられる感覚である。 それは、物事を単に個別の事象としてではなく「軌跡」、つまり、「実感」を「変数」とした関数として原理をみることにより、間接的に「法則」を理解していく視点を持つことから生まれるものであって、この繋がりの観念こそがまさにシステマの感じである。

5．考察と今後の課題

本研究において、「法則」のタームによって、筆者がシステマに対して抱いている、言葉で説明することが難しい感覚を文で表現することができた。「法則」それ自体は、原理上直接理解することができないため、普段の練習では、速習性の高さから、武術というフォーマットを採用して、「実感」可能な「変数」の「軌跡」を媒介にして学んでいるに過ぎない。練習、仕事、実生活、、、とシチュエーションのカテゴリが変わっても、同じ“この感覚”を感じたのは、「法則」が普遍的で、私たちが「生きている」世界に空気や重力のように常に在り続けているからである。感受性を開きさえすれば、いつでもどこでも“この感覚”を感じることができる。

自分自身の体験は、単に外から得た知識とは違い、疑いようのない事実として体感することができる。そして個別の体験を繰り返すうちに、段々と、それらを貫く原理がみえてくる。原理に基づいて実際に行動し、その結果を自分の理解とやり方にフィードバックしながら実践を続ける。自分はこのようなありように魅力と楽しさを感じているのだと、はっきりとわかった。とても大事なことなのだが、それが何なのか言葉にできない、自分自身が感じている、「システマの感じ」とは一体何なのか、システマと関わりながら生きるという身体感覚について、TAE を用いて分析することで、借り物ではない自分のことばで、理論（マイセオリー）を創り上げることができた。

本研究では、ステップ 12 まで取り組み理論を創ったが、続くステップ 13～14 は創った理論の検証へと進んでいく。パートⅢは何年もかけて何度も修正、検証を繰り返すステップであるとされ（得丸、2010）、また、筆者が感じる「システマの感じ」も今後の人生の中でアップデートされ続けるだろう。ゆえに本研究で創った理論は最終形ではなく、一生かけて修正し続けるものであり、今後の課題としたい。

自分にとって大事なことを、TAE を用いて初めてことばにした体験は、筆者にとって、非常に大きなものになった。当初、個人的な感覚を半端な理解のまま文章に残すことに対して抵抗を感じていたが、実際にやってみるとその印象は逆転した。自分自身に気付いていくことによって自信が付き、もっと理解したいという活力が湧いてきた。今後も引き続きシステマと誠実に向き合い、また「システマの感じ」を明らかにしていきたい。

参考文献

加藤洋平（2017）.『成人発達理論による能力の成長−ダイナミックスキル理論の実践的活用法』日本能率協会マネジメントセンター.

得丸さと子（2010）.『ステップ式質的研究法―TAE の理論と応用―』海鳴社.

Systema HQ Toronto.（2024 年 8 月 4 日閲覧）. What is Systema?. https://www.russianmartialart.com/whatis.php

Systema Vasiliev.（2018）. *Systema demonstration United Nations New York 2007* [video]. YouTube. https://www.youtube.com/watch?v=Yy_KNypu5X4

【実践報告】

メタバースを考える

山田みょうえ

キーワード
メタバース、自然、捨身飼虎型、日常の解体と再構成

１．メタバースについて

メタバース（Metaverse）は、通常はインターネット上に存在する仮想空間のことを指す。ニール・スティーブンソンの SF 小説『スノウ・クラッシュ』の中で使用した言葉が語源で、meta と universe の合成語である[1]。

たまたま、NHK の BS で、「いけずな京都旅[2]」を見た。タレントが「いけずやわ～」といいながら京都を散策する。番組の拡大解釈によれば、京都はメタバースの都だそうである。京町屋の鍾馗さん、枯山水の石庭、寺社でコスプレを楽しむお姉さん、床紅葉、机紅葉、和菓子の四季の見立て・・・。夢と現実の二項対立では括れない、メタバース概念の拡大解釈を考えたくなった。・・・

本稿は、ジェンドリンの提唱した TAE の手順を活用した、仮想空間ではない日常に筆者が感じるメタバースの拡大解釈である。

２.マイセンテンスの作成

TAE パート 1 のステップ 1～5 の試行により、次のように拡張文を作成してから、マイセンテンスを導きだした。

拡張文：メタバースは、夢と現実の二項対立では括れないものであり、身近でリアルな異世界のエネルギーを安全に現実にもたらし、亡き人を偲んで懐かしく交流したり、フィギアやごっこ遊びなどで、小宇宙を楽しむことができる・・・。

マイセンテンス：メタバースは、ソウルガーデニング・・・である。

マイセンテンスを補足すると、メタバースは、単なるエンターテイメントやリフレッシュではない。日常に非日常をもたらす。日常の異界、自然、心の一層深い場所を耕し、栄養をもたらし、活性化して元気にする。

３. 具体例抽出と交差

TAE パート 2 のステップ 6～8 の試行にあたり、メタバースを感じるフェルトセンス具体例として、京都はメタバースの都・捨身飼虎型物語（幸せの王子[3]、アンパンマンなど[4]）・ドールハウス・お化け屋敷・温泉などから検討した。

具体例の「捨身飼虎型物語」を補足する。

捨身飼虎は飢えた虎に自分の体を投げ出して与えたという、釈迦の前世譚の一つ。金光明最勝王経などに見える。敦煌の莫高窟や奈良の法隆寺の玉虫の厨子にも描かれ、日本最古の仏教絵画、仏教文学の原点である。小説『西遊記』の三蔵法師のモデル玄奘は中国、唐代の僧。彼の『大唐西域記』は『西遊記』の基となった旅行記である。玄奘は、ガンダーラ地方を訪ねたおり、前世の釈迦が虎を哀れんで捨身した地に建立されている塔を参拝している。

> マハーサッタが餓えたけものに力がないのをあわれみ、この地までやってきて、枯れた竹でもって自らを刺し、その血を飲ませたが、このけだものはなんと太子を食べてしまった。このあたりの地面や草木はすこしく赤味をおび、血に染まったようである。この地を踏む人はとげを背に負うようで、憚られて心やすらかではない。この話を信じるも疑うも悲愴な気持ちにならないものはない。（桑山正進訳、大乗仏典〈中国・日本篇〉第9巻「大唐西域記」1987, pp. 81-82）

具体例から抽出したパターンを次のようにまとめた。

・通常は見えない世界を感じる形にするパターン
京町屋の鍾馗さん→<u>気遣いを形にする</u>

・<u>自然に感じるメタバース</u>
枯山水の石庭→砂と石に大海原の景色を観る、象徴に大自然や心の風景を見る
寺社でコスプレを楽しむお姉さん→時代に全身で浸る、時空を超えて時代の景色に浸る
床紅葉、机紅葉→部屋にいながら自然に浸る、自然のただ中に一体となる見立てをする
和菓子の四季の見立て→掌で四季を愛でる、掌の美味しい自然を包み味わう

・捨身飼虎型物語（かけがえのないものを手放して他者を労り救う慈悲のパターン）
→時空を超えた並列ではない平等に血を通わせる。幼子や虫の行為にも尊さを感じる。
<u>やさしさは、つよさである</u>、本来、生命の営みは命がけである

・ドールハウス→<u>手のひらで愛でる</u>、他者と共に対象化以前で遊ぶ、子ども心を活性化

・お化け屋敷→異界のエネルギーを安全に現実にもたらす

・**温泉**→日常に非日常をもたらす、日常がほぐれる、心身をほぐす

各具体例と抽出したパターンの交差を次のように試行した。

表 1
捨身飼虎型物語とパターン交差

(1) 捨身飼虎型物語×	・手のひらで愛でる→行為を俯瞰する
	・異界のエネルギーを安全に現実にもたらす→尊いギフトを授かる
	・日常がほぐれる→つよいやさしさに包まれる
	・気遣いを形にする→痛ましさに目をつぶらない
	・自然に感じるメタバース→生命の営みは命がけである

命がけの生命の営みの痛ましさに目をつぶらない行為を俯瞰することは、つよいやさしさに包まれる、尊いギフトを授かることである・・・

表 2
ドールハウスとパターン交差

(2) ドールハウス×	・やさしさは、つよさである→労りのある遊び
	・異界のエネルギーを安全に現実にもたらす→見えないものを形にする
	・日常がほぐれる→子ども心を元気にする
	・気遣いを形にする→見えないところに心を込める
	・自然に感じるメタバース→日常に四季を楽しむ

見えないところに心を込め、日常に四季を楽しみ、見えないものを形にする労りのある遊びは、子ども心を元気にする・・・

表 3
お化け屋敷とパターン交差

(3) お化け屋敷×	・やさしさは、つよさである→勇気で対処する
	・手のひらで愛でる→全体をよくみる
	・日常がほぐれる→恐怖がほどける
	・気遣いを形にする→辛さを労る
	・自然に感じるメタバース→解体も自然である

全体をよくみて、勇気で対処すると、恐怖がほどけ、自然な解体が辛さを労る・・・

表 4
温泉とパターン交差

(4)温泉×・やさしさは、つよさである→肌を包む温かさで守る ・手のひらで愛でる→肌触りを感じる ・異界のエネルギーを安全に現実にもたらす→非日常を日常にもたらす ・気遣いを形にする→全身をほぐす ・自然に感じるメタバース→自然のエネルギーが溶け込む

自然のエネルギーが溶け込む肌触りを感じ、肌を包む温かさに包まれ、全身をほぐすことは、非日常を日常にもたらす・・・。

表 5
気遣いを形にする型とパターン交差

(5)気遣いを形にする型（通常は見えない世界を感じる形にする）×
・やさしさは、つよさである→やさしさを形にする
・手のひらで愛でる→全体を確認する
・異界のエネルギーを安全に現実にもたらす→道筋をつける
・日常がほぐれる→安心する
・自然に感じるメタバース→日常に組み込む

やさしさを形にして全体を確認し、日常に組み込み道筋をつけることは、安心する・・・

表 6
自然に感じるメタバースとパターン交差

(6)自然に感じるメタバース×・やさしさは、つよさである→自然のたくましさ
・手のひらで愛でる→自然のやさしさ
・異界のエネルギーを安全に現実にもたらす→自然を学ぶ
・日常がほぐれる→自然のエネルギーに包まれる
・気遣いを形にする→自然の秩序を感じる

自然のやさしさ、たくましさ、自然の秩序を感じ、自然を学ぶことは、自然のエネルギーに包まれる・・・

表 1～6 の各具体例と抽出パターン交差の結果を列記する。

(1)命がけの生命の営みの痛ましさに、目をつぶらない行為を俯瞰することは、つよいやさしさに包まれる、尊いギフトを授かることである・・・。
(2)見えないところに心を込め、日常に四季を楽しみ見えないものを形にする、労りのあるあそびは、子ども心を元気にする・・・。

⑶全体をよくみて、勇気で対処すると、恐怖がほどけ自然な解体が辛さを労る・・・。
⑷自然のエネルギーが溶け込む肌触りを感じ、肌を包む温かさに包まれ、全身をほぐすことは、非日常を日常にもたらす・・・。
⑸やさしさを形にして全体を確認し、日常に組み込み道筋をつけることは、安心する・・・。
⑹自然のやさしさ、たくましさ自然の秩序を感じ、自然を学ぶことは自然のエネルギーに包まれる・・・。
（メモ：たたみ込まれたものを、拡げる感じがした・・・。）

各具体例と抽出パターン交差の結果　（1）～（6）を一つにする。
具体例と抽出パターンの交差を経たメタバースの拡張文は次のようにまとめた。

ステップ 6～8 メタバース拡張文：メタバースは、日常に非日常をもたらす。自然のエネルギーに包まれて（見えない形を壊す）自然な解体が辛さを労る。子供心を元気にする、（見えない形を作る）尊いギフトを授かり、安堵する・・・。

4. メタバースのクラスター再交差

ステップ 9 の試行は自由記述である。
マイセンテンス「メタバースはソウルガーデニング・・・である」を灯りとして、一旦、取り出した型をゆるめて、ぼーっとざっくり全体を感じて、メタバースのパターンのクラスターを響き合わせてみた。ゆるやかな全体の交差（メタバース感覚とメタバース感覚交差）から、気づくことがあった。パターンを分類して、次のようなクラスターにまとめた。クラスターにしたのは、筆者の実感では、暗在的思考に寄与するフェルトセンスが形成され、感じられやすくなるからである。例えば一つの粒だけではブドウと認識しがたくても、クラスターになれば、ブドウの房[5]と確認できる。ウィトゲンシュタインの家族的類似性に習うジェンドリンの構想がヒントである。
交差は、クラスターA とクラスターB を通底する「根っこ」のフェルトセンスであると感じる。

メタバースのパターンクラスター分類

「自然」に関するクラスター
・自身も自然に溶け込む
・掌で四季を愛でる
・時代の景色に浸る
・象徴に自然や心の景色を観る

捨身飼虎型物語クラスター
・やさしさは、つよさである
・本来、命の営みは命がけである

「異界のエネルギーを安全に現実にもたらす」クラスター
（形をこわす型）
・日常がほぐれる・心身をほぐす

（形をつくる型）→不明瞭なものを形にする
・気遣いを形にする・見えないものを自覚する

次の図１は、クラスター同士の交差を示す。
交差の結果・・・日常の解体と再構成が浮上した。

図１
クラスター同士の交差

「異界のエネルギーを安全に現実にもたらす」クラスター
（形をこわす型）・日常がほぐれる・心身をほぐす
（形をつくる型）・気遣いを形にする・見えないものを自覚**→不明瞭なものを形にする**
↓
日常の解体と再構成　←・**「自然」に関するクラスター**　→（単なる諸行無常ではない）
・**捨身飼虎型物語クラスター**（やさしさは命がけのつよさだ）

５. 日常の解体と再構成

・「自然」に感じるメタバースには、日常が解体される痛み（身体性）や安堵と再構成がインプライングされている・・・（自然は、解体と再構成をインプライングしている）
・捨身飼虎型物語メタバースには、すぐには言葉にならない場所に誘われる。美しいが気持ち悪い。心が震え、ズキズキする。思い込みや常識が壊れ、言葉がでない、言語化以前の主客全体の原風景があらわれる。人間中心の狭い世界から、痛みを伴う日常の解体を経て、種を超えた環境になる。「捨身飼虎」型の捨身は、単なる個人の犠牲、解体ではなく、日常の解体と世界の再構成がインプライングされている・・・捨身は、摂食され、栄養になることを志向している・・・釈迦の前世譚には、壮大なインプライングが読み込まれてきた・・・。
・TAE 理論講座[6]で『プロセスモデル』の構造の解説は興味深い。第Ⅷ章の直接照合体の再-再認は、生命プロセスの摂食の二重化、バージョンアップとも言えるのでは・・・
「人は、パンのみにて生きるにあらず[7]」・・・アンパンマンのギフトには、愛の凄みがある・・・。
摂食には、ある意味で個の解体と生の再構成がインプライングされている・・・。
・死に際したブッダの感想が「この世界は美しいものだし、人間のいのちは甘美なものだ」と記されている。（中村元、1983、p.445）
ブッダは、原風景にたたずんでいた・・・と感じる。それは、たんなる自然賛歌でも、現実肯定でもない。慈悲は、個の解体であり、個の解体は、慈悲で生き抜かれる行である。慈悲は種を超え世界に溶け込む。内蔵感覚に根ざした根源的な身体性で会得される。日常

が解体される痛みや安堵を経て、世界に浸みわたる無我の実践が慈悲となる。個が解体された場所は、何もない、からっぽというわけではない。言語以前の濃密なインプライングに満ちている・・・。世界の再構成に拓く個の解体・・・。

・臨床家は、クライエントのダメージや回復に丁寧によりそうのだろうが、個は解体されたとしても、「無」に帰すのではなく、対象化以前の豊かな原野にたたずんでいる[8]。言い換えれば、解体は、再構成の生起に拓かれている、オカーリングインツーインプライングの場所・・・だから、自分らしい失敗を恐れず、幾度でも再構成にチャレンジできる。

６．メタバースの拡大解釈

本稿の結びとして、パート 1、2 をまとめる。

<u>M メタバースを考える</u>　「メタバースは、ソウルガーデニング・・・である。」

メタバースは、夢と現実の二項対立では括れないものであり、身近でリアルな異世界のエネルギーを安全に現実にもたらし、亡き人を偲んで懐かしく交流したり、フィギアやごっこ遊びなどで、小宇宙を楽しむことができる・・・。

メタバースは、単なるエンターテイメントやリフレッシュではない。

日常の異界、自然、心の一層深い場所を耕し、栄養をもたらし、活性化して元気にする。ある意味でグラウンディングである。

It is a bodily way of feeling and living, not just idea[9]. (Gendlin, 1986, p. 123)

日常に響きあいながら、生を 感じつつ　生きる場所にする・・・。

メタバースは、日常に非日常をもたらす。自然のエネルギーに包まれて、見えない形を壊す自然な解体が辛さを労る。子供心を元気にする、見えない形を作る尊いギフトを授かり、安堵する。

メタバースは、単なる個人の解体ではなく、日常の解体と世界の再構成をインプライングしている。解体は、再構成の生起に拓かれている対象化以前の豊かな原野、オカーリングインツーインプライングの場所である・・・。

仮想空間のメタバースではなく、つつましく、日常に感じるメタバースを大事にしたい。日常の冒険を呼吸する M メタバースは、ソウルガーデニングであり、身体知の響きである。日本的インプライングが気になっている。今後の課題としたい。

注

1. 日経ビジネス『経済・経営用語辞典』参照
2. NHK BS“いけず”な京都旅（8）千年メタバースの都（初回放送日 2023 年 7 月 22 日）
3. オスカー・ワイルド『しあわせの王子』
4. やなせたかし『アンパンマン』
5. 得丸智子主催 TAE 研究会の「TAE パーソナル講座」ではブドウの房でクラスターが説明されている。
6. 得丸智子講師「TAE 理論講座」TAE 研究会
7. 聖書の語句

8. 村里忠之は「単なる破壊はダメで、次の構築に開かれていなければならない」というのは、ジェンドリンが彼のポストモダニズム批判のなかで主張していると指摘する。
9. 村山正治（訳）（1998）.『夢とフォーカシング』p.147

参考文献

桑山正進（訳）（1987）.『大乗仏典＜中国日本篇＞第 9 巻大唐西域記（抄）』中央公論社.

中村元（1983）.『ゴータマ・ブッダ』春秋社.

得丸さと子（2008）.『TAE による文章表現ワークブック―エッセイ，自己 PR，小論文， 研究レポート…，人に伝わる自分の言葉をつかむ 25 ステップ―』図書文化社.

得丸さと子（2010）.『ステップ式質的研究法―TAE の理論と応用―』海鳴社.

ユージン・T・ジェンドリン（著），村里忠之・末武康弘・得丸智子（訳）（2023）.『プロセスモデル―暗在性の哲学―』みすず書房.

ユージン・T・ジェンドリン（著），村山正治（訳）（1998）.『夢とフォーカシング』福村出版.

Gendlin, E. T.（1986）. *Let your body interpret your dreams.* Chiron Publications.

【短報】

自己矛盾を個性として肯定して生きる

山下美樹

サバティカル休暇、それは、大学教員としての私にとって、長年にわたり抱き続けてきた憧れの響きを持つ言葉であった。しかし現実は、校務の奔走、そして世界を覆ったコロナ禍、その渦中で、いつその時が訪れるのか、予測すらできずにいた。だがついに、その機会は2024年度にその機会が巡ってきた。これは、2020年度に科研費を用いて実施した研究を、さらに深く掘り下げることのできる、まさに絶好のタイミングでもあった。

まるで目の前を通り過ぎようとする船に飛び乗るかのように、私は2024年秋学期の半年間、サバティカル休暇に挑む決意を固めた。完璧な準備はなかった。だが「今を逃せば、もうこのチャンスは二度と来ない」その直感だけを頼りに、2024年秋学期の半年間、サバティカルに身を投じる覚悟を固めた。そして、速やかに大学に申請を行った。その結果、ゼミナール科目の指導を継続するという条件付きではあったものの、休暇の承認を得ることができた。

サバティカル期間中に私は「来るもの拒まず」の姿勢で、多様な経験と研究活動に意欲的に取り組んだ。その結果として得られた「点」は限りなく増えていった。しかしながら、これらを「線」としてつなぎ、意味ある全体像へと昇華していくという大きな課題が、常に目の前に、ある意味強迫観念のような形で存在している。その重圧は私の内面に焦燥感をもたらし、現在も精神的な葛藤として内在している。

今回のサバティカルでは、長期の海外滞在を選択せず、国内外での短期滞在を繰り返す形式を選択した。活動先の訪問地は、イタリアのシエナ・ベネチア、アメリカ合衆国のニューヨーク州オネオンタ、オレゴン州ポートランド、ニューメキシコ州ヘイメススプリングス、ベトナム、沖縄、仙台、大阪、他、多岐にわたった。

特に、かつて14年間を過ごしたオレゴン州ポートランドの「第二の故郷」や、その間によく訪れたニューメキシコ州で開催されたリトリートでは、恩師や旧友との再会が実現し、自らの歩みを振り返るかけがえのない機会となった。また、新たな出会いにも数多く恵まれた。国内外の地で触れた異なる自然環境、文化的世界観、生活リズムへの没入は、心身の浄化を促す貴重な体験となり、まるで10年以上かけて得るような経験を半年間に凝縮して味わったかのような、非常に濃密で刺激に満ちた期間であった。

蓄積された「点」の数々に圧倒されながらも、それらを有機的に結びつける作業への焦りは常に付きまとっていた。その結果、内面では「消化不良」とも言える状態に陥ることもあったが、それを上回るほどの貴重な学びと体験を得られたことに、感謝の念は尽きない。

このような経験を、私は自己のフェルトセンスとTAE（Thinking at the Edge）思考法に基づいて省察した。

「このチャンスは今しかない」という強い思いとは裏腹に、準備不足という現実があった。そのため私は、「ブレーキを踏みながらアクセルを踏む」ような、矛盾した行動パタ

ーンに陥っていたことを改めて自覚するに至った。この内的な葛藤は、新たな出会いと刺激、それに伴う体験と情報の過剰摂取、そしてそれに対する消化不良、焦燥感、最終的には自己矛盾へと連鎖的に展開していった。

こうした心の揺れ動きを通じて、自身の中にある「自己矛盾のパターン」がより明確に見えるようになった。では、このような矛盾をいかにして昇華することができるだろうか。その手がかりは、ニューメキシコ州での滞在中に体験した大自然とのふれあいや、アメリカ先住民族の教え、さらにはダンスやアートといった文化的営為の中に見出された。それらは静かに、しかし確実に、私の心身に浸透していった。

そして、ひとつの結論に辿り着いた。すなわち、自己矛盾は私という存在の「個性」であり、それは変えるべきものではなく、むしろ受け入れるべきものであるということ。その気づきを得たことで、今後の進むべき道筋が、少しずつ見えはじめている。

【資料】

TAE 文献リスト

山下佳久

TAE の紹介・哲学

Gendlin, E. T. (1962). *Experiencing and the creation of meaning: A philosophical and psychological approach to the subjective*. Free Press of Glencoe.（筒井健雄（訳）（1993）. 『体験過程と意味の創造』ブック東京.）

Gendlin,E.T.（1991）. Thinking Beyond Patterns: Body, Language, and Situation. In B. den Ouden & M. Moen (Eds.). *The presence of feeling in thought*.(pp.25–151) Peter Lang.

Gendlin, E. T. (1997a). *A process model*. The Focusing Institute.（ジェンドリン, E.T.　村里忠之・末武康弘・得丸智子(訳)(2023). プロセスモデル―暗在性の哲学―みすず書房）

Gendlin, E. T. (1997b). How philosophy cannot appeal to experience, and how it can. In D. M. Levin (Ed.), *Language beyond postmodernism: Saying and thinking in Gendlin's philosophy* (pp. 3–41). Northwestern University Press.

Gendlin, E. T. (2004a). What is TAE? Introduction to Thinking at the Edge. *The Folio*, *19*, 1–8.（村里忠之・村川治彦（訳）(2004).「TAE（辺縁で考える）」への序文）

Gendlin, E. T. (2004b). TAE steps. *The Folio, 19,* 12–24.（村里忠之（訳）(2004). 辺縁で考える（TAE）のステップ）

Gendlin, E. T. (2009). We can think with the implicit, as well as with fully formed concepts. In K. Leidlmair (Ed.), *After cognitivism: A reassessment of cognitive science and philosophy* (pp. 147–161). Springer.

村里忠之（2006).「TAE：Thinking At the Edge（辺縁で考える）」あるいは「未だ言葉の欠けるところ Wo noch Worte fehlen」フォ–カシングの展開.（pp.33–46）ナカニシヤ出版.

村里忠之（2009). ジェンドリンの思索における哲学的背景. 諸富祥彦（編著），伊藤研一・末武康弘・近田輝行・村里忠之・吉良安之（著）『フォーカシングの原典と臨床的展開』(pp.45–85). 岩崎学術出版社.

村里忠之（2010). プロセスモデルの 7 章について―フォーカシングと TAE の真の用途―. 諸富祥彦・村里忠之・末武康弘（編著）『ジェンドリン哲学入門―フォーカシングの根底にあるもの―』(pp. 293–365). コスモスライブラリ–.

村里忠之（2010). TAE（Thinking At the Edge）とは何か？ 諸富祥彦・村里忠之・末武康弘（編著）『ジェンドリン哲学入門―フォーカシングの根底にあるもの―』(pp. 371–398). コスモスライブラリ–

村里忠之（2011). E. T. ジェンドリンによる心理療法とフォーカシング ＆TAE の基礎としての暗在性（The implicit）哲学についての研究. 法政大学大学院人間社会研究科博士論文.

Morotomi, Y. (2017). 'Therapeutic stoppage' creates a space where a 'moment of

movement' will come. *Person–Centerd & Experiential Psychotheraies, 16*, 27–38.
諸富祥彦（2021).『カール・ロジャーズ　カウンセリングの原典』角川選書.
末武康弘（2014). ジェンドリンのプロセスモデルとその臨床的意義に関する研究．法政大学大学院人間社会研究科博士論文.
Schoeller, D. & Dunaetz, N. (2018). Thinking emergence as interaffecting: Approaching and contextualizing Eugene Gendlin's process model. *Continental Philosophy Review, 51*, 123–140.
Schoeller, D., & Thorgeirsdottir, S. (2019). Embodied critical thinking: The experiential turn and its transformative aspects. *philoSOPHIA, 9* (1), 92–109.
得丸智子（2007). ジェンドリンの言語論にみるシンボル過程―『プロセス・モデル』第 VII 章 A―.『言語文化と日本語教育』*33*, 83–88.
得丸さと子 Tokumaru, S.（著）, 木田満里代 Kida, M.（翻訳）. (2011). *Qualitative research with TAE steps*. Keisuisha (渓水社).
Tokumaru, S. (2023). A new perspective on creativity: Gendlin's "A Process Model". *International Journal of Creativity in Music Education*, *10*, 39–48. Institute of Creativity in Music Education.
https://www.icme.jp/en/wp-content/uploads/2023/05/jcme10.pdf
得丸智子（2024). ユージン・ジェンドリンの言語論.『開智国際大学紀要』*23*, 109–118.
得丸智子（2024).『プロセスモデル』の内的概念構造．『人間性心理学研究』*42*(1), 57–62.
Tokumaru, S. (2024). Gendlin's language theory of the implicit. 『国際地域学研究(*Journal of Regional Development Studies*)』*27*, 209–216.
https://doi.org/10.34428/0002000270

医療者育成

青木桂子（2013). セラピスト・フォーカシングを用いた対人援助職の援助に関する研究―地域で働く保健師を対象として―. 明治大学大学院文学研究科臨床人間学専攻修士論文.
青木桂子（2016). 対人援助職としての「保健師という仕事」の本質―TAE 分析の手順に焦点を当てて―. 末武康弘・諸富祥彦・得丸智子・村里忠之（編著）『「主観性を科学化する」質的研究法入門』(pp. 244–254). 金子書房.
田村眞由美・得丸智子（2014). TAE (Thinking At the Edge) の質的看護研究への適用．『日本看護研究学会雑誌』37 (3), 356–356.
田村眞由美・末次典恵（2016). TAE を用いた患者インタビューの分析. 末武康弘・諸富祥彦・得丸智子・村里忠之（編著）『「主観性を科学化する」質的研究法入門』(pp. 302-314)　金子書房.
田村眞由美・得丸智子（2017). 質的研究における TAE（Thinking At the Edge）の分析のプロセスについて―分析者の内省と体験の考察―.『聖マリア学院大学紀要』*8*, 33–40.

教育者育成

小林浩明（2016). 日本語教師のキャリア分析. 末武康弘・諸富祥彦・得丸智子・村里忠

之（編著）『「主観性を科学化する」質的研究法入門』(pp. 257–265). 金子書房.
近藤明子（2016). 興味で始まった日本語学習者の動機の変化. 末武康弘・諸富祥彦・得丸智子・村里忠之（編著）『「主観性を科学化する」質的研究法入門』(pp. 278–289). 金子書房.
三沢元彦（2019). 質的研究法 TAE を用いた面接が新任教師の生徒指導上の気づきと行動を促す事例.『学校メンタルヘルス』*22*(2), 220–230.
中川康弘・森文枝（2013). 業務に向き合うある一人の日本語教育専門家の学び―TAE を用いた内省分析の試み―.『桜美林言語教育論叢』*9*, 143–155.
寺本妙子(2021). 初等・中等教育における新しいキャリア教育の理解と展開.『開智国際大学紀要』*20*, 71–82.
得丸智子（2016). TAE ステップによる内省プロセスの可視化の試み. 末武康弘・諸富祥彦・得丸智子・村里忠之（編著）『「主観性を科学化する」質的研究法入門』(pp.132–158). 金子書房.
山田美穂（2023). ソマティクスを基盤とする教育実践における教師の身体知―協働的インタビューとムービング TAE を用いた言語化の試み―.『質的心理学研究』*22*, 25–44.

教育に活かす

Fujieda M. (2020). 第二言語ライティング研究分野における情動研究を検証する―フォーカシングと TAE アプローチを用いて―.『共愛学園前橋国際大学論集』*20*, 1–13.
城一道子（2016). フォニックス・ライム・チャンツ・歌を活用した発音指導の教育効果―TAE（Thinking at the Edge）を応用した分析―.『教育総合研究 ： 江戸川大学教職課程センタ–紀要』*4*, 1–12.
Kypriotakis, N. (2014). Communication and creativity skills: Non–violent Communication (NVC) and Thinking at the Edge (TAE), two methodical approaches. *Proceeings of "European/national initiatives to foster competency–based teaching and learning" European Conference 2014*, 45–47.
Larrabee, M. (2004). Eighth graders think at the edge. *The Folio, 19*, 99–101.
坂本喜代子（2014). 暗在的な国語教育観の言語化の試み―個別指導体験の若手教師の語りから―.『全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集』103–106.
坂本喜代子（2016a). 国語科研授業体験の TAE 分析. 末武康弘・諸富祥彦・得丸智子・村里忠之（編著）『「主観性を科学化する」質的研究法入門』(pp. 278–289). 金子書房.
坂本喜代子（2016b). 教師の信念とその実践における投影の様相に関する一考察―「はじめに子どもありき」に根ざす国語科実践の現象学的分析―.『東京学芸大学国語教育学会研究紀要』*12*, 19–24.
鈴木寿子・得丸智子（2008). 作文添削活動の実践研究における添削者の学び―TAE を用いた内省の分析―『言語文化と日本語教育』*36*, 11–20.
得丸智子（2008). 電子掲示板上の日本語作文（エッセイ）相互干渉活動の企画・運営.『台湾日本語文學報』*23*, 157–181.
得丸智子・清水寿子（2009). 質的研究はボランティア教師グループに何をもたらしたか―PCA の作文添削グループの TAE による実践研究―.『日本女子体育大学紀要』*39*, 59–

68.
得丸智子・清水順子（2018). TAE による内省プロセスを可視化する―ある日本語教師の教育実践の振り返り―.『開智国際大学紀要』*17*, 55–84.
得丸智子（2019). 日本語独習者の研究―アニメ視聴から始まった日本語学習―.『開智国際大学紀要』*18*, 37–56.
得丸智子（2020). アプリを活用した単語学習を中心とする日本語独習―TAE によるインタビュ–分析―.『開智国際大学紀要』*19*, 35–63.

心理臨床家の育成

久我祐博（2021). 心理療法家の成長において実存的苦悩体験を持つ意味―熟練した心理療法家へのインタビュー調査を通して―. 日本心理臨床学会第 40 回大会, 212.
末武康弘・得丸智子（2012). パ–ソンセンタード/フォ–カシング指向セラピーでは何が生起するのか? ―「セラピスト TAE」による質的分析のパイロット研究―.『現代福祉研究』*12*, 141–163.
末武康弘（2014). ジェンドリンのプロセスモデルとその臨床的意義に関する研究. 法政大学大学院人間社会研究科博士論文.
高木憲子（2019). 心理臨床初学者の自己理解の要点―TAE ステップを用いた体験知の質的分析―.『作新学院大学臨床心理センタ–研究紀要』*12,* 1–8.
高橋寛子（2017). 心理臨床教育における体験の言語化とその意義―TAE の‘Dipping＆Crossing’ による俯瞰化・普遍化・構造化―.『山梨英和大学紀要』*16*, 1–14.
田中睦美（2011）. クライアント理解を深めるための「全逐語ベースセラピスト TAE」の臨床的適用の試み. 明治大学大学院文学研究科臨床人間学専攻修士論文.
田中睦美（2016). 試行カウンセリングの TAE 分析. 末武康弘・諸富祥彦・得丸智子・村里忠之（編著）『「主観性を科学化する」質的研究法入門』（pp. 205–215). 金子書房.
山田美穂（2019). ダンスムーブメントセラピーのトレーニングにおける自己探索のプロセス. 『人間性心理学研究』*36*(2), 193–205.
山下佳久（2021). TAE を用いて心理的援助者としての“よりどころとなるもの”を捉え直す過程の研究. 日本人間性心理学会第 40 回記念大会プログラム発表論文集. 55.
吉水ちひろ（2021). 心理臨床家養成における初期の学習プロセスと成長―グループ・TAE（Thinking At the Edge）を用いた振り返りの分析から―.『仁愛大学附属心理臨床センタ–紀要』*16*, 15–29.

臨床実践の内省

Hendricks, M. (2004). A theory of unconditional positive regard in psychotherapy. *The Folio, 19*, 55–79.（日笠摩子（訳）(2004). 心理療法における無条件の肯定的関心の理論.）
木村喜美代（2014). 集中内観における内観体験の質的分析. 内観研究 *20*(1), 27-38.
木村喜美代（2016). 集中内観とフォーカシング―フェルトセンスの観点からの分析―. 末武康弘・諸富祥彦・得丸智子・村里忠之（編著）『「主観性を科学化する」質的研究法入門』（pp. 217–228). 金子書房.

奥村友惟（2021）．心理療法家の自己開示がジェンダーに関連した心理療法場面に及ぼす影響―TAE を用いた検討―．法政大学大学院人間社会研究科臨床心理学専攻修士論文.
小高佐友里（2019). スクールカウンセラーにとっての予防教育の意義―TAE を用いた質的分析を通して―.『法政大学大学院紀要』*83*, 17–29.
中島妃佳里（2013). ジャーナリングの意義とその方法.『関西大学臨床心理専門職大学院紀要』*3*, 21–30.
仁田公子（2016). 心理療法におけるサイコセラピストの内観の意義―TAE による内観体験の意味解明の試み―.『内観研究』*26*(1), 87–93.
末武康弘（2013). パーソンセンタード/フォーカシング指向セラピーにおいて生起するプロセスの理論化の試み―TAE を用いた質的分析から―.『現代福祉研究』*13*, 23–45.
末武康弘（2014). ジェンドリンのプロセスモデルとその臨床的意義に関する研究．法政大学大学院人間社会研究科博士論文.
末武康弘（2017). フォーカシングと TAE をその他の方法とともに多元的に活用するセラピーのためのガイドの作成―多元的フォーカシングセラピー（pluralistic focusing therapy: PFT）のガイド―.『現代福祉研究』*17*, 7–29.
高橋寛子（2012). セラピストの「実践知」を言葉へと開く試み―「TAE」（Thinking At the Edge）の心理臨床実践研究への適用―.『京都大学大学院教育学研究科付属臨床教育実践研究センター紀要』*15*, 69–82.
筒井優介（2014). カンバセーション・ドローイングを連続的に行うことの臨床的意義について.『関西大学臨床心理専門職大学院紀要』*4*, 53–61.

発達

金沢理沙（2015). 大学生の「居場所」の感覚とその変化のプロセスの研究―フォーカシングを援用した半構造化面接についての TAE による分析―．明治大学大学院文学研究科臨床人間学専攻修士論文.
小林まどか（2022）．恋愛不要な大学生の恋愛・性・結婚に対する価値観の検討―TAE による質的研究の観点から―．法政大学大学院人間社会研究科臨床心理学専攻修士論文.
藤井翔大（2018）．喪失感の受容におけるノスタルジー的感情体験の心理的機能およびその質的特徴の分析―大学生における語りについての TAE を通して―．法政大学大学院人間社会研究科臨床心理学専攻修士論文,
山口美香・得丸さと子（2010). 現代日本人の加齢にともなう主観的幸福感―TAE を応用した質的研究―. *The Folio, 22*(1).
山口美香（2012). 老いの超越の質的意味に関する研究―新しい分析法 TAE（Thinking At The Edge）を用いて―．日本社会事業大学博士論文.

TAE の手順・応用・簡略化に関する言及

Fendler-Lee, E., & Hofmann, T. (2024). *Thetaland – The game of inquiry*. Focusing Institute.
小坂叔子（2024）．ARTS-BASED TAE の試み．日本人間性心理学会第 43 回大会発表論文集, 86

Krychka, K. C. (2006). Thinking at the Edge: Where theory and practice meet to create fresh understandings. *Indo-Pacific Journal of Phenomenology, 6*, 1–10.

Lee, R. (2018). *Commentary on new Large DF Form*.

諸富祥彦（2022）．カウンセラー、コーチ、キャリアコンサルタントのための自己探究カウンセリング入門―EAMA（体験-アウェアネス-意味生成アプロ–チ）の理論と実際―．誠信書房．

Nelson, K. (2004). Starting TAE from a strong position. *The Folio, 19*, 27–31.

Schoeller, D.& Thorgeirsdottir, S. (2019). Embodied critical thinking: The experiential turn and its transformative aspects. *philoSOPHIA, 9*(1), 92–109.

末武康弘（2017）．フォーカシングと TAE をその他の方法とともに多元的に活用するセラピーのためのガイドの作成―多元的フォーカシングセラピー（pluralistic focusing therapy: PFT）のガイド―．『現代福祉研究』*17*, 7–29.

得丸さと子（2008）．『TAE による文章表現ワークブック―エッセイ，自己 PR，小論文，研究レポート…，人に伝わる自分の言葉をつかむ 25 ステップ―』図書文化社．

得丸智子（2020）．3 パート TAE (Thinking at the Edge）とウェブサイト「TAE リフレクション」．『開智国際大学紀要』*19*, 167–175.

得丸智子（2025）. TAE リフレクション. http://taejapan.org/index.html（2025 年 2 月 11 日）

山下佳久（2024）．簡略式 TAE の開発に関する研究―自己探索及びキャリア選択の支援法として―．明治大学文学研究科臨床人間学専攻博士論文．

質的研究

三村尚彦（2013）．質的研究と TAE（Thinking At the Edge）―ジェンドリン哲学にもとづいて―．『関西大学文学論集』*63*(3), 53–76.

末武康弘・羽室久美・梶原亜美・永野美涼（2014）．質的研究への多元的アプローチの試み––TAE（thinking at the edge）をさまざまな質的研究法の中で活用するための着眼点と手続き―『法政大学大学院人間社会研究科臨床心理相談室報告紀要』*10*, 3–15.

得丸さと子（2010）．『ステップ式質的研究法―TAE の理論と応用―』海鳴社．

得丸智子（2016）．TAE の理論と実際．末武康弘・諸富祥彦・得丸智子・村里忠之（編著）『「主観性を科学化する」質的研究法入門』（pp.112–131）．金子書房．

土元哲平・小田友理恵（2024）．質的研究教育のための「フェルトセンスから語る」体験 TAE ステップを用いて「庭の詩」を作成する実習を例として.『質的研究と社会実装』*1*, 35–47.

キャリア選択

寺本妙子（2020）．初等・中等教育における新しいキャリア教育の理解と展開―教員免許状更新講習の実践報告―．『開智国際大学紀要』*20*, 71–82.

得丸智子（2024）．『Thinking At the Edge 漠然緑で考える―ゆくてをつかむ TAE 思考法―』ミズノ兎ブックス．

山下佳久（2010）．TAE が進路決定に与える効果―進路未決定の大学生に対する実践事例の検討―．『文教大学大学院 臨床相談研究所紀要』*15*, 11–27.

山下佳久（2017). TAE が与える進路の捉え直しの過程について―質的研究による過程モデルの生成―.『人間性心理学研究』*35*(1), 63–75.

臨床実践・自己探索

Fendler-Lee, E. & Hofmann, T. (2024). *Thetaland – The Game of Inquiry*. Focusing Institute.

Proß, E. (2012a). Thinking At the Edge (TAE) in der Praxis. *Focusing Journal, 29*, 19–23.

Proß, E. (2012b). Der Belastung eine Sprache geben – Ein (Er)Lebens–Prozess zur Stress bewältigung. *Gesprächspsychotherapie und Personzentrierte Beratung, 1*(12), 10–20.

山下佳久（2024). TAE セッション過程のモデル生成に関する研究―質的研究による検討―.『トランスパーソナル学研究』*18,* 15–34.

山下佳久（2024). 簡略式 TAE の開発に関する研究―自己探索及びキャリア選択の支援法として―. 明治大学文学研究科臨床人間学専攻博士論文.

未分類

鎌田夏実（2019）. 日常におけるフェルトセンスと精神的健康を促進するイメージの関係性の検討―M-GTA と TAE による質的分析の観点から―. 法政大学大学院人間社会研究科臨床心理学専攻修士論文.

上村英生（2017). フォーカシングと TAE を使って書き記すことによる社会の改良.『学校臨床心理学研究』*15*, 41–55.

Schroeder, H. W. (2008). The felt sense of natural environments. *The Folio, 21*, 63–72.（森川友子・淺野涼子（訳）(2014). 自然環境のフェルトセンス）

土本哲平・小田友理恵・サトウタツヤ（2020). 成長の瞬間を生み出す「よいキャリア支援」の意味感覚―TAE ステップを用いた理論構築―.『質的心理学研究』*19*, 46–67.

山下佳久(2021). TAE 研究における動向と今後の課題について.『文学研究論集』*56,* 111–128.

執筆者一覧（掲載順）

得丸智子	TAE 研究会、上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科（非）
髙木亜希子	青山学院大学
西岡良洋	札幌フォーカシングプロジェクト・医療法人北仁会石橋病院
本岡美保子	比治山大学
末武康弘	法政大学
村里忠之	村里心理療法研究所
諸富祥彦	明治大学
守内映子	日本映画大学
海老澤佳輝	日本女子大学附属豊明小学校
佐東香織	TAE 研究会
佐藤聖子	千葉黎明高等学校
山﨑統太	TAE 研究会
山田みょうえ	TAE 研究会
山下美樹	麗澤大学
山下佳久	川村学園女子大学

編集委員会

編集委員長	髙木亜希子
編集委員	得丸智子

編集後記

『TAE アプローチと暗在性哲学』創刊号（第 1 巻）を発刊できましたことを、大変嬉しく思います。ご寄稿くださった皆さま、そして TAE 研究会の関係者の方々に、心より感謝申し上げます。

本研究会誌には、主に「TAE パーソナル講座」の参加者の TAE の実践に根ざした、多様な論考が収められています。創作、教育、研究など、さまざまな領域における TAE の応用は、実践者一人ひとりの経験や問いから生まれたものです。これらの原稿からは、TAE という思考法が日常的な実践にとどまらず、学術的探究の方法としても大きな可能性を持っていることが、あらためて実感されます。

今後も、日常における実践と学術研究の双方を視野に入れ、特定の領域にとらわれない、多角的かつ創造的な視点からの原稿を掲載していきたいと考えております。英語をはじめとする多言語でのご投稿も歓迎しております。TAE のコミュニティに集う人々の多様な声が交差する場として、本研究会誌が育っていくことを願っております。

次巻以降も、多くの皆さまからのご寄稿を心よりお待ちしております。

2025 年 5 月吉日
編集委員長　髙木亜希子

TAE アプローチと暗在性哲学 2025 Vol. 1（第 1 巻）
発行日　2025 年 5 月 16 日
編集者　『TAE アプローチと暗在性哲学』編集委員会
発行者　TAE 研究会（主宰　得丸智子）
E-mail: taeliteracy@gmail.com
URL: https://taetokyo.jimdofree.com/